v. 21:7

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿年 第七号

LIBRARY OF THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告によりて御注文の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

近刊豫告

明治闇黑史は、表面の事實に耳を假さずして常に裏面の消息に注目せる明治年間の活歴史なり、權貴者と浪人、勢力者と無勢力者、强者と弱者とが感情と利害との衝突に依り暗闘せる時代推移の眞相を描寫せる社會史なり

有磯逸郎著

明治闇黑史

紙數約四百頁

上卷には、明治新政府の創設に筆を着け、維新派と復古派の二大潮流を擧げて、公家と浪人、藩主と藩士との衝突を描き、横井平四郎の横殺、廣澤眞臣の慘殺より、愛宕事件を中心として、當時全國に彌蔓せる復古派の面目を發揮す。其の前後に、圓海坊の奥羽十七藩同盟の劃策あり、雲井龍雄の叛あり、大村益次郎の襲擊を前提として、長州騎兵隊の暴動あり、掉尾の運動として、丸山作樂の朝鮮計劃あり

中卷には、征韓論破裂より筆を起こし、全國に磅礴せる士族の反抗運動に入りて、四南戰役の大破裂に筆を收めたり。其の間に江藤新平の叛あり、熊本の神風連の叛、前原一誠の叛あり、前原と連絡せる永岡久茂の思案橋事件、其の後を承け、四南戰役に至りて、士族の黨爰に全敗す。然かも之を前にしては、芝增上寺の燒拂あり、岩倉具視の要擊あり、後には林有造等の政府顚覆運動あり、竹橋暴動あり

下卷には、自由民權論を中心として、初めて我國に起りたる國民大運動を紹介す。立志社及嚶鳴社に依りて鼓吹せられたる自由民權論の勃興は、政黨の現出を促がし、然かも政黨の挫折に依りて、政界再び闇黑に陷り、秘密結社の類四方に起こる。福島事件を先驅として、群馬事件、加波山事件、秩父暴動、飯田事件、名古屋事件、靜岡事件等相繼いて起り、大井憲太郎等の大阪事件に至りて、僅に一段落を告ぐ。

潜める事象の發見は愈よ出で、愈よ新に著者をして筆を擱くに暇あらざらしめぬ、拙速は功遲に劣る、一面期に後れた謗あるところ、其處ぞ完璧の誇の伏する所なるを信ず。

發行所　東京本鄕區西片町　反省社

中央公論

秋期大附錄號

豫告

我「中央公論」は清秋九月を以て秋期大附錄號を發行せんとし、左の諸大家より寄稿の快諾を得たり

小説　夏目漱石氏

小説　島崎藤村氏

小説　國木田獨歩氏

論文　金子筑水氏

論文　綱島梁川氏

新思潮、新趣味の代表者たる五大家によつて成る本號の價値を呶々するは却て愚なるべきを信ず。故に吾人はいはず。偏へに江湖の判斷に一任す。

中央公論第二十一年第七號目次

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

特別社告

中央公論代金の無料安全送金且つ便利なる法

本社は讀者諸君の便利を謀り本年三月一日發布せられたる郵便振替貯金の口座に加入したりしも猶ほ遺憾の點多かりしが遞信省は六月廿七日を以て全規則の改正を行ひ

拂込用紙は拂込人の請求により郵便局にて當該拂込人に無料にて交附すとせられたり此法によりて拂込まるゝときは爲替料は勿論郵税をも要せずして通信し得るのみならず併かも書留郵便より安全なり此法により誌代金を拂込まんとせらるゝときは左の事項を承知せらるべく尙ほ詳細の手續は郵便局にて承合せらるべし

一口座番號　參拾四番

一加入者住所氏名　東京市本郷區西片町拾番地　反省社　麻田駒之助

一拂込人は拂込まんと欲せらるゝ金額に登記料として金貳錢を加へらるべく假令は半ヶ年分金八拾五錢を拂込まむとならば登記料金貳錢を加へ金八拾七錢を送附せらるべきなり

反省社編輯

空文年表

菊版約三百頁　紙質上等

價金五拾錢　郵税八錢

本書の世に行はるる年表類と異る點は年號紀元等の外には史上の事件を擧る事なく餘白として存したり且つ前後通して十箇年一頁としたれば充分なる餘白を供し得ると共に參照搜索に便利なり

其配列には特に意匠を凝し斬新なる方法を用ゐたれば緊要なる事項はすべて漏さず記入したるに係らず極めて簡短に且つ明瞭ならしめたり又各年號に對して索引を設け支那歷代中に於ける小覇王の年號は別表として之を卷末に附したり

各種學校にありて歷史を練習しつゝある人又は專門的に歷史を研究しつゝある人は今後各自に年表の原本を作製するの勞を省き得へし歷史的研究の旺盛なる今日學者須らく之を座右に備へらるべし

年表は攻學者に限らず世上實務に從事する人にも必要あり我國の舊時に於てすら尙各家庭には必ず一部の年代記を藏したり本書は我新時代の要求に應すべき文明式の年代記なり敢て之を江湖に薦む

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地（電話下谷九百十九番）　反省社



第二十一年
第七號
（二百八號）

學生風紀の頽廢は無宗教の弊ならざるや

新文部大臣は、嚴に學生の風紀を取締まるべきことを訓令し、今の男女學生が奢侈、淫靡、輕浮にして、堅實貞固の德を欠き。且つ不健全なる思想より厭世の感を懷き、或は極端なる社會主義に陷るの弊を戒めたり、而して世の多數は此の訓令を歡迎しつゝあり。

文部大臣の戒むる所のものは事實なり、當今の男女學生界に文部大臣の指摘するが如き傾向あることは蔽ふ可らず、思ふに奢侈、淫靡、輕浮其の他の惡弊は、互ひに因を爲し果を爲すものにして其の根源は蓋し一なるべし。淫靡なれば奢侈なり、奢侈なれば淫靡なり、輕浮、厭世、不貞皆淫靡の緣因のみ、彼の文學者なるもの動もすれば男女學生の嗜好に投ずるため、主として情男嬌婦の痴態を描き、新聞雜誌また俳優、藝娼妓の冶容艶姿を掲げ、筆を舞はして之を誇張す、而して男女學生公然之を購ひ看て耻づる色なく、其の家庭も、將た一般社會も亦甚だ之を卑み怪む風あらず、玆に於て青春の意氣燃ゆるが如き男女學生等相率ひて情事に趨り、女生は力めて粧を凝らして嬌態を作し、多くの男書生を吸引するを誇とし、男書生また意匠慘澹として女生を風靡せしめんと欲し、甚だしきは乃ち面に白粉を粧ふて平家の公達たらんとするものありといふ。其の少しく敏きものに至ては、戀愛神聖說を主張し。一種卑むべき獸慾を包むに幽玄微妙らしき哲理の上衣を以てせんとするあり。偶々其の獸慾を果し能はずして失戀の餘り。人生不可解と稱して異樣の變死を

98323
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

爲すものあれば、擧俗滔々恰かも之を哲學者の如く言囃すに至る、薄志の青年相率ひて厭世の感に趨るあり、且つ放縦懶惰にして業を得ず、又情事を成就し得ずして偏へに富人を羨み權者を嫉み、竟に罪を社會組織に歸して極端なる社會主義に傾むくあり、而して學校及び敎師の徒、之を戒飭することを努めず、動もすれば俗勢に媚び生徒の意を迎へて益々其の弊を長ずるものなきにしもあらず、蓋し諸種の學校皆生徒の員數多きを競ふがため、勉強して生徒の意に迎合せんとするのみ。

此の時に方つて文部大臣が慨然として匡救の志を起せるは洵に可なり、唯だ如何の手段を以て其の弊を矯め風を正すべきか、若し男女學生の讀むべきものと讀む可らざるものを甄別すとせんか、多くの新聞雜誌を審査するは勿論、刊行販賣の書籍ある毎に一々之を精閲して以て其の良否を判定せざる可らず、是れ文敎當局の力の得て企及すべき所に非ず、假令之を企つるも、曾て高等女學校の敎科書に所謂四ツ目屋事件なるものありしを思はゞ、其の効果の恃む可らざるや明かなり、男女學生の服裝の華奢を矯むるがため、悉く一定の制服とせんか、之をするのせざるに優さるを論なきも、制服は學校に在る間に限る、家に歸りし後外に出づるに華美を盡し脂粉を粧ふと意のまゝなり、然るも學校の監督到底行渉ること難し、況んや男女學生が互ひに情事を通じて窈りに蜂蝶の痴態を盡すをや、學生苟くも相通ぜんとせば學校の力到底之を禁遏する能はず。

蓋し近時敎育の通弊は智才の啓發に重きを置きて品性の修養を忽がせにするにあり、試みに小學校を看よ、算數理化の敎授能く屆きて幼兒の智慧驚嘆すべきものありと雖も、品性を修養すべき禮法をすら敎へざるが故に、公園の花を摘み枝を折り、甚だしきは人の通行を妨害し、群衆の間に喧囂して些の公德心あらず、又他に對する同情厚からず、其の少しく長じて中學生となるや、幾何博物歷史の智、往々舌を捲くべきものありと雖も、同胞に對する同情と禮儀とに至ては

却つて殆んど見るべきものあらず、中小學校總て倫理教育を重んずといひ。忠孝を本義とし德器を成就するを以て學生の分なりと示し玉へる彼の教育勅語をば、式典ある每に之を捧讀し、且つ平生之を口授するを例とすといふも。教師の教授畢竟形式に流れ口舌に止まり、曾て躬行實踐を以て男女學生を率ゆるもの多からず。多くの教師は教授を切賣りし、多くの生徒は教授を切買ひす、其の間師弟の情誼の見るべきもの甚だ少し。故に才智餘りあり、聰慧人に超ゆる男女學生はあり、操行堅貞にして剛毅誠愨なるものは極めて稀なり

且つ最も深く男女學生を感孚すべき今の家庭に在ても、窮屈ながら自から威嚴あり秩序ありし古の武人の家風なく、固陋ながら明神を崇め如來を尊べる昔の素町人土百姓の朴實敦厚なる風儀なく、所謂元老なるものは公々然として其の邸宅を待合化し、紳士紳商はまた花柳の巷に出入し、甚だしきは妻妾並び置きて明白地に將た暗々裏に、家庭に幾風波を捲起すあり、父母兄弟姉妹個々に品性を高くし名譽を保つを重んぜずして、却つて黄金の鎖、珠玉の指輪、羅綾錦繍を裝ふを以て貴しとす、出ては學校に在り、入りては此の家庭に居るもの、夫れ如何の人と爲るべき、近時男女學生の風紀の漸く頽廢する、蓋し必然の結果なるのみ

吾人の見を以てすれば、當今の弊は宗教道德の重んぜられざるにあり、各人各家眞摯に宗教を信奉するとなく、從つて神佛を崇めて己れを守り獨を愼むの風なきと。是れ學校及び家庭を通じての最大缺陷なり、今日學生風紀の頽廢せる根源は一に茲にあり、彼の歐人が家々少くも聖書の一本を供へざるなく、朝夕の起臥に神明を念じて祝禱し。己れある處必らず神ありて衞ると信じ、當に安怡沈勇にして而して苟くも自から欺かざるは、今日の文明ある所以ならずや、其の人榮へ國隆んなる所以ならずや、若し我が男女學生に限らず、總ての人皆神佛を尊びて之を信奉し之に歸依すると猶ほ歐人の如くならば、而して忠貞孝義悌順を旨とせば、其の家庭は常に和煦春風の如く、之に感孚せらるゝ子弟敦厚誠愨ならざらんとするも得べからず、且

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つ學校また品性の修養を重んじ、勵ますに堅實忍耐の德を以てし、訓ゆるに忠貞孝順の精髓を以てせば、男女學生の思想常に健全活潑にして、淫靡の書籍新聞あるも顧みるものなく、奇矯激越の言說あるも聞くものなく、冶容嬌態は卑められて剛毅樸實なるもの重んぜられ、驕奢輕浮の風地を拂ふに至るべし、經世の士思はざる可らざる也

然りと雖も現在の我が宗教なるもの、果して時代の缺陷を補ふの力ありや否や、今の宗教家なるもの果して人々家々の信仰を享けて其の生命を新たにすべき德操資望ありや否や、嗚呼是れ疑問なり、然り、吾人は之を以て敢て今の宗教家の發奮を促さんと欲す、蓋し當今の社會全般の大弊は、宗教道德の信仰確定せざるに在り、而して宗教界の弊は新たなる國運に乘じて文明の新人を活かし、之を啓發し指導すべき大善智識の乏しきに在り、新文部大臣已に僅かに一隻眼を開けり、天下豈大活眼を開きて三千世界を光被するもの莫かるべけんや、學生の風紀問題は其の形甚だ小なりと雖も、固と是れ現時代缺陷の映射せられしのみ、此の意義よりいへば、實に我が社會上の大問題なり、吾人は我が經世の士及び宗教道德に一身を捧ぐる人々が、深く思を茲に致さんことを望む。

博覽會問題

東京に開かるべき博覽會を、內國勸業博覽會とすべきか、將た萬國博覽會とすべきかを調査するため、農商務大臣は若干の官民を擇びて其の委員としたり

衆議院は之を萬國博覽會と爲すの動議を可決し、且つ若干の調査費を可決したり、衆議院を以て實際に國民の輿望を代表するものとせば、萬國博覽會は日本の國論なりと做すも亦不可ならず。

然れども是れ小ならざる問題なり、利害の關係殊に汎く且つ大なればなり、吾人今姑らく其の可否を斷定することを避け、當然研究すべき問題のみを揭げて以て世上諸君子の參考に資するに止めんとす。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第一、萬國博覽會の主張者は、之を以て日露戰役に於ける我が大捷利を紀念せんと欲するに似たり、若し果して戰勝紀念のためと爲さば、戰敗國たる露西亞は之に對して到底慊焉たるを得ざるべし、而して露西亞と同盟の誼ある佛蘭西の如き、晏然として日本の萬國博覽會を贊同し得ざるべし、而して露西亞の好意を失はざらんと力むる獨逸の如きも日本に贊同するとを躊躇せざるを得ざるべし、而して露佛獨の感情を害するとを好まざる墺地利、伊太利、西班牙、諾威、瑞典、和蘭の如きもまた又然るとなきを保せず、果して然らば名は萬國博覽會といふと雖も、汎く歐洲列國の贊同を得て其の出品を蒐集し能はざる掛念なきや否や、抑もまた列國の面白からざる感情を誘致してまでも、必らず萬國博覽會と爲さゞるを得ざるや否や

第二、或は來る明治五十年を期し、我が天皇陛下御即位五十年の紀念として、萬國博覽會を設くべしと做すものあり、其の萬國博覽會を開かんと欲すれば、今後十年の日子を其の準備に費すの必要當さに之れあるべし、然れども御即位五十年の大典果して必期し得るや否や、吾人君子の情として、陛下の幾久しく健在し玉ふとを祈るや切にして、且つ陛下今日の御健康より拜察すれば、恐れ多き申條ながら聖壽八十九十の芽出度まで保たせ玉ふと疑ひなきに似たるも、人生は實に朝夕を測られず、之を恃みて御即位五十年の紀念と爲すが如き、果して萬全と稱すべきや否や

第三、假令戰勝又は御即位五十年の紀念と爲さず、米佛の例に倣ふて單に産業の發展を促がすがための萬國博覽會と爲すも、其の財源は果して之を得るの道あるや否や、世或は萬國博覽會の總費額を二千萬圓とし、其の過半を佛國に倣ひ割增付債劵(富籤)によりて募集すべしといふものあり、割增付債劵を以て一千萬圓を募集し得るや否やは姑らく措き、萬國博覽會は果して二三千萬圓にて創設し得るや否や、米國及び佛國の例によれば、眞の萬國博覽會として世界に不面目ならざるものを設けんには、少くも一億圓の資本を要すべし、日露戰役の後を承けたる今日、我れ果して一億

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

圓を博覽會に投ずる餘力あるや否や、抑も又此の一億圓を投じて、萬國博覽會以上の効果を奏すべき事業を經營すると却つて利益ならざるや否や

第四、果して萬國博覽會を開設すとも、我れは世界の來客を招待すべき設備を具有するや否や、日露戰役後、少しく歐米觀光客の來るもの增加するや、日本の首都に於ても之を宿泊せしむべきホテルに乏しといひ、或はホテル官營說を唱ふるあり、甚だしきは民間有數の紳士にして、堂々たる國家の一機關を置く農商務省の廳舍をホテルに轉用すべしと稱するに至る、斯く施設不十分なるに拘らず、萬國博覽會を開きて公然歐米の客を招くも、果して之を宿泊せしむるに足るのホテルすら有らざるの失態を見ざるや否や

第五、萬國博覽會に依て多く來遊する所の歐米人は、日本に宿泊すべきホテルすら無きに失望し、其の市街家屋の矮小にして、汽車亦矮陋且つ遲鈍を極むるに呆れ、堂々たる首都に於てすら道路らしき道路なく、晴天には萬丈の黃塵を揚げ、雨日には滿目泥田なるに驚ろき、彼の汚物を排除すべき下水の設けすら無きに愕然たると無きや否や、且つ斯の如くにして、我が日露戰役に由て贏ち得たる名譽をば、却つて萬國博覽會のために毀損するが如き結果を見ざるや否や、蓋し萬國博覽會は世界に對する自國の廣告なり、而かも其の廣告たる、却つて自國の缺點を廣告するものとならざるや否や

第六、シカゴ、巴里、聖路易の三市は、近く十五六年間に相續で萬國博覽會を開きたりき、而かも其の商工若くは都市の繁榮を助成するに於て、實際幾何の効果を收め得たりとするぞ、近頃萬國博覽會を開きたるとなき紐育、伯林、維也納、倫敦等は、萬國博覽會を開きたる都市と知らず如何の差違ありや、萬國博覽會の眞質の利害は最も冷靜に之を打算するの要なきや否や

第七、若し之を內國勸業博覽會とし、稍々其の規模を擴張して、少くも大阪市の開きたりし其れの三倍と爲し、內國品の外歐米の出品をも促がす方、萬國博覽

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會に比して相當の處置ならざるや否や、吾人は博覽會調査委員並びに實業に關する世上の諸君子が。能く之を研究せんことを望まざる可らず

但し内國勸業博覽會とするも、左の諸點は十分研究を盡さゞる可らず

(イ)明年東京府の催ふすべき博覽會と合併すべきや否や、抑もまた各自單獨に催ふすべきや否や、但し内國勸業博覽會として、前記(第七)の設備を爲すとせば、少くも三年の準備期間を要すべし

(ロ)内國勸業博覽會の場所は、之を府下大森とすべきか、或は田端若くば王子附近とすべきか、交通の便宜、水道下水、電線(電信電話、電力、電燈等を含む)瓦斯の布設に孰れの地を便とするか、抑も又場所の廣狹は孰れを擇ぶべきか

(ハ)此の設備費用少くも一千萬圓以上を要すべし、之を支出する方法如何、割增劵債劵の發行を爲すべきか、抑も又國庫及び東京市、東京市の負擔割合を如何すべきか

此等の事は、速かに調査して速かに決定せざる可らず。(六月十八日稿)

男女學生交際論

福田英子

過去半生涯、回顧しますれば盡く數奇失意の文字に盡きますのが私の歷史、斯樣なものが何ゝさかしら顏に御說き申すといふ柄でもありませんが、然し、後進の青年婦女に向つて、成るべく人生の行路に失敗なかれかし、幸福なれかしとは切に私の祈るところでありますから、考へて居るだけは御話致して宜しいのです、男女學生交際と申すことは、理想としては宜しいことですが、然し理想だけてありますね、之を今日直に實現するとなつては少し首を傾けなければなりません、ては其方法といふことになりませうが、色々思つても見ましたが彼れや此れやにかゝづらつて居りますので、それのみ思ひ續ける譯にも行かず、之ぞと確か

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

な意見を申上ることとは出來ません、先づ差し當つての考ては、男女兩性とも自尊の念も自信の力も乏しい今日ては、交際には弊害の離れないのは事實てありますから、一般社會主義の人達にはあらゆるものを自由にせよといふのが主張てあります中にも、私は此點だけは左樣に輕卒なる論斷は出來ぬと思ひます、唯此樣な理想を抱いて之から新たに生れ出づる男女兒を性の別なく養育もし敎育もし、一向純潔なる交際を爲し得る樣にと注意し行き、大きくなつても其態度を續ける樣に致しますならば、始めて遺憾なき交際が起ること丶信じます。

元來男子と女子と交際する上に、唯理性のみを働かして之に伴ふ感情といふものがなく、又有つても十分制し行くことが出來るものならば、直に現時の兩性を近接せしむることも出來るてせうが、男子といひ女子といひ、御互にそー奇麗にばかりは行くものてはありません、特に女子は理性と申しても自ら局限があり、男子に比較すれば劣つて居るものてあります、男子と女子とに智力の差なしと申す方もあり、又現在に有る樣でも天分に於て差別のあるものでなしなど申す方もあります、堺枯川さんなどは大層、女性最負ていらつしやるので、婦人新論の中にもその樣なことが說いてあります、今日は男子が生活に向つて消費する腦力を、女子は生殖に向つて消費する爲に、腦力の量が違ふ樣てはあるが、本來天賦の量には異なるところが無いのてあると申してあります、ても之は如何やら疑はしい、此御說が正しいと致せば、女子も生殖作用を止したならば男子同樣の智力を持たれることゝならなければならぬ筈ですが、實際は左樣でない樣です、能くは存じませんが伺ひますところでは、男子の方は、尤も男子の中にも智力の少いものもありますから、左樣なものはいざ知らず、智力の發達して居る方は、普通成年時期に達します頃には必ず人生問題、宇宙問題といふ樣な懊悩煩悶の難關があるので、之を通過しないものは少いと申すことてすが、斯樣なことは私の知る限りては女子には無いのです、十八九の頃になつても平

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

氣の平左て難なく通り抜けて仕舞ふので、此樣な點を思ひ浮べますと男女智力の差は爭はれない樣です、併し是は今日まで女學の進まない時であつたからそう云ふ高尚なる煩悶が起らなかつたのですかしら、先達て讀賣新聞に轉載してありました某女學生が人生問題につき煩悶を起し自殺せんとして心機一轉しそして村上專精氏に質問書を送つた其文意が掲載してありましたが、斯かる女學生が讀書する樣になつたら、天分に於て智力の差ありと思はれぬ樣ですね、併し私は女子はどこまでも智の動物ではなくて情の動物であると思ひます、でも女子に獨身生活の傾向が此頃有りますつて、男子と拮抗の態度が有りますつて、いゝ、そーな樣です、が之は私のさもしい心に映るからかと思つて、心に恥づるといふ時もありますけれど、如何も或る確乎たる信念が有つて、其爲に男子の手を離れ、力を離れ、己れの智力で獨立不羈の生涯を送り通す、通して見せるといふのではなく、口には何と言つても多くは、はめが獨身生活をせなければならなくなつたので、修學し居る間に年齡が加はつたとか、或は失戀とか何とかかとか色々の原因有つての上と思はれます、今日高等程度の學問をして居る人達で三十超ゆるまでも獨身で居り、終には我を折つて結婚といふことになる方も往々あるので、そーなりますと大抵緣付先には先妻の子供も有るといふ始末で、色々辛い境遇もあるのですが、それでも緣付かずには居られなくなるのです、此等を能く見ますと、殘念ながら、己れのさもしい心からと思つた想像を、全然否定する譯にはまゐらんのです、然し之が當然なので無理ではありません、女は何處までも情の動物で智の動物ではなく、之を忘れて智力で獨立し、男子と生存競爭をしやうなどゝいふことは間違つて居りますから、然し珍しい、一寸判斷の付かぬ例もありますがね、私の存じて居るさる大家の令孃て、成年になつて他へ御結婚になりましたが如何いふ譯か夫婦關係が結ばれない、夫婦關係を御拒みになる、爲に全然良人の方の嫌疑を集め、必定他に未來を契りし男のあることとならんと、種々雜多の侮辱に包ま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れて居られたが遂に或夜何れへか身を匿されたので兩家とも非常の心配で探索せられた効果空しからず某處に潜んで居られましたのを種々に宥めすかして連れ歸られ御兩親の膝下にて色々御尋ねがあつても何も分らない、元々何も御答へにならない、此令孃は唯一粒種でもあり、父君には特に御寵愛が深いので、身貴族であるにも係らず、小さい折には自ら背負つて溫泉宿へも遊びにいらしつたといふ程でありますから、可愛いお子のことでもあり、決して咎めたてはせぬといふ御思召、さ程までに思ひをかけたる男子の若しあるならば、一所にもしやう、包むな、話せと、お諭しなされたが、その樣な方のあるでなしとばかり、口を噤んで更に何事も仰しやらず、眞の理由は親君のみかは其他誰にも御物語ありしとは聞かず、憂に痩する身は病を呼び、病は更に憂の身を責んで、坐ろ心の父母君を見すてゝ遂に彼の世の人とおなりなすつたのでありますが、實に世にも珍しい例で、心裡一點の秘密、秘密は秘密を葬つてしまつたので神ならぬ身の誰にも知るゝ筈はなく、今猶ほ人の談り合つては首傾くる次第であります、之に就いては、私も最初は良人君や親君と同じ樣に考へましたが、それは間違つて居つたのです、さらば、具體的の人間ならずも、朧氣ながらも抽象的に書いた理想の人でもあるので、今身を委した夫といふが其條件に合つて居らぬのであらう、さもなければ分らぬとも言はれるでせうが、そーも亦思はれないのです、理想に夫を定むるなどいふ人ならば、之に伴ふ智力の發達も見るべきものがなければならぬ道理ですが、どちらかと言へば、寧ろ知識は幼稚な方なのですから。如何しても分らんのです、唯婦人としては餘りに執拗に過ぐるほど意志の強いのには驚きますね、平素別に親近した怪しいものがあるでもなし、が唯一の不思議は家庭敎師です、無論女ではありますが、何でも怪しいのは之れなので、大凡そ其女の爲であらうといふ鑑定です、御結婚後も其女が御緣付先を幾度も御尋ねして誘ひ出した事もあるそーで、後には里方の親君にも知れたので斷然御出入は御斷り、御病床にさへ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

途に一回御通しにならなくつてお仕舞なのです、此婦人と令孃、其處には如何なる關係が潜んで居るのでせうか。私は監獄に居りました時分に色々不思議な珍しい事實が、人知らぬ社會の裡面、暗黒なる裡面に潜在して居るのを發見して驚いたのです、即ち大阪、神戸等の監獄内には女囚間に言ふべからざる非倫の行爲が演ぜられて居るのです、之が實に奇怪なる現象、否、變象ともいふべきもので、同性間でありながら、全然異性相愛の關係と同一程度にまでも上る樣です、玆に男子に當る方の女囚と女子に當る方の女囚とあります、前者の刑期が二十ヶ年で後者の刑期が三四ヶ月であります、すると後者は滿期出獄を許された後にも眷戀の情止み難く故意に罪を犯して再び獄窓の人となり、相見て樂むといふ次第で、其刑期短く、更に出獄に至れば更に同一手段にて戻り來るといふ始末、此樣なものゝあるのを親しく見て知つて居ることですが、此ゝる人知らぬことには別段法律の制裁もなければ罰することもならず、今日猶ほ行はれ居ることとでせうと思ひます、此等を思ひ廻すと、今の令孃の事も何とか解釋が出來ますまいか、結婚を忌む、男を嫌つた人として例を擧げて見たのですが、其眞因は那邊に在るのかは分りませんが、然し理性に訴へた大した原因などのあらうとは思はれません、先づそれはそれとして、私の見ました範圍だけでは、獨身主義者中に格別偉らい方を見受けません、或は外にあるので不幸にして私の目に映らないのかも存じませぬ、先づ私の見ましただけで申すならば、女子は如何しても男子に比べて智力は短いのです、そして反對に危險の多い情といふものに富んで居るのです、誘惑され易いのです、其處に即ち理性の發達を勉めなければならない、理由がありますまいか、多くは望まないが少くも其盲目を性とする情慾を統馭するだけの、指導するだけの發達が欲しい、男子に自制の念が強く、又女子の人格を敬重して、少くも器械視せざるまでの程度に考が進んで居るならばいざ知らず、さも無い限りは實に危險である、此點益々今後の女子教育の勉めなければならぬ事と思

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はれます、

前に男女交際の間には必ず一種の感情が潜む樣に申しましたけれど、それは必ずしも刹那々々に明瞭に意識されて居るといふてはなく、無意識に過ぎて居る中にも其間には一種の情が纒つて居るといふのです、お互に同性間に對話し居る時と異性間に對話し居る時とては、比較して見ると大なる感情の差異が有るのです、性質の異なつた感情があるのです、先づ同じ話材でも、之を同性間に語つて何等の興も無かつたものが、異性間に語つて我知らぬ快味の有るものがある、之は何で有りませうか、異性間の愛であります、此愛が異性間には如何しても離れません、先づ一男子と對話するに、其談話中に何か一節心に響く感ずべき說があります、其時には既に一種の情が動いて居るので、即ち愛であります、此不用意の間に起る心が實は冥々裡に吾人を左右する力となるのですから、頗る危險なものであります、これを理性の指導に從はしめるといふことが確かにならない間は如何しても男女、特には青年男女に自由自在の交際を許すことは出來ますまい、然し之まで理性々々と頻に述べてまゐりましたが、單に理性は理性、情は情とあつただけでは何にもなりませぬ、それは言ふまでもありませぬが、然し事實に於て兩者の調和といふ事は頗る容易ではありませんので、私の知つて居る青年の方で、理性は發達して男女の關係なども斯くあり、斯く爲すべきものと知り居りながら、情には脆く、さらぬ人に契を結んで、絕えぬ精神上の苦痛を持つて居る人があります、然し又其方とは違つて何處までも理性を働かし、純潔なる生涯はエンジエルかと思はしむる程の方がありますが、さりとて人に理性と醇情の權化があるではなし、唯一時壓服して置くだけですから時ありて死灰再燃の煩惱が心田に跋扈せないとは限らない、之が跋扈する其度非常の悲觀に沈み、苦痛と戰はれるのですが、然し其處に言ひ知らぬ樂みがある、苦悶の結果、理性が情を屈服せしめた時の心地といつたらないと申して居られます、實際それはそーなのです、そこに人間としての

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

價値があるので、劣慾のみて生れた動物は如何なることをしても責むべからざると同様に、理性のみて生れた人間が有つたとしますならば、又褒むるには値せぬと思はれます、努力のあるところ價値の有るところではありますまいか、然らば此處に又意力の必要といふことが認められます、即ち男女交際には盲目的感情を抑ふる力を強くする工夫が必要であります。

ところが、今日では長く離隔されたる歴史を持つて居ることですから、兩性相接する刹那の感情が頗る盲目的に熾烈であり、弊害を醸す度は決して少くはありません、從つて十分なる監督者のない限りは自在に放置して交らすことは出來ぬと思ひます、若し兩性の離隔が今日ほど甚しくなかつたならば、感情の盲目的に熾烈なることも亦今日ほどではあるまいかと存じます、例せば、賤しい譬にはなりますが、藝娼妓は平生男子と談り合つて居る爲に、男子を見るも珍しからず、從つて特別な感情なども餘り起らない様に きいて居りますが、そー致せば、或は藝娼妓の方が其心事に於ては世の青年婦女よりも純潔かも知れません、此邊より考へて、兩性をして兩性の差別を忘れる様に、否覺えぬ様に子供の時からひとしなみに養育する必要があるかと思はれます、だが世の放任論者には賛成は出來ません、放任論者の考へるところでは、此一種異性間の差別を稀薄ならしむる爲には青年男女の交際を自由にし、成るべく其交際範圍を廓大にし、情を放散して一局部に集中せしめざる様にすべしといふ考の様ですが、それは議論としては聴くべき價値は十分にあります、同じ人を愛するにしても、多數の人に交れば、取捨の眼識強くなり、甲なる人に一ヶの長所を發見して愛を感ずると同時に、又其短處も眼に映り、更に其短處を補ふべく乙なる人に長處を認めて愛を感ずると同時に又其短處も眼に映り、斯くて丙、斯くて丁と漸次に波及して際限なく、然るに元來人は圓滿を望む性質のものですから要求が大となり、容易に或る一人に身も心も打ち任す程の熱愛といふものが起つてまゐりません、それでありますから若しかゝる交際が直に行

はれ得としますれば頗る結構の事であります、が果して之が出來るでせうか、即ち議論は宜いとしたところて、直に多數の人に交ることが事實出來るでせうか、又交際範圍を廣くするといつても日本の今日の有樣では社會の設備にそれを助ける樣なものが出來ては居らず、此點は私共の考て行く〳〵何等かの設備を要すること〻思つて居るのですが、今日ではまだ己むを得ません、すれば如何しても交際範圍の狹いことは免れないので、然るに交る男女の性質はと言つたら前に幾度も申した通りの弱點ありとすれば、如何も唯今行ふといふことは不可能の事と思はれます、考へたならまだ良い工夫のあるかも存じませぬが、今のところでは思ひ付かないのです、先づ理性を鋭くし意力を強くするといふことは今後の教育に待ち、異性間の差別を弱むることは新たに世に生る〻男女兒の養育に求め、兩々歩を近けて今後二十年の後に理想の實現を期するより外はないこと〻思ひます。

經濟學理より見たる社會主義

河津暹

社會主義は現今の社會組織を根蔕より打破して全く新なる基礎の上に置かんとするものなれは苟くも之に關し討議せんとするものは最も沈重の態度を採らざるべからず一時の客氣に趨せ高論放語して快を取るか如きは單に議論として一顧の値なきのみならず世人を誤ると甚しかるべし聞く所によれば小學教員にして社會主義を信じ之を學堂に講ずるものありと予輩は事の眞僞を知らずと雖も、若し果して事實とせば寒心の至りなり何となれば是れ未だ社會世態に通せざる少年の思想をして邪道に導く恐あればなり予輩とても社會主義につきて未だ深遠なる研究をなしたるとなし從て需に應じて筆を甜り紙に對するに臨み衷心平ならずと雖も、予輩の現時本問に對する意見は之に外ならざるか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

故に敢て江湖の先覺に教を乞ひて更に研究の道を開かんと欲す決して後進の士に示すに非るなり

社會主義者の主張する所は人によりて範圍同じからずと雖も若し共產主義等類似の主張より離隔して之を解釋せば社會主義は生產機關は之を社會國家の有となして私人の之を有するを許さずと雖も其の生產の結果は決して生產に參加したるものゝ共有たらしむべしといはず、生產に參加したるものは其勞働の時間の長短に應じて之か分配を享くるを得せしむ。是れ先づ注意すべき點なり何か故に生產機關の私有を許すべからざるか現今資本家勞働者の階級あり貧富の懸絕の勢あるは必竟生產機關の私有を許すが故に、之を有するものは資本家として駟馬を驅つて榮華に誇り之を有せざるものは日夜役々として尙饑餓を患ふるなり、是れ現今社會組織の最大缺點なれば之を改めざるべからず一旦生產機關の私有を廢する時は世に勞働者ありて資本家なし從て階級の爭生せざるべし然らば何か故に各人をして生產物の分配に當らしむるか價値の淵源は勞力にあるはアダムスミス等の經濟學者の教ゆる所にして疑なし、果して然らば勞力を提供して生產をなしたるものは勞力の分量の多少により其勞力の結果の分配を受くるは論理當然の結果にして、若し勞力の多少を顧みず悉く一樣の分配に與らしむべしとすれば勞力をなさゞるものが勞力を提供したる者の辛苦の結果を奪ふに均しく、恰も現今社會に於て資本家か勞働者を使役して生產せしめ而かも其結果を私して富み榮ゆると理に於て均しく天理に悖るものなり。故に其勞力の分量の多少に應じて之か分配に與らしむべきなり。人に能不能あり相集りて社會を成し之が爲に生產するに當り各其司る所同じからずと雖も、社會の爲に盡すに於て甲乙あるべからざれば其勞働の時間の長短により時間切手の如きものを與へ以て他日他のものより勞力の結果を得せしむる證となす例せば八時間社會の爲に生產したるものは八時間と題する切手を與へ之を得たるものは更に他の八時間の勞働に相當する貨物と引換へ之を消費せしむるを許す是れ社會の所得を分配するに最も

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

公平なる方法にして現今社會組織の病弊を一洗するを得べしとなり。予輩は社會主義の主張の基礎を上に述たる如く解釋せりこの解釋にして幸に大過なしとすれば予輩は之を以て經濟學理上架空論にして其の根據に於て甚だ薄弱なりとなすに憚らず。

其經濟學理の基礎にして「勞力は價値の淵源」にありとなさば是れ疑もなく誤れる前提の上に築かれたる樓閣なり何となれば價値は必竟吾人の欲望を滿足すべき程度を示したるものにして或貨財か吾人の欲望を滿足するに適當なるに從ひ價値か多く。其の生產に要したる勞力の多少の如きは與らざるなり。例せば千辛萬苦して海底より得たる眞珠も偶然に拾ひ得たる眞珠も其價値に於て差異あるべからず、果して然らば勞力は價値の淵源にあらざるや論なし。假りに一歩を讓りて勞力を以て價値の淵源となすも、勞力を單に勞働時間の長短によりて之を測り勞力の種類を認めざるは理論上正當にあらず同じ勞働時間にても勤勉なるものが勞働すると怠惰不熟練のものが勞働すると其結果に於て同じからざるは明なり。之と同じく單に手足を勞して生產する者と精神を用ゐ思慮を廻すものとは其の社會所得の分前に於て同じからざる筈なり。社會主義者にしてこれ等の區別を無視するは誤謬なり。而かもこのよたる決して私有財產制度とは全く關係あるべからず。

社會主義者は生產機關の私有を廢すれば資本勞力の軋轢なく從て勢力の不平均を生せず世に不滿の聲と有ゆる罪惡を斷たしむるを得べしといふ。夫然り豈夫れ然らんや若し論者の說く如く我等をして悉く勞働者となすも、果して我等をして全く平等ならしむるや否やは大に疑はし同じ朋友の中にても或は人の欣慕する所となり或は人の嫌惡する所たり人の欣慕する所自ら勢力の集る所なるは吾等の常に目擊する所なり是れ今日の如く私有財產制の與らざる太古草昧の世に於ても見たる所にして酋族中敢爲なる者は自ら勢力を得て遂に酋長の素を成せしに非ずや假りに我等勞働者は平等にして勢力の不平均を生せずとするも、論者は我等が所得を得るには時間切手を受取るべしと敎ゆるにあらず

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

や之を司るものは何人ぞ、謂ふに官吏なるべし何となれば官吏は國家社會を代表し眼中公益ありて私益なければなり。官吏が所得の分配を司り、其の全權を掌中に握るに至らば其勢力依然として舊時の如きを得るか私に謂ふに其の勢力は日を逐ふて旺盛なるべく從て論者の甚だ憂ふる勢力階級の發生を見るに至るは明なり。更に社會、階級の間に經濟力に於て甚しき不平均なきを得れば世に不滿の聲もなく有ゆる罪惡其根を絕つとなすか如きは餘りに物質的生活に重きを置くものなり。衣食足つて禮節を知るは疑あるべからずと雖も、これ等物質的欲望を滿足すること能はざることが社會の有ゆる罪惡の根源なりとなすは大なる誤謬なり是れ予輩の說明するまでもなく眼前の事實が之を證して餘あり。我等の生活には物質的生活以外に廣き〳〵範圍あり夫れ之を思はずして、單に物質的生活を以て幸福の舞臺となすは、やがて彼等も現今資本家富豪のなす奢侈の生活を理想となすものに非るか。予輩を以て之を見るに十九世紀が勞働問題社會問題を生めるは他に夥多の原因あるべしと雖も、世人が物質的生活に重きを置くこと漸く敦く、從て社會人士の間に貧富あり物質的生活上甚しき懸隔あることか從來に比し彼等を刺激し其位置を自覺せしめたるも一大原因をなすものに非るなきか、

更に社會主義者は生產の結果につきて之を私有となすを妨げずといふ。同じ所得にても之を利用するものゝ巧拙によりて我等の欲望を滿足する上に於て甚しき差異あるは疑あるべからず從て其生活も亦同じからざるは明なり。論者は其日暮を理想とし貯蓄を以て最も忌むべきことゝなすか、若し貯蓄を以て排斥すべきことに非ずとせば遂に貧富の懸隔を生ずる恐なきか、予輩は私有財產制は夥多の弊害の之に伴ふを承認す、然れども私有財產制の根源は人情の至微の點に存することを承認せざるを得ず未來を思ふの念はやがて子孫を思ふの念なり子孫を思ふの念はやがて私有財產制の根源をなすものに非るなきか。

予輩はこゝに社會主義を細論するを欲せずこの邊

の性質は予輩が以上略述したるよすら尙乾燥無味となすものなるを信ず況んや其以上をや然れども以上略述したるとによるも讀者は社會主義は經濟學說より觀察する時は夥多の缺點あるのみならず架空論なるとを承認し給ふべし。予輩は現今經濟組織には夥多の欠點あるを承認すれども、他に之と代つて實行し得べき良制度を示されざる間は直ちに現經濟社會を根蔕より顚覆するに同意する能はず是れ平和を致す所以にあらずして却て紛亂を來す本なればなり

經濟學理より社會主義を觀察すれば上述の如き缺點ありと雖も其の現今社會組織の病弊とする所を指摘して之を警告し、痛罵し以て爲政家をして政を爲すに常に社會の基礎に注意し社會下層のものの幸福を無視せざらしむると同時に富豪を初め稍餘裕あるものを戒むる上に於て大なる力なりしとは之を承認せざるを得ず、社會主義者にして其主義を標榜して社會の顚覆破壞を迫るに非りせば恐くは社會改良主義も從て之に本く勞働者保護の諸制度も起らざりしやも未だ知るべからず、少くも今日の如き進步をなさゞりしは疑あるべからず社會主義は現今經濟社會の警鐘たり、之をして惰眠を許さず予輩はこの消極的の功力につきても多くいはざるべし是れ社會主義者の常に天下に誇示する所なれば重ねて之を論ずるの必要なければなり終りに臨みて予輩をして前言を繰返すを許さしめよ。社會主義は架空論なり之を實行すると能はず故に之を硏究するは妨なしとするも之を以て論議の題目とし識見の未だ定まらざる靑年をして之を弄ばしむるは害ありて益なし彼等には當面のなすべきとなさゞる可らざると甚だ多し何を苦んで現今社會の基礎に疑を挾み空想に耽るの餘裕あらんやと。

批評家の資格と本領

金子筑水

批評家とは、如何なる資格を備へ、如何なる事業を其の本領とするか。學者には學者たるの資格あり、學

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

者たるの特別なる事業あり、作家には作家たるの資格あり、作家たるの特別なる事業あり。批評家にも、また批評家たるの特別なる資格あるべきか、批評家たるの特別なる事業あるべきか。

廣く批評家といふ場合には、種々なる意義に於ける批評家を含む、歴史批評家、政治批評家、哲學批評家、美術批評家、社會政策批評家、經濟批評家、文明批評家、文藝批評家等、其の他尚さまざまなる批評家あるべし。茲に問はんとするは、此等種々なる意義に於ける全體の批評家にはあらで、主として狹義に所謂批評家、すなはち文藝並びに文明に關する批評家に限る。普通に批評家といふ場合には、文藝並びに文明批評家を意味すること多く、而してまた此の意味に於ける批評家が、他の種類の批評家よりは、一種特別なる資格を備へて、一層廣き範圍に於て、一種特別なる事業を有せるものゝ如く考へらる。他の種々なる意義に於ける批評家の資格と本領とは、假令之れに關する種々なる疑問あるにせよ、尚比較的に一定して見やすき趣あり。例へば歴史批評家若しくは哲學批評家の如き、批評家としては、歴史編纂者若しくは哲學組織者とはおのづから趣を異にすれども、尚歴史家又は哲學者として、一定特殊なる學者たるの資格を備へたり。然るに狹義に所謂批評家に至りては、其の資格と本領とは甚だ漠たり、事實、此の意味に於ける批評家ほど、其の資格と本領との曖昧にして、世人に誤解せらるゝこと多きは無かるべし。作家の方面よりは、批評家とし言へば作家に似通へる多少の詩的才能は備へながらも、尚作家とは成り得ざる似而非詩人と罵られ、學者の方面よりは、同じく多少の學才は備へながらも、到底學者とは成り得ざる雜種と賤まれ、學者にもあらず、將た詩人にもあらず、其の資格と本領との曖昧なる者、これ批評家と目せらるゝが如き觀あり。批評家の事業に關しても、普通に世間の見る所は頗る茫たり。普通世人は、批評家とは、作家や學者の如く、其の事業一定せずして、八百屋流儀の極めて雜駁なる者とやらに思惟せる者多し。果たして批評家には、批評家として

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の特別なる資格なきか。果たして批評家には、批評家としての特別なる本領なきか。果たして批評家は、批評家として、作家や學者と相並びて、特殊なる貢献を社會に致す能はざる者なるか。

予輩の思惟する所によれば、批評家には批評家としての資格と本領とおのづから備はり、當に作家や學者と相並びて、相當なる貢献を社會に致すべき者なり。世人が批評家の位置を見ること甚だ輕きは、彼等が批評家の特別なる資格と本領とに就きて、未だ作家や學者の其れの如く明瞭なる觀念を有せざると、また一つには、批評の發達が、學術や藝術に後れて、近代に至りて漸く其の價値を發揮し來りたるとに基かずんばあらず。素より批評家の資格と本領とに就きては、今日未だ定說あるにあらず、世人の之れに關する考も種々雜駁なるべし、予輩はたゞ簡單に自家の管見を玆に記するに過ぎざる也。

玆に記さんとする問題は、おのづから二に分かる、批評家の資格問題と其の本領問題とこれなり、而して此等の問題は、孰れも其の範圍頗る廣きが故に、こゝには單に下の二問題に就きて記することに留めん。曰はく、批評家とは、一面より言へば、詩的才能を備へて、而も純粹の詩人ならざる者、又他の一面より言へば、多少學術上の才能を備へて、而も純粹の學者ならざる者とせば、世に果たして斯かる特殊なる才能ありや、批評的才能とも名くべき一種特殊なる才能ありや、批評的タレントとも名くべき一種特異なる才能ありや、若しこれ有りとせば、如何なる特質を備へたる才能なるべきかと。これ批評家の資格に關する第一の問題なり。更に批評家の本領に關する第二の問題は、下の如く言ひ現はすを得べし。曰はく、大なる批評家に至りては、藝術の批評の外に、廣く文明若しくは人生を批評す、藝術若しくは人生の批評とは何を意味するぞ、又藝術の批評と人生の批評との間には、何等かの關係あるか、人生の批評といふことは、批評家の本領又は使命とすべきものなるかと。これ下に瞥見せんとする問題の要點なり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

先づ第一の問題より始めんか。古來卓絶せる批評家は、孰れも相當なる詩的才能を備へたり、アーノルドやカーライルと言へば、何人も知れる有名なる批評家にして、而も普通の作家以上の詩的才能を備へし者、コールリッヂやレッシングや、孰れも詩人なりしと同時に、また有數なる批評家、ルソーや、ヘルデルや、ジアン、パウルや、近くはニーチェ、ノルダウに至るまで、孰れも卓絶せる批評家にして、而も皆すぐれたる詩的才能を備へし者、斯くの如き類例は、蓋し枚擧するに暇あらざるべし。批評家といへば、作家とは異なりて、或度まで理智の才を備ふべきは勿論なるが、其れにもまさりて批評家に缺くべからざるは、一種の詩的才能なるべし。全然一種の詩的才能を缺きて、單に概念的なる理智一邊のみにては、吾人は之れを正當に批評家と呼ぶを得ず。抽象的に、組織的に、又學理的に、藝術若しくては人生を批判する者あらば、斯くの如き人を批評家と呼ばんこと、必しも咎むべきにあらずと雖も、而も普通には之れを學者と呼び、其の批判をば學者の批判と名けて、嚴密に所謂批評家より區別せんとす。普通に批評家と呼ばるゝには、相當なる詩的才能を備へて、而も或度まで理智に明らかなるを要す。されど、單に相當なる詩的才能を備へて且或度まで理智に明らかなりといふのみにては、未だ批評家の特殊なる才能を盡せりと謂ふべからず、斯かる消極的にして平凡なる解釋の外別に積極的にして、預りて以て批評家の特殊なる才能を明らかにするを得べき眞解釋なくんばあらじ。そも／＼斯かる眞解釋とは何ぞ、批評家に特殊なる才能とは何ぞ。

批評家に特殊なる才能を明らかにせんとせば、先づ批評といふことに必須にして缺くべからざる才能を明らかにするを要す。批評に必須にして缺くべからざる才能とは、之れを種々なる方面より、種々なるさまに解釋するを得べきも、茲には獨斷的に下の如く言ふを得べきか。曰はく、あらゆる美に廣く深く且正しく同情し得るの資を備へて、洽く人生の美に就きて、廣く深く且正しき經驗を備ふること、これ批評家に缺くべか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らざる根本要件なりと。あらゆる美に就きて、深く且正しき經驗を備ふるとは、價値に於て上下高低優劣貴賤なる諸美を、其の價値に應じて正當に感得し經驗せるの謂ひ、美の優劣の價値に就きて、活ける眼識を備ふるを謂ふ。之れを他の方面より觀察せんか、あらゆる人生(廣義に謂ふ人生)の複雜なる諸事業を、具體的に、直觀的に、活けるがまゝに看取して、而も其の根本的にして價値に於て優れて高きものと、枝葉的にして價値に於て低く劣れるものとを、正當に識別して、すべて人生の複雜なる諸事相に就きて、深く且正しき經驗を備ふる、これ批評家に缺くべからざる根本要件なり。予輩はこゝに美なるものゝ內容を人生と解し、人生の根本的にして價値に於て優等なる現象をば、同じく價値に於て優等なる美と解し、人生と美なるものとを、同一物を異なる方面より觀察せるものと見たり。此のドグマを明らかにするには、尙幾多精細なる說明を要すべけれど、こゝには殊更斯くの如き細論にわたらず、單に美なるものを深く且正しく感得することは、やがて人生を深く且正しく感得することとなりと斷言しおくに留めん。人生の複雜なる事情を深く且正しく會得し、あらゆる價値の美に就きて正しき經驗を備へんこと、これ批評家に取りては、其の根本要件なること、詳に說明するまでも無かるべし。蓋し斯かる資格あるにあらずば、到底美なるもの又は人生を具體的に解釋し批判ずる能はざるべければ也。

あらゆる美に同感して之れを直觀し、人生の複雜事相を具體的に會得するといふ事は、これ既に詩的才能に似通へるもの、學者が抽象的に、概念的に、普遍的に、系統的に、論理的に人生又は美を論ずるの才能とは、著く趣を異にせり。美に同感するといひ、人生を具體的に直觀するといひ、斯くの如きは、孰れも感情の發達せる人格に特殊なるもの、此の點に於て、批評家は、著く詩人に似通ひて、情の人たる資格を備へたりとも謂ふべきか。學者の論を立つるや、概念的にして抽象的、論理的にして系統的、精密に順を追ひ序を正して、ひとへに事の精確ならんを本意とす。批評家

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に至りては頗る異なり、其の言ふ所は具體的にして直觀的、學者の如く必しも物の順序を追はず、詩的にしてインスピレーション的、動もすれば撞着矛盾に陷れど、尙學術の容易に到達せざる所を洞破し得るの長所あり。エマーソン然り、カーライル然り、世に卓絶せる批評家と稱せらるゝ者、孰れも斯くの如きインチユイテヴ、タレントを備へざりしはなし。故に廣き意味に於ては、エマーソンもカーライルも、一種の詩人とこそ呼ばれたれ、決して學者とは、呼ばれざりしなり。要するに、批評家は、感情的、想像的、標象的、具體的、直觀的、インスピレーション的にして、學者の資格とは頗る趣を異にし、むしろ詩的才能と類を同うせる所多しと謂ふべき也。

　されど、斯ばかりにては、批評的才能の特殊性は尙不明なるべし、其の根本性は、著く作家の才に似通へりといふも、而も彼れは純然たる作家にあらず、故に彼れは、作家の才に似通ひて、而も作家とは異なれる一種特別なる才能を備へたるを要す、若し然らずば、批評家は、何等獨立せる位置を有せざる者なり。すなはち創作家と批評家とは、其の言葉の明示せる如く、共に感情的、具體的、直觀的才能を基とすれど、一方は主として美の創作に傾き、一方は主として美又は人生の複雜事相を直觀して、其の價値の優劣を看取することに傾く。創作家は、廣く人生のあらゆる現象を直觀すと謂はんよりは、むしろ新なる世相を建設する者、反之批評家は、建設者にあらずして、むしろ廣く正しく人生を直觀し、其の價値の優劣を會得する者なり。故に批評家は所謂直觀家（シーアー）なり、先見家なり、洞察家なり、隱れたるを發見し、蔽はれたるを開發する先覺なり　此の意味に於て、批評家は、往々豫言者に酷似し、事實また、批評家にして一種の豫言者たりし者少なからず。此の意味に於て、藝術批評家は、必しも既成の藝術品の解釋を事とするを要せず、新領地を發見して、以て創作家を指導せんこと、これ將た其の才能の許す所ならずや。故に一言に、批評家とは、詩的才能を備へたる直觀家と名くるを得べきか。斯かる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

タレントこそは、批評家に必須なる根本資格ならずや。

以上批評家の根本資格を擧げたり、更に第二の問題に移りて、批評家の本領又は事業に就きて一言せんか。普通に批評家の事業と目せらるゝは、彼の藝術の批評なるべし。文藝の批評といふことは、見かたによりて、或は重くも考へられ、或は輕くも考へらるべし。己れ未だあらゆる價値の美を正しく感得するの資格だに無くして、單に旣成の藝術品に就きて自家の所感を記し、之れによりて、其の藝術品の創作家にも、はた之れを賞翫する者にも、何等特別なる稗益を與へざるが如き批評は、劣等なる批評、無意義なる批評にして、斯くの如き批評は、所謂文壇の批評中多數を占めたるものなるべけれど、批評としては殆ど無價値なるものなり。眞の文藝批評に至りては、斯くの如く無價値に、斯くの如く無意義なるものにあらず。そも〳〵文藝の批評とは何ぞといふ事に就きては、玆に細論せざるべし、前きに島村抱月君「早稻田文學」誌上にて、近代批評の意義を說明しつ、予輩も大體君と意見を同うする者なれば、重ねては論ぜず、こゝには簡單に下の如く言ひおくに留むべし。曰はく、藝術品の批評とは、藝術品を解釋し且其の價値を批判することなりと。批評家にして眞實に此の責務を全ふせんとせば、彼れは上下優劣の價値あるあらゆる美を、すべて正しく公平に感得するの資格を要すべし、僻見私情は、批評には最も有りがちの事にして、實は最も忌むべき事なり。勿論個人の感情は、時と處と人とを異にするによりて、同一物に對して萬人萬趣の色を帶ぶべけれど、而も其等特殊なるローカル、カラーを取去れば、一定の美は萬人に共通せる一定の感激を與ふるもの、要は、批評家は、あらゆる美を正しく感受し得るの資を備ふべきなり。之れを他の方面より言はんか、批評家は深く且正しく人生の複雜事相を直觀して、其の根本的にして價値に於て優等なる現象と、枝葉的にして價値に於て劣等なる現象とを洞察し得るの明を備へ、彼の優等なる現象に高き美を感じ、此の劣等なる現象

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

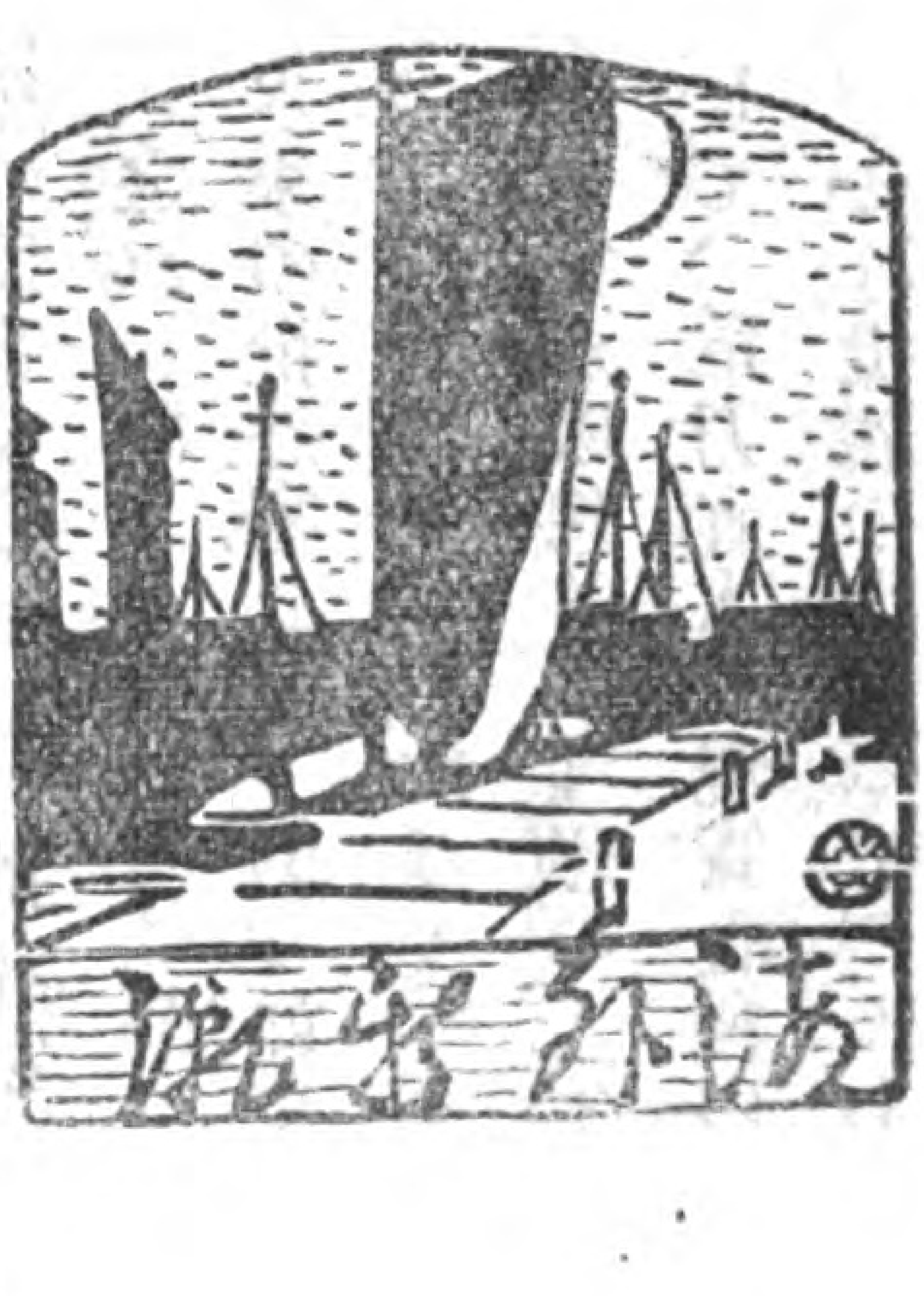
に低き美を感ずるの資格を備ふるを要す。斯くの如くにして藝術品を解釋し斯くの如くにして其價値を批判せんか斯かる批評に藝術家並びに藝術賞翫者を刺激し奬勵し指導するの力なくんばあらず。眞の文藝批評家は作者並びに賞翫者を補益誘導すべき者一班趣味の指導者たるべき者世の所謂小批評家の類にあらざる也。

されど批評家の本領は、單に文藝の解釋及び批判といふ事のみには留まらず、之れと連關して、別に更に重大なる事あるを覺ゆ。單に文藝の解釋及び批判といふ事のみにては、其は批評にあらずとは謂はじ、されど、之れと連關して、批評家は、更に眞面目にして更に重大なる職責を有せざるか、而して眞の批評家は、常に此の方面に着眼して、其の獨得の技を發揮すべきにはあらざるか。斯くの如く眞面目にして重大なる職責とは何ぞや、他なし、活ける人生の批評これなり。古來卓絶せる批評家は、たゞの文藝の批評の外に、常に活ける人生の批評に從事せしにあらずや、活社會の批評、これ彼等が最も心血を濺ぎし領地にあらずや。

予輩の見る所によれば、文藝の批評といふ事と、活ける人生の批評といふ事との間には、極めて密接なる關係あり、互に相融通して、當に批評家の天職を全うすべき一大領域あらずんばあらず。文藝の批評といふ事も、一面より言へば、人生の解釋及び批判其のものなり、蓋し文藝は空想的に人生を内容とし、其の批評は、同じく空想的に人生を解釋し且批判することあればなり。批評家が一たび此の自覺に基きて、其の職責に從事せんか、すなはち眞の文藝をもて、活人生の指導者と爲さんと欲し、更に活人生其のもの丶眞相を直破して、之れを解釋し説明し、批判し敎導し、因りて以て更に高上なる境に之れを進めんと努むる、これ批評家の自然の逕路ならずや。批評家の活人生の批評は、學者の之れに關する批評とは異なり、此の場合に於ても、本來の批評家或は、例の如く直觀的なり、感情的なり、具體的なり、詩的なり、インスピレーション的なり、自家が感想せる理想の人生を提げて、之れを尺度として、單刀直入、現實社會の精神活動を解釋し批判す。これ批評の大なるものにあらずや、當に批

評家の本領とすべき一大業務にあらずや。

學者の現實社會の批評や、勿論貴むべし、論理的に秩序的に、正々堂々、一絲紊れず、明晰に精確に現代社會の精神を論ずる、これ素より一班の思想界には缺くべからざるものされど、批評家が、其の詩的直觀的眼識もて、現代精神の骨髓を闡明し、具體的に靈活に人生の歸趨を指示せんこと、これはた精神界の進步には必須缺くべからざるものにして、又まさに社會人心の深く要求する所ならずや。世間動もすれば曰はく、今の文壇特に批評を要するが如き好個の問題なし、批評界の寂漠なる、別に異むに足らざるなりと。されど斯くの如きは未だ批評家の何者なるを解せず、未だ眞の批評の本領を解せざる者の言なり。批評の領域や世間普通に考へらるゝよりは廣く批評家の事業や世間普通に考へらるゝよりは重し。大なる人生には大なる批評家の解釋と批判とを要すべき大問題山の如くうづ高きにあらずや。批評の問題なきにあらずして問題を料理すべき批評家なきなり。出でよ斯くの如き批評家社會は汝が出現を俟てるや既に久しと謂ふべし。(完)



亞米利加移民問題

「ナチヨナル、ツアイツング」

世人の知れる如く、亞米利加の移民制限は數年來漸く經濟上並に社會上の一問題となりて、近來合衆國に於て盛に研究論議せらるゝに至れり、本年は凡ての移民が到るところに一樣に歡迎せられたらんには、今日に至りて毫も此の如きの弊害を生ずることもなく、世人は能く移民者が、亞米利加の生產扶殖に對して、親善なる補助者たることを認め得しなるべし、然るに事玆に出でず、亞米利加は先づ極端に其現行諸法規の嚴格なる適用をなして、能ふかぎり移民希望者の渡米を制限せんことに努力せり、然して方法はよく不幸なる數千の勞働者を沮礙することを得しと雖も、然も大勢は如何ともし難く、今日に至りては其大都會の一般生活並に殖產工業に竊たるべき移民勞働者は、國內を通じて無慮百萬の上

を以て算するに至り、今若し此事情を變更せんと欲せば、全然根本的法規の制定を必要とするなるべし、されどその法規の內容は果して如何か。

嚴密に移民禁止を實行せんとするの意見は、近來次第に高調になり來れり、亞米利加は恰も不潔なる歐羅巴の塵芥捨場、換言せば歐羅巴における最下級人民の蓄積場たるの觀あり、之に對しては吾人は種々の理由によりて最も强硬に防衞の方法を講ぜざる可らずと主張し、此意味に於て既に移民制限同盟の成立をさへ見るに至れり、されどこの問題を更に一層愼重なる態度を以て研究せんとする他の一派の論者は、移民の根本的禁止は亞米利加國民の因襲的思想を破るものにして、到底實行し得べき事相にはあらず、即ち過去數百年間神聖なりし外國人の共同的勞働を、今日俄に我國より、我國民より疾忽に奪ひ去られんことは、到底不可能の業にして、斯の如きは畢竟角を矯めむとして却て其牛を殺すの愚を學ぶものといふべく、その有害不利なる結果は到底免るゝを得ざるところなるべしと、蓋し限りある人爲の力を以て、幾多世紀の流を通じて、其國民性の上に深き根底を有する美しき國民的習俗を、如何にしてか能く一朝にして破るを得べけん、さればとて此種の論者は徒に放任主義を採りて事態の成行に任せよといふにはあらず、唯合衆國はその尊き國民的習俗に反してまでも、移民を禁止するの愚を學ばず、宜しく適當なる方法の下に調節してます〱この國民的習俗を善用することに努めざるべからずとなすなり、Regulation not Prohibition（調節にして禁止にあらず）これ即ち彼等が旗識なり、從て內國に移住せんとする外國の國民はまたある種々の制限に服從する事を甘んぜざるべからず、移民官廳は內國の何れの場所にても、苟くも勞働力の欠乏せる人口稀薄の地方に向て、自由に移民の居住を指定す



THE POWER DIVIDED BETWEEN THE CZAR AND THE PEOPLE.
One has the power to hang; the other to be hanged.
—*Fischietto* (Turin.)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

べき權利と義務とを有せざるべからず、斯の如くにして全く文明の榮光に浴せざる此等の地方も、次第に文明の域に進み、その限りなき天然の財寶は彼等移民の熱心なる勞働によりて、神聖なる賜物として始めて我世に獲得せらるゝと共に、併せて美しき人道の權威ある要求にて合するを得べきなり、移民より生じたる今日の弊害は、毫もその百幾万を以て算する移民そのものゝ上に存するにはあらずして、この百幾万人の移民が悉く大都會の所謂貧民窟に居住し、然かもその勞働力は悉く商工業の上にのみ使用せられつゝあるの事情に基けるなり、蓋し廣大なる亞米利加が、僅に百万の勞働者をその國内に容れたりとて、これが爲に直に內國人の勞働に影響を受くべき理由あらざるべく、こは畢竟その收容の場所に宜しきを得るが爲に生じたる弊害に過ぎざるなり、移民は多く農事に經驗あるものその多數を占むるを以て、若し此等のものを導いて、その親しみ深き田野殊に西部並に南部の豐饒なる平野に安樂なる居住を爲さしむるに於ては、彼等はよく神聖なる文明の開拓者となるを得べく玆に至りては、亞米利加はその尊き人道の使命を果すと共に、併せて一國福利の永久的基本を作ることを得べし、現今の程度まで發達したる移民は、健全なる方法によれる大規模の國家的移民政策によりてのみ。これを善用し駕御することを得べし、從て合衆國の國權は、場合によりては各州の反抗を排しても、尙ほこの方針の貫徹に努むるところなかるべからず、

この見解に對して博士フリートヒリ、ショーメルス氏は「Conrads Jahrbucher für Nationalökonomie und Statistik」の最新の卷に於て發表したる其論文中に於て、大要下の如き注意を爲せり、曰く吾人はこの見解が基ける思想の



NOBODY WANTS TO HOLD THE BEAR.

—*Kladderadatsch* (Berlin.)

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中には、爭ふべからざる眞理を包含すると共に、その提言は恐くはこの問題に對しては最善最良の解答たるべきことを否定せざるべし、されどこは到底一朝一夕にして行はるべきことには非ず、その實行の爲には世人は亞米利加の國家制度が果して斯る計圖を完成し得べきや否やの大なる疑念を抱くに至るべき程の、大規模の組織を必要とすべし、かゝる計圖の實行は、亞米利加の企業家に對しては、必ずしもさまで危險なるさまで廣大なる事業にはあらざるべしと雖も、國家としての北米合衆國は斯の如き國內の地方的經濟に關係ある大なる企業を爲すに當りては頗る愼重なる保守的態度を採るに至るべし、合衆國の國權は、その地方的利益の保護に付て頗る重利的なる各州に對して、さまで極端にその作用を及ぼすことを得ず、合衆國は此點に於ては、頗る愼重なる注意を拂はざるべからざるの關係を有す、何となれば徒らにその國權を伸張するに於ては、彼の幾分の弊害の根本を爲せる黨派制度の爲にその自由なる羽翼を牽制せらるゝの恐れあればなり。北米合衆國の政體竝にその黨派制度の中に存するこれ等の欠陷は、一國文明の開發の爲に遠大にして善美なる國家的移民政策を實行することによりて、最も能くこの問題を解決せんとするに當りても、亦避くべからざる多大の障害を爲すものなりと。



THE AUSTRO-HUNGARIAN AGREEMENT.

Mitzi and Janos agree not to quarrel any more—until next time. —*Fischietto* (Turin.)

第二次日露戰爭の可能

「ダス、エヒヨー」

再び起るべき日露戰爭に就ては、現時既にペテルスブルグの軍人社會に於て、頗る眞面目に商量せられつゝあるのみならず、その東亞新興の大强國と最後の雌雄を決すべき時期に就きても、既に比較的精細なる考察は遂げられ、これが

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

戰鬪準備にその適當の時機を誤らざるべきことの注意は、幾多有識の論者によりて聲言せられつゝあるなり、然してこのプログラムの如何に普汎的なるかは「ウイーネル、ツアイト」によりて公にせられたるパセノウ氏が參謀長陸軍中將パクチン氏に宛てたる覺書によりて之を知ることを得べし、パセノウ氏は既に千八百九十七年に於て第一次日露戰爭の開始、並にこの戰爭における露國の敗北を豫言せりき、氏は亦謂へらく、第二次の日露戰爭は六年の後には必ず開始するに至るべしと、蓋し完全にして優勢なる軍隊と、艦隊とを併有し、然かも何時たりとも隨時印度の方面より露西亜を脅し得べき英國の、有力なる助力の確固たる擔保を有する日本國は、露國がその新しき戰鬪力を回復するまで二十ヶ年の長年月を要するを、徒に之を傍觀して、その完成の時期を待つべき理由なければなり、日本は假令如何なる代價を拂ふとも、必ずや彼のカムチヤツカを包含する露國極東の沿海州一帶の侵略を期すべきのみならず、更に進んでは彼が新に獲得したる朝鮮並に滿州に於ける優越なる地位の安全なる確保を得ざれば已まざるべし、されぱかりのポーツマウスの平和の如きは、本來短期の休戰狀態の成立を意味するに過ぎず、この休戰の後には、露國は單に一國のみならず、東西二國の強大なる敵手に對して、その雌雄を決せざるべからざるべし、從てこれが防禦の爲に露はその滿洲軍をそのまゝ極東に駐屯せしむべきのみならず、就中朝鮮並に滿洲には、その配兵の上に特に一倍の注意を用ひざるべからず、若しその總軍を極東に滯留せしむるを得ざる場合には、尠くとも其三分の二には全然戰時給養を爲し、永久的戰鬪準備の姿にて之を極東に駐屯せしむべく、尚ほ彼の境界線の領土に於ては、軍事移住の制を立て、新に召集せられたる兵士がその服務期限を終りたる後、これ等のものをしてある便利なる條件の下に土地を所有せしめ、永久的に彼等をこの地に移住せしむるの方法を採らざるべからず。



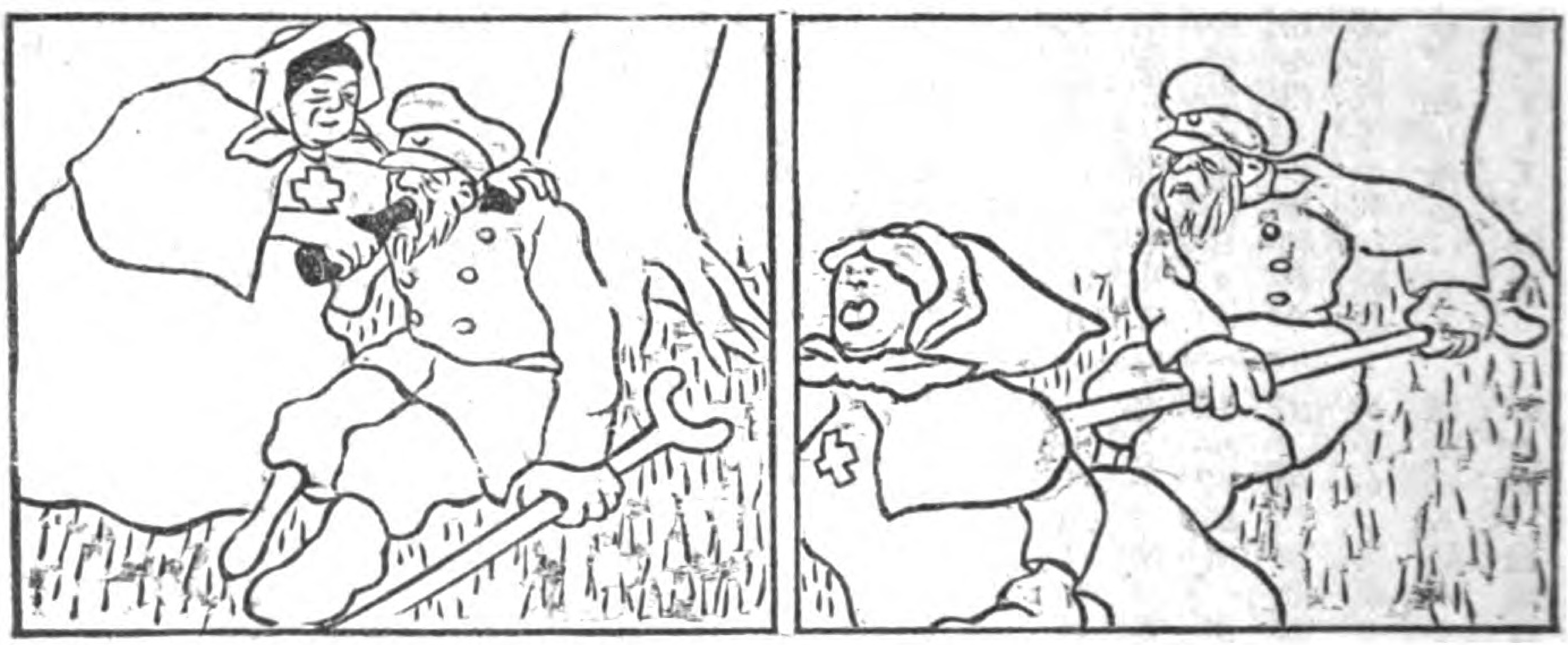
EQUALITY—WITH A DIFFERENCE.

LABOR—"Excuse me, mum, but I don't like the 'ang o' your scales. I think you'll find *this* pair works better—for *me!*" —*Punch.*

露西亜の地位は日本のあらゆる反抗あるにも拘らず、最も完全なる狀

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

態に確保せられざる可らず、日本の反抗愈よ大なればその大なる程、露西亞の經營は從て益々强固に遂行せられざるべからざるべく、この關係は夫の中央亞細亞に於ても毫も異なるところなるべし、結局浦鹽斯德を根據とする强大なる艦隊の經營は目下焦眉の急務なり、然してこれ等の船艦は國立造船所に於て建設せらるゝにはあらずして、寧ろ外國の有名なる造船會社によりて建造せしむるを以て得策とす、その方法としては此等の會社に浦鹽斯德に於て船渠その他造船に必要なる設備をなすべき許可を與ふるにあり、否そは單に浦鹽斯德のみに止らず、夫のオルガ灣並に黑龍江の河口なるニコラジュウスクの如きも、亦この目的の爲に利用せしむべし、然して艦隊の完全を急がんが爲には契約期日以前の艦隊の完成に對して國家は會社に相當の賞金を提供すべきなり、斯の如くにして浦鹽斯德が一度艦隊經營の中心となれるに於ては、之が經營の許すを得たる外國の造船會社は凡て最も嚴密なる監督の下に立つに至るべく、又權利なき者は、何人と雖も港灣並に要塞地帶に立



GERMANY'S "FIRST AID" TO RUSSIA, 　AND RUSSIA'S THANKS.
—*Ulk* (Berlin).

ち入ることを許されざるに至るべし、尙ほ夫の西比利亞鐵道の複線の如きも、能ふだけ速に敷設せらるべく、就中ハルビン浦鹽斯德間並に烏蘇里線の如き、最も速に敷設せられざる可らず、又夫のカムチヤツカ、ニコラジュウスク、並に浦鹽斯德の間は、速に無線電信を以て結合せらるべきなり、而して氏は實に下の如き語を以てその覺書を結べるなり、「第二次の日露戰爭は山脈の後に存するには非ずして實に吾等が肩上に存するなり、去れば吾人は今や全力を注ぎてこれに對する準備を爲すにあらざれば、吾人は遂にバイカルの後にまで驅逐せらるゝに至るべし。」

英國婦人の撰擧權運動

「リテラリー、ダイヂエスト」

婦人撰擧權主張者が下院の控室に迫り、示威運動を爲し、遂に警吏に退散せしめらるゝに至りしとの報は、男女同權を實現せんとの畫策に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

於て、實に英國女性の熱烈なる精神を見るべきなり、深く千七百七十六年の精神を刻銘すとも見ゆる一婦人、議會に代表者を有せざる人民に課税することの極めて不正義、沒道理なるを主張し、自己の所得税を納むるを拒否するあり、總務卿も其撰擧權要求の論鋒に對して、已むなく決意を示さんずらん有樣にも見えぬ、有名なる進歩主義の記者、此頃八十九の高齢を以て世を去りたる、ジョージ、ジャコブ、ホーリヨーク氏の最後の論文の一は、倫敦發行、獨立評論誌の爲に、男子の撰擧權壟斷を排し、之を擴めて女子に迄も及ぼすべき計畫を略叙したるものなり、氏が此論文中には女子撰擧權運動は極めて近代の事なるを言へり、兩性の不平等は改進主義者の間にすら信ぜられしなり、ハーリー、マルテノー。エミリー、フエースフル兩女史の如き、其意見は能く輿論を動かしたるが、此らる人々にして尚ほ曾て女子撰擧權運動なるものには與らざりしなり、氏は斯く叙し來つて更に此偉大なる二女史生存時代の英國婦人の狀態を述べて下の如く言へり。

當時に在つては既婚婦人財産規則なるものなく、夫は隨意に妻が私有財産の全部のみならず、其妻自身の手工、又は他の業務より得たる凡てをも、賭博に飲酒に要求し去るも妨げず、婦人は夫の殘虐の爲に日々に生活の危險に迫るも今の法律が許すが如く、直に離婚を得るの權利あらず、斯ゝる無權能に對する激情より自然に議院の保護が彼等の利益擁護に必要なりとの觀念一般人民の心裡に生ずるに至れり、若し彼等にして下院に撰擧權を有したりとせば、斯くまでの切願に出でずして、而かも此ゝる無權能は容易に排却し得たりしならんとの念、彼等の間に生ずるは當然なり、此說曾て發せられんとするに當り、男子は元來女子に對して寬容なるもの、政治上の事は男子に一任するこそよけれとの說の唱へらるゝあり、婦人は之に聽いて爾來試むること二千年、而も之によつて何等の得たるところなかりき、撰擧權要求の提議や實は既に陳腐なるなり、最早男子にのみ撰擧權を委ぬるに倦み、今は各自自身の撰擧權を求むるに至れるなり、彼等は夫のド、ステール夫人が拿翁一世に對して、假令身首處を異にせらるとも、婦人は何故と理由を問ひ得べき權利を有せざるべからずと言ひて爲したる如き當時の思想を抱けりと

其時以來法律上婦人が國家に於ける位置は頗る變革するところあり、左れど女子に政治上、同權を與ふるを欲せざる先見は牢として猶ほ存するあり、そは主に、若しも女子にそを許すことあらんか、彼等に特種の利益のみを主張して、男子を排去することあらんの杞憂に出づるなり、ホーリヨーク氏の所觀によれば、

此問題は如何にして女子の撰擧權が得らるべきかの問題なり、彼時以來女子は校務委員となり得るの權を許されたり、左れど未婚者と既婚者とを問はず、其所有財産は、收税吏の看過するところとならざるに係らず、未だ撰擧權に與るを得ざるなり、撰擧區內多くは爲すなき蒙愚なる男子が、撰擧の權を有するに、ブルデット、クート夫人の如き富有にして博愛なる婦人も、ハーリー、マルテノーの夫人の如き時弊を救ふの材ある婦人も、彼等自身の財産保護を得んが爲に撰擧場裡に現はるゝの權を有

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

する能はず

斯く忌まはしくも男子といへば愚物にも其權を與へ、不運にも女子といへば逸才にも其權を奪ふことは、選擧法改正案、其案必ずしも當を得るにあらずとはいへ、猶ほ建議者に對して同情すべきの餘地あるなり、

由來婦人に在つては公共事業に於ける男子の優越權に對して挑戰するの必要あらず、要は只彼等の生活上の問題が決定を待つべき場合の生ずるとき、其言ふところを合理的措置によりて臨斷せらるれば可なるなり、彼等が男子と同等の權を要求すべき時は、即ち其材幹に於て、其技能に於て、其經驗に於て、彼等自身に男子と相敵するを認むる時ならざるべからず、と

氏は此くて選擧に於て婦人千名毎に十名の代表者を出すべき由の調和說を說けり、此方法は婦人に政治上の訓練と敎育とを與ふべく此くして又更に一層大なる政治上の機能運用の豫習たるべしと、氏の說明するところを引用すれば、

如何なれば選擧權を欲望する婦人にして各選擧區內に選擧團體を組織し、其團體員百人に對する一人の割にて、彼等の選擧區より議員選出の時に際して、選擧人を指定し得べき法律上の許可を受けざるか、斯くすれば投票の際に各千名の婦人が十人の代表者を出し得べきなり、人口稠多智育優越なる選擧區に在つては彼等が地方代表者の數は百人或はそれ以上にも達すべく、而して其候補者は彼等の爲に利益擁護を勉むべきなり。即ち彼等は全選擧權內の一勢力たるべきなり、彼等は旣に、爾く認められざる、即ち代表者を有せざる一議會管轄區民にあらざるなり、此等の團體員は政事上の經驗を得るに至るべし、此かる規定に據らば、男子の利益も沮礙せらるゝこともなかるべく、男子は國家の運命一に女子の掌裡に歸するを恐るゝこともなかるべし、而も市若くば都府に於ける、其團體の政治的勢力は、彼等が投票權よりも更に大なるものあるべし、兎角する間に彼等は政治上若くば社會上の問題に於て幾多の人々を訓練し、其等の人々をして治政者階級の人々、即ち男子の心中に今日在るが如きの誤解を離れて信用を植うるに至るべきなりと。

眞のラオコーン像

「リテラリー、ダイヂエスト」

有名なるラオコーン像の全形は、曾てはレッシングをして一大批評文を草せしめ、又全世界の畫家の筆に上りて描寫せられしこと數千回なるも、而かも希臘の原型を確實に示したるはあらず、そは歲月推移の間に軀體の幾部分の失はれたるが故なり、今を去る四世紀の以前に、古へレニック技術の紀念的製作物なる右の像が發見せられ、老手の畫家其缺くるを補ひて全形を描寫したるもの世人の信を買ふに至れり、此畫に就きて多く藝術批評家現れたるも皆此補塡に成れる描寫を以て眞に原型を傳へしものとの確信に本づく、然るに吾人は、今ベルリン發行のヴエルト、スピーゲル誌によりて、歐太利の一學者、ポーラック博士が幸にも原型

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の古き臨畫を發見し、尙ほそれによれば、夫の父、並に其右に立てる子息の、失はれたる手を補足したる描寫に於て文藝復興期の畫家が、希臘彫刻家の意匠を辿ること能はざるものあるを知りたり、ヴアチカン博物館の管理者は、既にこのポーラック博士の發見に從て其全形の復古的描寫を命ぜり、ヴエルトスピーゲル誌は言へり、其變形によつて頗る美を得たるは疑ふべからず、即ちそれによりて名は知られざる希臘の一巨匠が雄大なる構想の、一層明確に、且つより美しきシンメトリーを以て現さるゝを見るなりと、ポーラック博士は著名なる古物學者にして、現今歐太利の樞密院、議官たり、羅馬に居住せらるゝなり

學術語としてのエスペラント

「ダス、エヒヨー」

最近の世界語エスペラントは、今や學術界にまでその位置を進[illegible]り、頃者巴里の醫科大學に於て、幾多の碩學により、嚴密なる討覈を經て、漸く大成せられたる「世界藥物學大辭典」は、その當初には、現今最も廣く行はるゝ九種の國語によりて編纂せらるべき豫定なりしと、後に至り多くの學者の建議により、更にエスペラントを第十種の國語として附加することゝせり。



机上小觀

戸川秋骨

三　伯爵大隈重信閣下

伯爵大隈重信閣下、閣下の盛名一世を蔽ひ、政界の分野は閣下の占有する處只其三分の一に過ぎずと雖も、氣魄は則ち常に在野の政黨を左右し、其一言隻句は日本全國の傾聽する處たるのみに止まらず、遠く海外に渡りて影響する處僅少ならず。身官位官職を帶び政廳の權威に依りて僅かに其名をなすもの、現下の才人比々皆然りとす。ひとり閣下の單身孤立夤緣する處なく、學なくして其語る處學者を驚かし、坐らにして能く世

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

案内せんか、文士は恐悅して閣下を渴仰し敬慕し心服し、閣下を以て眞に文藝の保護者となし、目するに一大ペトロンを以てせん。而して伯爵閣下はこれに依りて益々聲望を得ると共に、文藝協會また閣下が其一擧に依りて一大發展を爲すことを得たりしならん。斯くの如くんば一人のメヂチを有せざる現代は閣下の名を末代に不朽ならしめんに。勞なくして功を收むるの多大なる、豈に雙脚を演壇に曳くの比ならんや。

進歩黨は時勢に後れたり。今にして伯爵閣下を退隱せしめんと欲する黨員ありとか。進歩黨は伯爵閣下の進歩黨なり。閣下を退隱せしめてなほ進歩黨ある事なし。故にまた進歩黨の時勢に後れたるは伯爵閣下の時勢に後れたるなり。二十年三十年前の外交は今日の外交にあらず。知らず、時勢はうつり、伯爵閣下の齡またすゝみて、閣下また老衰の期に入れるにあらざるか、駿馬も老ては駑馬に劣るとか。閣下が演說の一事余をして頗る今昔の感にたえざらしむ。

四　自然に接するの機

一たび高野の山中に身を置きたるものは、深遠幽邃心身の塵世を脫したるの感自からに起るを禁せざりしなるべし。本州第一の森林地に位して峯巒殊に深く、前面には遙かに太平洋の茫漠として際涯なきあり。其形勝の地たる凡夫野人の眼にも著し。而も記憶すべし、高野山の祖師開基の地、法敎の靈地たるなり。南洋マリアナ群島より起りたりと稱せらるゝ富士帶の火山脈の、本州を縱貫する一大山系と相接觸する處、甲信の深山を爲す。こゝに日蓮宗の總本山身延山あり。凡そ一地方形勝の地には必らず佛寺の倨然として其坐を占むるあり。行基弘法の諸師、科學を以て利用厚生の道に益しつゝ、且つ山川を跋涉して自然に對する心眼を開きしより以來、佛敎の人生に貢獻する處ありたる甚深なりといふべし。殊に自然に對する注意と愛着とに至りては到り且つ盡くせるを認めざるを得ず。かくの如きはそれ佛敎本來の特性なるか、はた吾が國民の性

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る能はざりしとせばこれを轉して自家の榮譽に利用すべかりしにあらずや。蓋し苟も文藝の演説に耳を傾けんと欲する聽衆は、よし如何に事を解せずとするも、而も伯爵閣下の演説を眞面目に傾聽するの愚にあらず、恐くは老耄の寐言としてこれを聞きたるべく、伯爵閣下また實は自から演壇に寐言を列ねたるを知りて心密かに微笑を禁じ得ざりしならん。然れども余は又閣下の演説の可否巧拙を論するにあらず。只苟も伯爵閣下たるものが態々老體隻脚を演壇に運ぶの勞を取る、少しくこれを活用するの道を講ずべかりしを思ひ、閣下の爲す處のこゝに出でざりしを惜むのみ。政府の外交無能を罵りて快とする閣下の、駈け引きを缺きたる何ぞ一にかくの如くなる。

外交は大隈伯爵閣下が得意とせる處なりと聞けり。然れども余は日常閣下が態度と言論とに徴して密かに疑を抱けり。むしろ閣下は外交に拙なる人なりと信ぜりき。蓋し閣下の明これを自覺せさる筈なしと雖も、政略の具としてこれを標榜するの巳むなきに至れるものか。抑も亦一種の道樂なるか。花卉の道樂は他を悦ばしむるの益ありと雖も、外交の道樂は國家のために危險なり。余は現下閣下の再び外務の椅子に倚るの機なきを慶するものなり。近時又鐵道國有の問題起るや、閣下直ちに立ちて非國有の議を稱へて黨員を死地に陷れしとか。また以て如何に閣下が駈引きに拙なるかを見るべからずや。余が閣下の外交を拙なりとせるはこれなり。則ち文藝協會の演説に於ける態度の如きまた然り。至愚の言を弄して、外、世評の侮りを多くし、内自家の聲價を傷く、これまた至愚の擧ならずとせずや。當時伯爵閣下にして自から辭して演壇に登らず、先づ文壇一流二流若くは三四流の士を招致してこれに得意の所見を披陳せしめ、伯爵閣下はこれを聞き流して、最後に立ちて一場の挨拶をなし、故らに辭を卑ふして「親から俗界に出入する吾人、計らず高雅幽遠の說話を耳にし、爲めに識らずして理想の仙郷に遊ぶの思ありし」といへるが如き、閣下が辯說を以て思ひ切つたる世辭を呈し、次て閣下が得意の庭園にかれ等を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

案内せんか、文士は恐悦して閣下を渇仰し敬慕し心服し、閣下を以て眞に文藝の保護者となし、目するに一大ペトロンを以てせん。而して伯爵閣下はこれに依りて益々聲望を得ると共に、文藝協會また閣下が其一擧に依りて一大發展を爲すことを得たりしならん。斯くの如くんば一人のメヂチを有せざる現代は閣下の名を末代に不朽ならしめんに。勞なくして功を收むるの多大なる、豈に隻脚を演壇に曳くの比ならんや。

進歩黨は時勢に後れたり。今にして伯爵閣下を退隱せしめんと欲する黨員ありとか。進歩黨は伯爵閣下の進歩黨なり。閣下を退隱せしめてなほ進歩黨ある事なし。故にまた進歩黨の時勢に後れたるは伯爵閣下の時勢に後れたるなり。二十年三十年前の外交は今日の外交にあらず。知らず、時勢はうつり、伯爵閣下の齡またすゝみて、閣下また老衰の期に入れるにあらざるか、駿馬も老ては駑馬に劣るとか。閣下が演説の一事余をして頗る今昔の感にたえざらしむ。

四　自然に接するの機

一たび高野の山中に身を置きたるものは、深遠幽邃心身の塵世を脱したるの感自からに起るを禁せざりしなるべし。本州第一の森林地に位して峯巒殊に深く、前面には遙かに太平洋の茫漠として際涯なきあり。其形勝の地たる凡夫野人の眼にも著し。而も記憶すべし、高野山の祖師開基の地、法教の靈地たるなり。南洋マリアナ群島より起りたりと稱せらるゝ富士帶の火山脈の、本州を縱貫する一大山系と相接觸する處、甲信の深山を爲す。こゝに日蓮宗の總本山身延山あり。凡そ一地方形勝の地には必らず佛寺の偶然として其坐を占むるあり。行基弘法の諸師、科學を以て利用厚生の道に益しつゝ、且つ山川を跋渉して自然に對する心眼を開きしより以來、佛教の人生に貢献する處ありたる甚深なりといふべし。殊に自然に對する注意と愛着とに至りては到り且つ盡くせるを認めさるを得ず。かくの如きはそれ佛教本來の特性なるか、はた吾が國民の性

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

情の然らしめし處なるか、抑も亦兩者の相ひ伴ひてこゝに至らしめしものか。

四國の八十八個處、西國何個處の靈地、これが巡禮はまた佛徒の行たり。且つかの何十個處の某々靈地の摸擬は、全國所々にありて信徒が渇仰の對象たり、豈に啻にこれのみならんや、信州に善光寺あり總の地に成田山あり。名刹擧て數ふべからず。これ等はそれ〴〵靈勝の地にして佛家の救濟に隨喜するもの、相率ひてこれが巡行を忘れず。而して此れ等名刹の巡行則ち勝地の巡回なり。勝地の巡回はまたかれ等をして風光明媚の地に踵を轉せしめ、更らに地方の長所に眼を向けしむ。則ちかれ等をして自然に近接せしむるものはこの巡禮なり。伊勢の神宮に參する心はまた善光寺に詣づるの心に等しと雖も、參拜者はこれと共にまた二見が浦の日の出を拜するを忘れざるなり。相の大山に登る道者はまた富士山上の偉觀に接する道者たり。斯くの如き宗教上の廻禮は、其結果紅塵の間に埋りて世の廣きと、自然の美しきとを知らざる俗徒をして、眼を開き心を洗ふの機會を得せしむるなり。

頃日旅して歸る事ありしに、汽車に同乘せるものは、中年の夫妻と一老媼と別に中年の一婦人となりき。かれ等は相約して京地を出で、善光寺に詣て日光に轉じ北松島に遊び歸途を成田に取りて、週遊幾日今や再び京に入らんとする處なりしは、其對話に依りて知られたり。其言語風貌凡て市井塵中の人、殊に老媼の外光にふれ、天然に接する底の人にあらずと雖も、一たび宗旨の導く處に從ひて出づるや、よく幾千里の外に心身を洗ふを得たりしなり、かくの如きは社會制度の上より觀じて、頗る留心すべき良風ならずとせんや。

現時中流以上の人、避暑と云ひ轉地と稱して、山中若くは海邊に寓居するは一斑の風尙にして極めて喜ぶべき事とす。然れどもこれを上記の靈地參詣に比するに其趣味に於て其利益に於て遙かに如かざるものあるが如し。かの靈地の參拜はまた家族的にして、且幾多家族の親交を促す。一集團の親睦なり。現時の避暑轉地は等しく家族を伴ふと雖も孤立的なり、個人的なり。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

他と樂を共にする事少し。況んやかれに於ては自然と靈地と宗敎と相聯りて、隱然人心に感應を及ぼすの道備はれるをや。

余は基督敎會の自然に近接する幾何なるを知らず。只敎主耶蘇は大低ガリラヤ附近を主とし、地方辟陬の地に巡錫して首都エルサレムに向ひしは僅に三回に過ぎざりき。而も彼處にありては破邪的熱烈の態度をとりて都下の人士を叱責し、ために終に一身を失ふの煩を招けり。名高き野の百合の比喩は暫らく言はず、聖經に依りてこれを見るも、ルナン氏が傳ふる處の耶蘇に依るも、かれは自然を愛好せし事明らかなり。余は素より自然を過重するのむしろ非なるを感ず。人間生活の自然に超越して趣あるは近世思想を味ふもの、覺る處なりとす。然れども今日の基督敎會の如く自然と隔離せるはまた頗る異むべし。然りかれ等野の百合の譬を語らざるにあらず。英國湖泒詩人の自然を口にせざるにあらず。而もそはこれを詰りこれを口にするに過ぎずして、其制度の上に其誘導の上に未だこれを實現せしを見ず。これ其實はかれ敎徒の自然に對するの冷眼より來れるにあらざるなきか。由來基督敎會は内省に重を爲して心靈の事を說きて形體を輕視す、これ偏に他の短所たり。人はパンのみに依りて生くるものに非ずとの敎主の言は可なり。然れども人はパンなくては生くるものにあらざる事に思ひ迨ばず。心靈あるを知りて身體の事を忘れたる結果は耶蘇信徒の顏色は蒼白となれり。これ則ち實際の問題にして頗る寒心すべき事實ならずや。余は佛敎の靈地巡遊を始め、春秋の季節に於ける贈答の如き家族集團の制度にに深き注意のあるを見て、現代の宗敎殊に基督敎のこゝに甚だ缺くる所あるを惜まずんばあらず。然りと雖も西敎豈に此一事に留意せざらんや。エピフアネーやクリスマスやカーネワルや、もと異敎との合體より來りしものと雖も、西歐の敎會はこの制をとりて形體の歡樂保養に力むるを忘れざりし。たとへば又夏期學校の如きかれより學びたるものなりと雖も、獨りその對手を學生に求むるものなるが故に、眞定集團の趣味を欠きて、風

尙の强固なる根帯となる能はず。偏に吾が國風と人心の自然とを顧みざるの結果こゝに至れるものか。余をして言はしむれば、吾が西敎會はアメリカの俗惡主義を鵜のみにして中毒にかゝりたるものなりとす。西敎のアメリカに依りて傳へられしは彼我のため頗る遺憾なる事實なりき。今たま／＼佛敎靈地の事を想ひて、自然に近接するの至要なるを感し、更らに世の遷移と共に其機會の減少せん事を恐れてこゝに一言を寄す。

文藝雜考

日本特有の修辭（二）

佐々醒雪

聯想の融合を生命とする一種の修辭は、確に、日本特有の詩形であるところの連歌、俳諧の連歌から自然に發展して、發句の上に顯はれたものであるが、連歌の方は理解する人が尠なからうから、寧ろ發句から說いて、逆に連歌俳諧に及ぶ方が便利であらう。

元來、發句といふものも、其の初は短歌の上の句から生れたものであるから、古い發句は悉く短歌と同じ修辭で、從つて同じ文法を以つて律することが出來る。例へば

　手をついて歌申し上ぐる蛙かな

の類は唯の短かい歌といつてよい。しかるに、

　元日や神代のことも思はるゝ

といふと、まう、少し歌とちがつたように聞こえる、それは「や」の字のある爲である、がこの「元日や」の「や」はかの「近江のや鏡の山を立てたれば」などの「や」即ち殆んど無意味に濫用せられたから來たもので、發句では嘆辭として用ゐられてゐる。こゝでは「元日」といふ副詞の下に用ゐたもので、この語を用ゐると、其にあるべき天爾波が省かれるのが常である。だから中古の歌と同じ語法に改めると。

　元日は神代のことも思はるゝ

と變ずるので、

古池や(に)蛙飛び込む水の音

蜻蛉や(が)とりつき兼ぬる石の上

なども同じことと全體の意味は此の通りてある。だが、もしこの句を「元日は」「古池に」などゝ改めてしまふと、それ等が單な副詞になり、「蜻蛉が」とすると、それが「石」といふ語のアッジャンクト中の一語に過ぎぬことになつて從つて、神代が思るゝこと、蛙の水音、石の上などがこれ等の句の主體に變ずる。然るに、作句者の詩想中の主位を占めてゐるものは、「元日」「古池」「蜻蛉」てあつて、決して「神代」や「蛙」や「石」てはないのてある。こゝにある「や」は實にこの關係を表はして居るもので、詳かにいふと、「や」の字が嘆辭としての性質上、其の上にある語が、一句中の主體てあることを示してゐるのてある。蕉風以前の發句の切字といふのは實はかういふ意味て、詩想中の主位を表はす語といふ意義に外ならぬ。「や」「ぞ」「こそ」「かな」などが、切字の主要なものに數へられたのも、これが爲てある。

かく嘆辭や天爾波の用法には(或は意味には)、既に足利の末から和歌と發句との間に多少の相違はあつた。だが、もし文字の數が許すならば、

あゝ元日や今日は神代のことも思はるゝなり。

あはれ古池蛙の飛び込む音す。

あはれ蜻蛉、石の上にもとりつきかねたり。

などのやうに云つたであらう。唯僅かに十七字中には、主想となるべき語を、何時も文法上の重要な位置に置くことは困難至極なことて、その爲に「や」の字などに特別な用法が起つたのみのことてある。また、これを以つて特別な修辭が起つたと稱すべきてはなからう。

然るに蕉風になると、こんな風の句が出來た。

山吹や蛙飛ひこむ水の音

この「や」の字の上下には、全く何等の文法上の關係もない。つまり「山吹」と「蛙の飛ひ込んだ水音」とこの二つの名詞の間に「や」がある丈けのことて、俳諧に特有な修辭であるといふ以外に、何等説明の餘地はな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

からう。

且つや、この「や」の字すらないものもある。

杜宇(名詞)大竹藪をもる(月夜の形容詞句)月夜(名詞)

かく名詞と名詞とを連ねるばかりでない。一方がセンテンスをなしてゐることもある。

若艸や(名詞)昨日の箭見も木綿貢(ニナリタリ。文)

山里は萬歳遲し(文)梅の花(名詞)

この「若艸」と「梅の花」とは、今の所謂る文法家は、何と解釋するのであらうか。杜宇の句などは、或は「月夜に杜宇が鳴いた」と曲解を試みるかも知らぬ。しかしこの最終の二句の如きは、曲解する餘地もない。俳諧の門外漢が、俳句を不可解のやうにいふのも、一つはこれの爲であつて、その文盲の度は譬へば、序詞や掛け詞を知らないで、古歌を說かうとするのと、全く同じことではなからうか。和歌と發句とは修辭法が異ふ、從つて常に同一の語法文法で、說くべきものではない。

古來俳人の中間にも、和歌から出來た本居翁の文法を以つて、俳句を說かうとして、失敗したものは二三のみでない、近頃の俳諧雜誌「卯杖」にも「や」の字の論が連載してあるが、皆、この根本的異同を遺却した說で、容易に首肯し難いと思ふ。

すれば、それはどうして說くかといふと、再び前號の

世の中よ蝶々とまれかくもあれ。

と、これが拙譯の

蝶々や思ふことなき檜笠

とを對比して、其の意味が稍相近いといふことを說けば足ると思ふ。文法上の關係のない二つのもの(名詞と名詞、或は文と名詞)は、互に映發せしめんとする爲に連ねたのである。

拙譯の批釋もあまり可笑しからうから、試に蕉翁の「梅の句」をとらう。今「山里は萬歳遲し」といふ文のみに就いて見ると、其の餘意は極めて茫漠で、萬歳の正月に來ぬ位ならば、定めて寂しからう、定めて不自由であらう、魚類がなからう、路が嶮しからう、雜費

もないだらうかなどといふ種々雜多の聯想が、讀む人の境遇によつて、何程でも分岐して發生する。これては未だ「たゞ言」て詩といふべき明白な必然な印象を要求する權利がない、ところが「梅の花」といふ一語は、山里に關する聯想の範圍を限つたもので、萬歳遲き山里に關する各種の聯想の中て「梅の花」に調和すべきもののみを、其餘情として味ふことを求めたのがこの發句の主意てある。梅の花といふ語に就いても種々の聯想はあらう、しかし、こゝにも亦、閑寂な山里に調和しない聯想即ち例へば、梅の實の生ることや、百花の魁といふことや、紅梅や八重などの聯想は除却しなければならぬ。必竟この山里と梅の花との兩者に通じた聯想、即ち清く寂しい姿がこの句の餘情てある。して見れば、一面、「梅の花」て「山里」を形容したとも見られゝば、「萬歳遲き山里」て梅の花を形容したとも見られる。この點が頗る序詞や緣語や掛け語などに似て居るてはなからうか。

俳句ては、これを配合などゝいつてをつて、芭蕉が發句は寄せ合せものだといつたのも、これを指した語と見える。しかし、この修辭は元來、附合から來てゐるのて、僕は嘗て梅の花の句を、試に附合に改めたことがある、例の拙いのてはあるが、

萬歳遲き大原の
四五本は咲けるもありて梅の花

といへば、とにかく附句の姿てある。かういふ風の附句は、貞門や談林には極めて稀て、蕉風の所謂る「にほひ」「響」の附などゝいふがこれに近い。鑑賞者から批評的に見ると、配合したものは互に聯想の制限てあるとも見られるが、一つゝ共通した聯想がなくては配合は無意味てあるから、同じやうな「にほひ」、同じやうな「響」のするものを配合せよといふのが、作者に對する蕉風の敎訓の眞意てあらう。だから「動く」「動かぬ」といひ、或は「治定する」「治定せぬ」といふのが、十哲中の大議論てあつた。

鶯や茶の木畝の朝月夜
ほとゝぎす　大竹やぶをもる月夜

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

などが治定のよい例で、鶯と杜宇とは、同じ月夜でも茶の木畝、と大竹藪と異ふほど、匂ひが異ふ、響が異ふ。鶯も大竹藪でも鳴く、杜宇も茶の木畝でも聞けぬことはないが、唯不調和な聯想は句をなさぬのは、單なる寫實が詩を成さぬ所以をも説明するもので、又譬へば、例の「乙女子の小弓の的」では「圓方山」の序詞にならないのと同じ理由である。

この「匂ひの附」或は配合に關しては、蕉風の口癖として「ほそみ」「さび」「しほり」などゝいふ術語がある、さびは句の色にありしほりは餘勢にあつて、趣向、詞、器の閑寂などが、哀憐を含むとかいふことではない」と説いてあつて、蕉風の奥義であらうから、凡骨の窺知を許さぬものかも知らぬが、とにかくに、派手なことを忌むといふことだけは確である。ところで、派手を忌むとすると、勢ひ、配合或は附合にもあまりに明白な類似、調和よりも、幽かな細い趣味の相通じたものを好むのが當然の傾向で、例へば下京に雪後の雨を配合して、

　　下京や雪ふる上の夜の雨

といふやうなのが、蕉風の最も得意とした所である、附合でいつても、

　　書きなぐる墨繪をかしく秋くれて
　　　人にもくれず名物の梨
　　顏にものきてうたゝ寐の月
　　行燈の抽出し探がすはした錢

といふほどの、幽かな趣味の調和、譬へば一縷の香煙の幽かなるが、おぼつかなき秋蘭の香と薫りあつてゐようといふ、その所謂「ほそみ」が命であつた。

それが天明となると、頗る強い趣味の明白な類似或は調和となつて、優艶な朧月には大宮人を配合し、烈しい野分には鳥羽殿へ急ぐ騎馬武者を寄せ合して、

　　さしぬきを足でぬく夜や朧月
　　鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

といふやうな、早わかりがして、ビビッドな印象を與へるやうになつた。これは鳥渡、萬葉以下の序詞の流行から、古今の縁語比喩にうつッたのと同じ傾向である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

類似調和を見るに敏なといふのは長所であらう、しかしかの幽遠微妙なものは却つて失はれたのである。さもあれ、この修辭が、全く俳諧の社會に限られてゐたといふことは、我々の頗る遺憾に思つたところであつた。幸にして明治の文壇に於いて、この修辭を和歌に應用したものがある。それは恐くは意識的にてはなくて、蕪村調全盛の潮勢に誘はれた結果であらうから、その配合も天明的ではあるが、とにかくに創始の功を多しとせねばならぬ。

　詩集手に豆の葉鳴らす(人の形容句詞)人二人」(名詞)紀伊の霞は大和より多き(文)

　鎌倉や御佛なれど釋迦牟尼は美男におはす」(文)夏木立かな(名詞)

その巧拙の批評はともあれ、名詞の下にセンテンスを置き、センテンスの下に名詞を置き、ともに、文法上の關係なきものを唯相連ねて、兩者の調和を以つて詩趣の源泉としたといふことは、確かに、從來の和歌に見ないところである。鐵幹君が始めたのか、晶子女史の創意であるか、どちらかは未だ調べ得ないが、新詩社の名は、この點に於いては不朽であらうと思ふ。

近來流行する新體詩を見ると、この調子の修辭が、段々に長詩の中にも行はれ初めたやうに見える。唯遺憾なのは、今の新體詩家ことに昨今の流行兒の中には、言語上修辭上の智識に乏しくて、しかも、其の謠はうとする思想が、作者自身にすら殆んど夢のやうで、未だ明白に意識せられてゐないものを強ひて、其の半解の古語雅語と新らしい形式とで以つて表はさうとする、萬葉古今の語が、誤解せられた俳諧的修辭で以つて連ねられる、といふのが尠くない。そこで年齡知識も同じやうで同じやうな夢を見てゐる青年には、又夢のやうにその詩が理解せられる、否悟られるといふのみて、偶々いくらか古語雅語の眞の意味を知つてゐるものには、全く何のことゝも推測が出來ない。ことに、古文學に通じて古言雅語を解する人の多數、即ち俳諧などは知らない人にとつては、全然寐言に過ぎない。僕は今日の新體詩家の新らしいものを企てるに躊躇し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ない勇氣を多しとするとゝもに、願はくは少しく古語を理解し、且つ新らしい修辭の意義をも理解して運用してもらひ度いと思ふ。(此項完)

班鳩寺と法隆寺

樂山

法隆寺とは如何なる寺を云ふか是れ諸人の既に知る處なり然して班鳩寺とは則ち奈何予未だこれに對する定說を聞かずのみならず今日に至るも猶同一視せられつゝあるは實に予の遺憾とする處なり抑古來班鳩寺を以て法隆寺の別名となし諸人更に怪まず學者亦然りとなす嗚呼思はざるの甚しきにあらずや

抑班鳩寺は用明天皇の御誓願に因て同帝御在位中既に着手せられたるものなる事藥師佛光銘文に明なり同文に曰

池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時歲次丙午（用明天皇元年）年召於大王天皇與太子而誓願賜我大御病太平欲坐故將造寺藥師像作仕奉詔然當時崩賜造不堪者小治田大宮治天下大王天皇及東宮聖王大命受賜而歲次丁卯年仕奉

右の文中我大御病太平欲坐云々の文は決して病氣全快を待ちて藥師の像を作り寺を造りて安置し仕奉らむと云ふにあらず病氣全快を祈らむ爲めに寺を造り藥師の像をも作りて仕へ奉らむと詔せられたるにあらずや去れば天皇崩御の當時堂塔未だ其形をなすの暇なしと雖も既に材料を蒐集せられつゝありしは更に疑ふべからざる處あり斯くて業未だ成らざるに天皇崩じ給ひしかば造るに不堪とて其まゝ中止せられしを推古天皇即位せられてより詔して其業を繼續し完成を告げられたるものなる事亦信じて疑はざる處なり

猶天皇の御誓願は單に藥師の像をのみ鑄造して仕へ奉らむとにはあらずして即ち寺院を建立し併せて藥師の像を作り仕へ奉らむと詔せられたるものなれば後に其業を繼續し誓願の意を完ふせらるゝ時に臨み單に藥師のみを鑄造して寺院の建立なきの理なし然も天皇の遺志に對し在位の天皇の詔せられたるに於てをや

よし推古天皇より造寺の詔勅なかりしとせむか太子父王と共に誓願せられたる事は實に光銘の文の如くなれば先づ藥師佛を鑄造するに當りては第一に惹起せらるべき記臆にあらずや假令用明天皇の誓願中に寺を作るの言なしとするも寺なきに佛を鑄造してこれを何處にか安置せむとすらむ況や造寺に重きをおかれたるに於てをや然して是れを費用の辨じ得ざるが爲めと假定せむか然らば太子の私寺たる法隆寺の如きは正に父王の爲めに當られざるべからず然るに法隆寺を以て特に吾が寺と稱せられたるは何ぞやこれ父王の爲めに班鳩寺あり母后のために中宮寺を建立すべく豫期せられたるに依らざるべからず思ふに法隆寺は班鳩寺建立の餘材を以て建てられたるものと云ふも敢て過言にあらざるべし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

次に日本書紀推古天皇十四年秋七月の條下に曰天皇請二皇太子一令レ講二勝鬘經一三日說竟之。是歲皇太子亦講二法華經於岡本宮一天皇大喜レ之播磨國水田百町施二于皇太子一因以納二斑鳩寺一とあるは即ち用明天皇の爲めに建立せられたる斑鳩寺なる事亦明なり

次に斑鳩寺の礎石及地位に就て是れを云はむか古今一陽集卷末に礎石と題して曰觀音院敷地之内岱二押角一藪林傍一ニ一之有二磐石一高三尺餘廣一丈餘石之面如レ盤又彫二如レ圖形一又石廻尺餘方石在二土中一又穿二石際一燒米出二於地底一都其石之形如二塔之心柱礎石一無二傳記一無二古老傳一無レ識二其所謂何謂事一(中略)土俗傳云昔日有レ謂二若草之伽藍一其若草之邊纔隔二墻壁一也云々猶其礎石の形狀を圖解せり或人は明治の初年普門院裏手土塀を去る十五間北方に存せし礎石凡そ三角形をなし長き所一丈餘一方凡そ七尺一方凡そ六尺のものを以て古今一陽集圖解の誤となし論ずると雖も似て非なるもの是れ一あるを知りて二あるを知らざるものと云ふべし此礎石の存せしは正に普門院裏より觀音院の裏を徹して其敷地たりしを證するものと云ふべし

然して一葉集所載の礎石大なるものには略中央に方二尺餘深一寸餘の穴を穿てり明治初年取除きたるもの亦同じく方形二尺一寸餘次に其傍にありし約三角形をなせる礎石は其中央に直徑二尺三寸餘の圓形凸出柱跡を存す此外東院傳法堂禮堂の柱石にして直徑二尺三寸餘圓形凸形のもの及ひ約二尺の二樣のもの七箇を使用せられたり其使用せられたる礎石の傍を掘て是れを見るに何れも周圍を割取りたる形跡あり然も禮堂西方より一間を入りたる柱下に用ひられたる礎石の如き圓形の約三分一を割り取りて使用せられたり併して其石種の他の物と異なるを以て試に其同種の石を求めたるに同堂下四箇所に使用せられ圓形の一部分宛を存す

扨東院建立以前即ち天平以前に是れ等礎石を止むべき建造物ありしや否や天平以前に建立せられしは唯斑鳩宮あるのみ然らは斑鳩の宮にして此礎石を止めしとせむか平城宮殿に徵しても亦其大に失するにあらずや當時の宮殿としては決して斯く大なるものにあらざるや明なり然らば是れを何れに求めしか即ち斑鳩寺にあらずして又他なかるべきなり然も其柱跡にして同尺のものを存するに於ては愈動すべからざるものに屬す爰に於てか予は東院建立の當時斑鳩寺の礎石を使用し小なる分は周圍を少しく碎き大なるは三箇或は四箇に碎きて運送の便をはかりたるものなるを信ずるなり

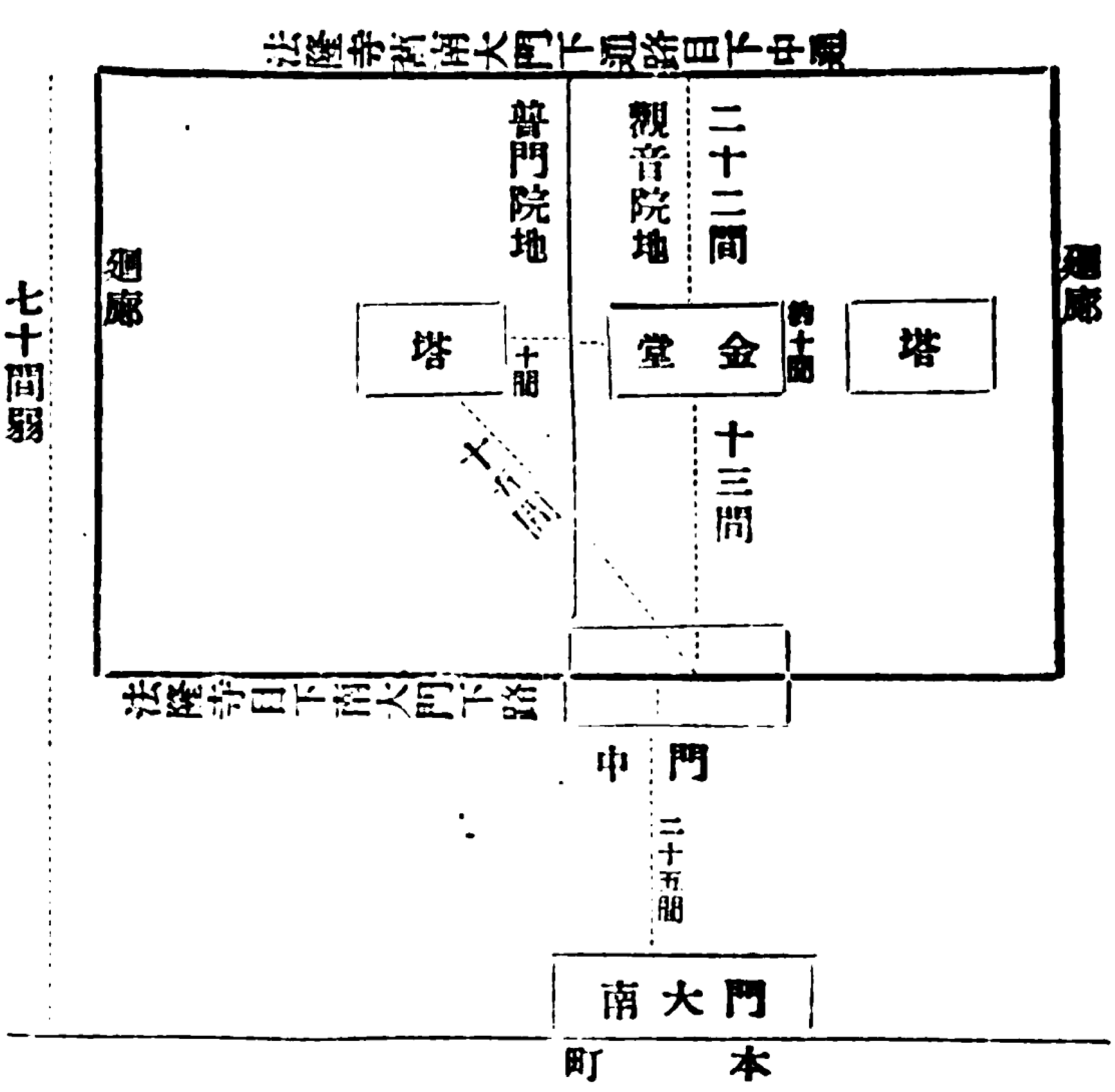
次に明治初年取除きたる礎石の傍に金堂なるか塔なるか確なる事は知るに由なきも兎に角扉の受石長一丈二尺餘なるものを發掘せられたり幅約一尺二寸にして二寸餘高く切立てたり猶觀音院敷地を距る約二間の東方福井小路に古來より辨財天を祭れる一礎石あり今移して東院東裏に存す然れ共火災の爲め損せしもの丶如く所々缺損して充分なる事知り難し去れど其存在せし處に因て大略を推知せらるべきなり

扨其位置に就て之れを云はむか古今目錄抄に觀音院の敷地云々と云へるもの及ひ明治初年取除きたるもの等は塔に使用せられたるものなるべし金堂等に用ゐられたるものにあらざるは其凹形二尺餘の穴を以て知らる

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

べし然れば藥師寺の如く東西に二基の塔を建造せられたるものにあらざるか南北に比して東西の長きは是れが爲めならむか然らば觀音院裏に一基普門院裏に一基等にして其中央北方に寄りて金堂を建立せられたるものと云ふべし福井小路の礎石の如きも亦塔に使用せられたるものならむ去れど其所在の一ならざるを以て種々の論をなす者ありと雖も上述の如く東院礎石は總て此礎石を用ひたるが如く後世に至りても時に從ひ要に應じ是れ等の使用せられつゝありしは疑を容れざる處にして福井小路の如きは觀音院敷地より僅か二間餘を隔つるのみ又何かの用に供せむ爲め爰に移したるを其まゝ明治に及びしものならむ猶此近傍の地形を見るに觀音院敷地より實光院裏に至る迄地三段となれり其内觀音院敷地より普門院を徹し花園院敷地に至る迄は四方約三尺高く阿彌陀院敷地に至り約一尺餘を降り實光院に至り亦約一尺を降る其高き處東西百三十餘間南北七十間弱の地こそ實に伽藍敷地なれ

次に類例を求めて是れを配置すべし先づ東院傳法堂及び禮堂に使用せられたる礎石は班鳩寺の金堂及び中門に用ひられたるものなるべし其礎石を法隆寺の金堂中門の比例によりて分たば二尺三寸餘なるは金堂の礎石にして二尺弱なるは中門の料と推定せらるべし扨中宮寺の例を見むか同寺舊跡中字赤門より目下に存せる中門礎石に至る二十五間法隆寺舊南大門より中門中心に至る約二十三間同中宮寺中門礎石より舊御殿跡に至る三十四間法隆寺中門より舊講堂跡に至る約三十三間法隆寺金堂より塔に至る九間法隆寺塔より舊金堂跡高地(今は畑)迄約九間法隆寺金堂より中門に至る十三間强等により當時の配置略推せらるべし依て班鳩寺伽藍に付き此比例により配置せば目下法隆寺村町の道路は班鳩寺の南大門とも稱すべき門下に東西せし通路にして夫れより二十五間にして目下の普門院裏土塀に至る(此近傍の竹林を開耕の際瓦片の厚きもの多く出たりと云ふ是れ中門の瓦片ならむ)法隆寺より二間長く中宮寺と同間なり此所即ち中門なり夫れより入りて十五間(法隆寺と同間)にて明治の初年取除きたる礎塔石跡に至る同じく右約十間金堂敷地たるべし若し東塔のありしならば此石即ち觀音院敷地なるや必せり大略左の如きものならむ



去れど講堂を建つべき餘地なし法隆寺舊講堂より中門に至る三十三間餘班鳩寺は四十間弱を有するも金堂其中に建てられたるにあらざれば東塔の建立すべき所なし東塔なしとするも既に四十間に限られ其北方は法隆寺南大門下に左右せる通路なり其四十間の中左右に金堂塔を建造せば金堂より北端迄は僅か二十餘間迚も講堂を建立するの餘地を存せず

講堂なきの故を以て種々の說をなす人あるべしと雖も予は當時に於て講堂の要なきを信ずるなり獨班鳩寺のみに止らず法隆寺中宮寺法起寺亦共に然り扨欽明帝より通じて推古帝の當時に至る社會の狀態を通觀せよ即ち奈何上流社會の或一部否社會の一部に於ては信仰の念尤も深かりしと雖も亦一部に於ては全然是れを排斥しつゝありしにあらずや爲に守屋の戰あり上流に於て即ち然り況や中下流に於てをやよし極力反對せざりしとも亦嫌ばざるの多かりしは明なり未だ佛教の何たるを解せず神國の一念は容易に變し能はざるは當然なり明治初年の耶蘇教に於けるが如き觀なき能はず然も漢字の普及至らざるの時代何ぞ學理的研究の要あらむや然も太子解し難きものある時は夢殿に於て禪定に入る云々の如きより考ふれば太子も經論以外の精神修養に專念せられたるものにあらずや猶太子生ぜし時光を放ち云々異香あり云々薨する時紫雲云々山背大兄王子薨する時紫雲云々音樂空に響く云々の如きは無量壽經の思想にして南無阿彌陀佛一天張即ち念佛往生を主張せられだるや疑なし太子出生して言葉の初めに南無佛と稱へたり云々の如き亦該當するにあらずや兎に角尤も簡易にして入り易く行ひ易からざるべからずよし初より支那に於ける講堂と其要を異にし學問の爲めに使用せられず單に儀式の場として使用せられたりとせば猶更其必要を認めず併し吾が國の講堂も初めより儀式の爲めにのみ建立せられたるものとは思はれず支那的に學問所を設けられしを便宜上使用して遂に例をなせるものと云ふべく推古帝十六年の頃より學問僧何々來ると特に學問の文字を負はせたるより見るも此頃より經論の學理的研究の基を開きたるものならむ然れ共當時既に法隆寺は成れり班鳩寺は猶數年の以前に完成せられたり何ぞ講堂を備ふべき若し講堂を備へたりとせば少なくとも推古帝末の計畫に成りしものにして其時代の降れるを證明するものにあらずや即ち東京大學病院の不完全を京都大學にて補足せるの類ならざるべからず平子君は云ふ法隆學問寺とも稱する所にして講堂なきの理なしと君は未だ法隆寺の歷史を詳にせざるなり君は流記資財の文を以て直に建立時代に應用せむとす亦誤れるの甚だしきにあらずや此學問寺の名は同寺東院に對する名稱にして本有の寺名にあらず東院の僧は學に重きを置かず即ち禪を以て一團をなし西院は學侶即ち經論研讚を以て特能となす東院は惣名たる法隆寺を以て名とし西院は學問の字を加へて名とす目下の中の門を以て是れを分つ近來に至る迄て即ち然り天平時代東院建立後に發生せし新語を以て建立時代の法隆寺を論ぜむとは又妄ならずや。

次に寺域に就て云はむか法隆寺流記資財に方百丈とあり然して當時唐尺の用ひられたるものなれば目下の九十八丈即ち方百六十三間强二万六千六百餘坪たるべし扨當時の舊記に依れば南大門は中門前の高地にあり西

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

門亦四十餘間の東にあり東門は鏡の池の東南にあり然れば目下の中通りの路は舊南大門下に東西せし通路にして南方爰に極れり然れば從て寺城を北方に向て取らざるべからず試に北に向ひて百六十三間餘の敷地を求めむか山あり澤あり土地の凸凹云はむ方なく既に百間の以上亦取る可き所なく亦使用せられし形跡を認めず方百丈とは當代の皇居に比するも實に其大に失するの觀なき能はず宜なりこれ斑鳩寺城を合算したる數なればなり然して中宮寺の如き聖徳太子母后の宮殿地を以て建てられたりと云ふもの亦一萬一千四百五十餘坪に過ぎず東院を斑鳩宮舊跡となすも僅か六千六百坪餘にあらずや當代の總てに於てこれを觀る決して二萬以上の地を有するが如き斷じて在るべからず因て試に斑鳩寺舊跡南端より北方に向ひ法隆寺北端に行く果せる哉百六十餘間實に平坦にして然も使用せられたる形跡を認め即ち梵天山下に及ぶ爰に於てか予は天平流記資財の斑鳩寺舊跡をも算加せしものなるを信じて疑はざる所なり

上述の如く礎石及び寺城佛光銘より斑鳩寺の存在に對して予は何等の疑ふ處なく信じて止まざるなり去れど猶一二に就て述べ試みむ或人は云はむ斑鳩寺にして果して法隆寺と異名異物とせば本佛たるは何ぞと然り法隆寺の本佛は彌陀にして斑鳩寺の本佛は藥師なり

先づ燒失年代より云はむ日本書紀天智天皇九年の條下法隆寺全燒の記事に就ては干支一運の誤として平子君の説あり予も亦此説を借りて論ぜむ斑鳩寺は推古天皇十八年四月三十日夜半出火して巍々たる法閣烏有に歸す故に衆僧寄る所なく本佛を負ひて法隆寺に至り殘餘の資財を衛ひ來り本佛を法隆寺金堂に据へたるなり既に講堂の條下に云へるが如く勤靈主義を以て三世因果の理を說き平凡なる念佛往生を以て思想を傾け是れが鼓吹をはかりつゝありし當時なれば法隆寺の本佛として彌陀を安置するも亦理なきにあらず後藥師三尊を安置するに及び太子父王のために鑄造せられたるものなれば是れを本佛となし彌陀三尊を西間に移されたるものと云ふべし彌陀及び藥師の臺座の其樣式に於て殆と異るなきを見る思ふに法隆寺の本佛たる彌陀は十五六年の頃鑄造安置せられつゝありしに藥師を移し本佛とするに際し臺座を作られしものなれば其工匠の同人なりしやも計られず僅か降りて成りし釋迦臺座の似て大に異るあるは其工匠の全く別人なるを示すものにあらずや目下存する彌陀の中古作製せられたるは何人も是れを知らむ爰に述ぶるは八百年以前盜難に遇ひたる彌陀三尊なる事を忘るべからず然して其臺座の比較より目下存する彌陀よりは一層大なりしものゝ如し天蓋の如きも即ち然り藥師法隆寺に移せし際同時に作り出されたるものならざるべからず故に西間中間の二箇の形樣及び模様山嶽等亦異る所なしかつて日本美術誌上に誰なるか姓名は記憶せざるも法隆寺金堂須彌壇の臺の比較より大に失する由を云へる者あり然れども是れ事情上已を得ざるものにして建立の當時は單に中間のみなりしを必要に迫り斯く大に造りなされたるものなる事明ならずや

終りに臨みて一言せむ古來斑鳩と鵤とを同一視せられつゝあり然れども使用上に大に差あるを思ふなり斑鳩寺とは本來の斑鳩即ち上述の斑鳩寺にして鵤寺は法隆寺の別名と稱せらるゝ鵤寺なり見よ寺名にして斑鳩の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

文字を用たるを日本書紀にしては推古帝十四年の條下水田施入の條天智天皇八年の條等に是れあるのみ然れ共是れ皆本來の斑鳩寺を稱せるものにして法隆寺の別名ならず日本紀天智天皇八年の記事は全く誤にして論すべき限にならず其外史書其數多しと雖も一として推古十八年斑鳩寺燒失以後に斑鳩寺の文字を以て法隆寺をあらはせるものなし皆鵤なり十三大寺に賜ひたる寺印の如き亦鵤なり扶桑略記推古天皇十五年四月三十日夜半斑鳩寺火災云々補闕記十八年四月卅日夜半斑鳩寺災あり云々の如き皆この本來の法隆寺と誤る實に思はざるの甚しきに非ずや斑鳩と鵤音同じと雖も使用所の大差あるを知るべきなり猶後日を待て續稿せむ（四月十四日）

怪物傳（五）

覆面冠者

一 高利貸の雄

高利貸——高利貸と言へば、世人悉く不快の眼を以て迎へてゐる。併しながら天下最も能く人間の性格を發揮して赤條裸々てあるのは、小兒と、小說家と此の高利貸てあらう。小兒は其の泣聲に現はし、小說家は筆に現はし、高利貸は金錢の上に現はしてゐる丈けの相違て、社會自然の微妙を發揮してゐるとは、三者おのく相似て居る。

今日高利貸として、名を稱せられて居るのは、岡部惣五郎、上野篤三、後藤佐一郎、清水定右衛門、山本義丈、倉田軍次、赤上三之助等てあるが、一二年來、千葉の片田舍より出て丶、東京の高利貸社會に、頭角を現はして來たのは、綽名を千葉の虎列剌と稱せられて居る辨谷茂三郎てあらう。

千葉の虎列剌！岡部惣五郎等に比ぶれば、ほんの雛鷄、高利貸の雄を以て稱する譯にはゆかぬが、其の性格が高利貸に恰適してゐるとは、誰が何と言つても、此の辨谷茂三郎に及ぶ者なく、金錢の外には、衣服飲食の慾なく、固より義理もなく、人情もなく渾身悉く蓄財の慾を以て充ちてゐる。余は曾て其の人物の一端を洩らしたとはあるが、其の性格より言へば、渠は眞個高利貸中の逸品。

知らず、虎列剌を以て稱せらるる辨谷某とは如何な

もあるが、それ等の、反動と云ふ一層大きな弊害に心づかぬ盲目者流は論外として、青年學生に、ことに夏期に、有りふれた戀愛小説などをすゝめることは、如何であらうか。

夏期の心身の狀態は啻にしまりのない、冥想靜思を要する種類の讀書に不適當な許りでない。統計から見ても夏のはじめよりかけて、或は自殺、或は殺人と云ふやうな、主として情の過度の激昂から來る罪惡の最も行はれ易い時節である。酒を過ごした後などの樣に、精神の力が比較的に鈍くつて、欲望情欲なんどを統御する力が薄く、爲めにおもはず平生の節制力を失つて、不測の罪過を犯すことが多いのである。生理上から見ても、性欲の最も旺盛なるは此時期である。心理上から見ても情火の盛なころである。かゝる時期に於て、さらぬだに情熱もゆる青春の男女學生に、淫靡のそしりを免かれぬ昨今流行の小説類、別しては誘惑の力强いきはどい所までを寫實的に描いた小説などを讀ますることは、たとひ道學先生ならずとも、自稱有識者ならずとも、頗る躊躇すべきことゝ思ふ。

過日もさる講演會の席上で文藝の玩賞と主觀の狀態との關係を論じたとき、余は主として主觀に與ふる影響を數へて、

一、自然（年齡氣候、場所及身體の狀態、等）の影響

二、經驗の影響

として、後者を更に

（甲）個人的境遇の影響

（乙）教育及訓練の影響

（丙）社會的境遇の影響

に彙類して考察した。今當眼の問題には（一）の方は關係が少いが、しかしその（丙）だけは幾らか關係があらう。

と云ふのは、夏期の休息必しも別の避暑地を要する理由もないが、近年の流行で、壯年ざかりの若ものが、やれ日光の箱根のとか、乃至湘南の海濱。總房の海岸と、避暑地を求めて、集り來る。上流良家の子女のみが、かゝる地には亦學生の游泳場がお伴をして存在す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。たとひ避暑地てなくても、東都ならば公園の夕すゞみ。地方ならば盆おどり。自然に若い、熱い血の燃え上つてる男女が、朝夕接近の場合が多い。例の有識者の風紀論や、道學先生の爲めに、金縛りにくゝられて、加之學科の重き負擔に妨げられて、殺風景なる寄宿舎生活に非ずば、下宿樓上の寸燐箱に、小説類をせめての賴りに空想に耽つて居たものが、學科はない、束縛は少ない、時候は情火を煽り立てる、小説類は誘惑する、手引をするとなつては、岌々乎として殆いかなてある。まして、避暑とやらんに浮身をやつす上流の人々の中でも、妾は伴をする、妓はつれる、其間は御機嫌を伺ふと云ふ樣なも少くない。朝夕見聞する若い男女の間に、見やう見まねて罪過を犯すものが、決して鮮くはあるまい。

から老成ぶつて考ふれば、まづ一般には夏期の青年男女學生の讀ものとして、ありふれた小説類は推薦し難い。さらば難かしくなくつて、面白くつて、そして無害有益のものはと云へば、

一には旅行記風土記の、有益てしかも面白いもの。

二には正史、傳記などの興多きもの。况んや志氣を鼓舞するなどの利あるものはなほさら。

三には詩集歌集などの純潔なもの。

這般の讀ものならば、前陳の弊もなく、夏期の休息時の讀書の材としての資格にも適はうかと思はれる。が、これは大まかな無雜な所を述べた迄て、とかくは萬法唯心てある。人の心は融通無礙てある。非常の厄災も、一きはのを免れしめた神佛の力ぞと、感謝、報恩の念をも起させる。判斷力が備はつて、志操が高潔てあつたなら「ナヽ」を讀まうが、「青春」を愛讀しやうが、慰籍こそあれ、何の害もなからう。或はいやに沈んだ、青年の元氣もなく、華嚴の瀧、阿蘇の火口に想を馳する輩には、却て應病與藥の好材料となるもあらう。それら特別の場合は姑く措く。

終りに、今日以前、余が夏の休息期に、好んで讀んだ書を二つ三つ列記しやう。

荘子、列子、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

バイロンの詩集
モムゼンの羅馬史
蕃地の旅行記

など。自ら定めた讀書の規則に曰く、氣が向いたら讀む。いやになつたら休めてゐる。唯これのみ。)利害も言ふまい。理由も述べまい。唯好んで讀んだ丈けは確てある。今後は如何に變らうか。けふこの頃の天氣同樣、自分でもわからぬ。

次號の本欄には、佐々醒雪氏は言ふまでも非ず、金子筑水氏、吳秀三氏、角田浩々氏、釋宗活氏、千葉鑛藏氏、覆面冠者等、その他諸大家の名篇燦として光彩を紙上に爭ふべし。

本號の公論欄には田中穗積氏の論文、掲げらるべき筈のところ氏の多忙なりしため次號に廻すことゝせり、その他例により中村進午氏外數名家に寄稿を依賴しあり、男女學生交際論には佛人、博士リギヨール氏の高見を掲ぐべし。



馬政の要訣

『東京朝日新聞』

我國馬匹改良の端緒は古し。幕府時代に於て既に之を見、維新前早くも數多歐洲馬匹の輸入を告げ、日清戰役後に及ひては其聲漸く大にして施設も亦見るべきもの尠からざるに至りしが、今度の日露戰役を經て遂に大仕掛の馬政の必要を感じ、茲に馬政局開設の都合とはなれり。大仕掛の馬政の必要、吾人に於て異論ある可き筈もなく、馬政局の開設亦同樣異論はなし。但その官制に關して聊か當局と所見を異にしたるが、樞密院の修正により、異論の分量を減じたり。今や長官の任命もあり、いよ〳〵馬政實行の時代となりしに就ては、更に馬政そのものに就て豫め所見を陳述し置かざる可からず。

さて是までの馬匹改良の實跡如何と尋ぬるに、幾分の効果は業に既に

之あり。決して無用に歸したるにはあられど、其功未だ十分ならず、遂に今度の大仕掛を要するに至りし原因は、吾人の所見を以てすれば、其用意の足らざる所ありて、單に馬匹改良の方法を馬種選擇にのみ求めたるに在り。委しく言へば、唯良種の輸入にのみ熱中して、一層大切なる飼養及管理改良のことを忘却したるに在り。我國の農學者はいづれも飼養及管理の大切なるを知れりといへども、完全に其改良を實行するもの極めて尠し。斯の如くにして我國馬匹の改良は中途半端たるを免れず。蓋し英國純血種の馬匹は、骨格及血液の優良なる點に於て世界に冠絕し、各國皆之を標準として其馬匹を改良しつゝあり。然るに各國の馬匹は皆夫れ〳〵特種の長所を具へ、多少の出色を得たるには至りしかど、遂に英國の純血種に及ぶには至らず。是實に飼養及管理の方法其宜しきに叶ひ、多大の年月を積みて人造的に良馬を仕上ぐるの術、英國に及ばざる所あればなり。罪は馬種にあらず、飼養及管理の人事未だ盡さゞる所あるに在り。以て飼養及管理改良が馬政の第一義たるを知るべし。見よ英國種とても決して初めより完全なりしにはあらず。千七百年代に於ては、其純血種は平均四尺九寸內外の體尺なりしといふ。然るに現在平均は五尺四寸强なり。二百年間に五寸の强を見るに至りしは、馬種の効能にあらずして、而して飼養及管理の良好の効能なり。彼の小馬なる一種の如きは、體軀の矮小を以て尊ばれ、四尺六寸强を其標準體尺の最大限度とするに拘らず、較もすれば過大の生育を告げ、體軀の矮小を持續せしむること頗る困難なるに至れりといふ。英國の飼養及管理は、過ぐる有るも及ばざる無し。亦以て人力の効果の盛なるを證す可し。我國の馬匹改良を策する人人が、我馬體の最大缺點たる矮小を變じて長大に走らしむるを主眼とするは固より佳なり。而も其方法として單に體尺の長大なる良馬種を輸入するのみなるは、誤れりと謂はざるを得ず。英國の純血種の優良なるは、本來天爲に非ずして人爲なり。我國東北の馬匹が近來幾分か其優良を加へたるは良種輸入混血の作用にも因る可きが、其最大原因は實に舊藩政時代の放牧法を改めて舍飼となし、且尠少ながら管理に注意するに至りしに依る。要訣は前者に在らずして、後者に在り。歐米各國の馬政も、亦前者を重んずるよりも、後者を貴しとす。我國も亦斯の如くにして進まざるべからず。

管理改良の事は必らずしも困難ならず更に飼養の方法をして中分ならしむるには、飼料の產出に大に意を致すの要あり。飼料の二大要素たるは濃厚飼料及粗大飼料なるが、從來我國にて濃厚飼料として用ひ來れる大麥及小麥麬の如き之を燕麥に比すれば則ち價値に乏しきや勿論なり。然るに我國に於ては地價、氣候及び風土等の關係上、北海道及東北地方の一部を除きては亦他に之れを耕作する能はざるの障害あり。粗大飼料の改良も亦厄介なるものなり。從來我國にて之に供するものは、山野自生の雜草にして、品質の劣惡なるが上誅求に誅求を重ね、今や漸く其餘孽を保つに過ぎず。此故に一部人士の間には牧草養成の必要を唱ふるものあれど、官民ともに種馬の輸入のみに心を奪はれ、之に對して手を染むるに暇なき有樣なり。且つ牧草も北海道及東北地方を除けば、全國を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る人物ぞ――今より一二年前、霜風寒き十二月の或日、横濱の正金銀行店前に奇怪の事實が演ぜられたことあり。木綿縞を着た、四十二三の小汚なき田舎漢がぎよろ〳〵四方を見廻はし乍ら、手に藁束を携へて這入つて來た。暫らく佇んでゐたが、何か首肯きながら、すと預口へ來て、言葉も粗末に

「己アの金を預つて呉れッしやらぬか

と藪から棒に申出たのである。その樣子を見ると、昨日横濱へ出たらんと思はれるばかりの、着物といへば羽織に綿入一枚の、べしよ〳〵と薄ら寒い風采。然かも田舎漢の辯に、言葉振が那處やら横柄てあるのだ、それと見た掛員は、普通に答へるも馬鹿らしと「此處は銀行だから預るが、お前さんは幾何預ける積りだ」と尋ぬれば、此の田舎漢は、携へてゐる藁束を前に出だしながら

「三萬兩預けやうと思ふだ

と掛員の顏を見ながら、平然と答へる。三萬兩！椽のだらりと下がつた帽子の、髮を蓬の如くに亂した此の田舎漢は、三萬圓の大金を預けやうといふのである。

西洋髮附で髮を綺麗に分けた掛員は、餘りに言草が仰山であるので、信じなかつたが、此の田舎漢は、掛員の驚くにも頓着なく、藁束より、一枚〳〵と數へて、十圓札て、三萬圓を出したので、掛員は營ろか、銀行員一同は口あんごり、呆氣に取られたのである。……

……是れ虎列刺辨谷某が、用事を以て横濱に出てたる時、無意識に演じた一場の光景である。

今日都下に於て高利貸の雄を以て稱せらるゝ後藤佐一郎でも、淸水定右衛門でも、上野篤三でも、山本義丈でも、血なく涙なきとは相似てゐるが、其の住居を見れば、嚴然とした門構へ。その人物も、紳士風を吹かせて、世間の評判に氣を遣つてゐるが、獨り此の辨谷は、千葉道場町の、家族の住める郷里の如きは、豚小屋と異るなく、乞食のやうな服裝を以て、晏如としてゐる。東京へ出ても、債權のある機會にして、淺草の井生村樓に宿泊して、下駄を草履のやうに減らし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て都下の債務者を苦めてゐる。

そして渠の言草が一見識を備へて、氣取つてゐる。曰く、五十に爲る迄は人間交際はせぬと。渠は、其の營業高利業に專心にして、五十歳に至る迄は人間を以て居らぬといふ見識を立てゝ居るのである。千葉縣下は言ふ迄もなく、此の東京にても、其の名を知れる者は、身の毛を立てゝ毛蟲の如く嫌つて居るのも、無理はない。但し斯くの如く嫌はれてゐても、渠自身には何等の感を與へず、平然として、例の虎列剌の特性を發揮して居る。

渠の資産が、高利貸としては、第二流以下なるにも拘らず、嶄然として、其の地歩を占めて居るのは、世間の毀譽褒貶に頓着なき此の性格に在るので、余輩が怪物傳の中に收めたのも、亦た此の性格を異とし、珍としたのである。

その履歴は極めて平凡。二三百圓の小額を以て、衣服飲食迄乞食にして、孜々として今日の産を爲したので、其の間に何等の奇は無いが、一ト度渠の下に債務者と爲れば、返金を得る迄は、如何なる障害に逢ふも辟易せず、虎列剌の如く附き纏ふて、執着深く、根氣の强いのには何人も降參せぬ者が無いのである。天は、不思議の醜人物を千葉の片田舍に出したものではない乎。而して、自から標榜して、人間交際せぬと稱してゐる此の千葉の虎列剌は、華美を競ひ、旅行を爭ふ都人士の荒膽を挫かんとて、東京へ乘り出したのである。

辨谷茂三郎君、足下。其の醜陋の資を以て、都會の不健全なる金融社會に、虎列剌の特性を發揮せよ、至囑々々。余は世人に倣ふて、足下の醜腕を醜とする者でない、醜ならば、飽くまで醜となれ。善か、惡か。美か、醜か。生半可は達人の不快とする所で、余の足下に取るのも、全力を蓄財の一ッに集注して、醜の極致を示してゐるからである。併し乍ら、子守のやうな少女を玩んで、獨り笑坪に入つてゐるのは、聊か足下の人物に適當せぬ。虎列剌は、那邊までも虎列剌流で無くてはならぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二　膏藥萬能主義の人

鑛山師社會に不思議の人物が尠くないが、北海道古武井の硫黄鑛區所有者ほど、奇妙奇天烈な人物は、此の日本國には、恐くは二人とは居るまい。

古武井の硫黄鑛區と言へば、鑛區の廣袤六十萬坪、鑛層厚さ四十尺、品質の佳良なるばかりでなく、鑛脉は殆んど無際涯であるので、鑛山師の間にては、東洋一の硫黄鑛區と言はれて居る。曾て三井家は、此の鑛區に垂涎し、七十萬圓の呼聲を以て買收せんとしたが、此の鑛區所有者は、常識を以て謀るべからざる不思議の奇物であるので、首を横に振つて、七十萬圓は七百萬圓でも離さぬと氣張つたので、談判は其の儘休焉と爲つたが、兎に角も、古武井の硫黄鑛區は、他に見るべからざる大鑛區であるので、鑛山師の間にては、世界第一の硫黄であるなどと仰山に評判されてゐる。

此の古武井の鑛區所有者は、潜水業より身を出した押野常松といふ奇物であるので、鑛區其れ自身よりも、その所有者の人物が、鑛山師の間に、評判が高いのである。

押野常松！讀者の中には、恐くは一人として、其の名を知つてゐる者はあるまい、押野自身も、雜誌の上に、其の名の現はれたのを意外とするであらう。いや或意味に於ける大鑛業家たる此の押野老は、雜誌の上に如何出てゐるか、猫に小判、何等の趣味を覺へないのであるといふのは、此の押野は、一部には其の名が喧傳されてゐても、眼に一丁字なき盲漢と來てゐるから、雜誌に如何出てゐてもお構へなし、知らぬが佛性の世間毀譽褒貶に頓着なく、一生懸命に鑛區の擴張に心血を注いでゐるのである。

……一丁字もなき文盲漢と言へば、此の鑛業家は、事實に相違するといつて、不服を訴へるであらう、全然の文盲漢でなく、押野常松といふ姓名丈けは、書くとを知つてゐる。然かも押野の野の字は難かしいと見え、何時も眞假名の「の」字を書いて居るが、兎に角も「押の常松」の四字丈けは、立派に書くとが出來る、花押のやうに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

併しながら、我國の如き僅に三四十年の間に、幾多の變化を示して、一代分限者多き國にては、眼に一丁字なしといつて、敢て不思議とするに足らぬが、押野常松に取るべきは、其の人物が、常人と異つて、破格に出來てゐる事て親しく押野に接した者は、何人といへども、一驚を喫せぬ者が無いのである。

押野は自慾を以て固まつてゐる鑛山師である。併しながら世間の連中と異つて、五十圓や百圓の小金に執(けち)く着して居らず、例令ば箱館の旅宿に入つても、すと座敷に通ると、突然定宿(いきなりやど)の女房を呼んで、常に携へてゐる合切袋より、百圓札を探して、前に投げ出す。日用品は、一切宿屋の勘定に任せて、滯在中は、頓と振り向いても見ないのである。その百圓札を投げ出す模樣が、また一種異つてゐる。煙草でも手形でも、膏藥でも、携帶品一切を詰めてゐる合切袋より、えんやらやつと百圓札を探がして、片手に袋の口を締めると同時に、その途端に、片手にした百圓札をぽひと爪彈して、投げ出すのである。その態度が、下婢が鰮魚の頭を猫に投げるよりも平氣のやうに見ゆるので、面白い。

その雜然(ごちやごちや)と推し籠んである、常に坐右より離さない合切袋なる者が、一大奇觀。殆んど五六升の米を入れたらんと思はれる斗りの大きな袋て、携帶品は何んても御座れ、一切合切推し籠んてゐる、特に合切袋の物品に特色とすべきは、煙草と膏藥。——此の押野老は、大の衞生家て、普通の煙草は、腦病の害なりといつて、煙草の代りに、大きな煙管(パイプ)に艾を詰めて、ぽかり〳〵と煙を吹いてゐる。

煙草の代りに艾を用ゐてゐるのが奇天烈てあるよりも、此の押野老は、其の人物に不似合にも、主義の人てあるのが、一層人目を惹く。主義の人と言つて、社會主義の人ても無ければ、本能主義の人ても無い、即ち膏藥萬能主義の人てあるのだ。——一體、此の老人の信仰として、少年の頃より、未だ曾て醫藥を用ゐたとなく、頭痛て御座れ、腹痛て御座れ、齒痛ても、何ても、有らゆる病氣は、一切膏藥を以て全癒し得べしと定めて、何を忘れても、此の膏藥丈けは、常に合切

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

袋の中に入れて居るのである。例令ば鼻水が出れば鼻に、頭痛が爲ると額に顔一面にべたりと膏藥を貼つて、澄ましてゐる。啻に自己一個丈け此の膏藥万能主義を株守するのみならず、知巳、朋友、普く一切に此の功德を施さんとするので、函館の定宿の如きは、此鑛業家が泊ると最期、女將を初め、下婢などは、互に相戒めて、此の奇物の前では、病氣の病字も、口頭に出さぬ樣に申し合せてゐる。

萬一口が滑つて病氣と一言洩らせば一大事！例の合切袋より、勿體らしく膏藥を出だし、對手の模樣が如何てあらうが頓着なく、仔細らしく、病狀を質して、膏藥の効能を駢べるのである、そして自身膏藥を貼つて、一二分間經ると、如何ぢや、快然したらう、最う全癒つたらう、と言葉を掛けるので、癒らぬとも言へず腹の痛いのを忍んて、唯、爽然しました……押野老も、隨分人が惡ひ。

鑛山師の間に、此の膏藥萬能主義の人を見る、人物の畸は言ふ迄もなく、杓子定規の當世、頗る珍とすべきてはない乎。

然かも波止場人足より身を出だして、潜水業に身代を作り、鑛山師の仲間に入つて、東洋一の硫黃鑛區所有者に漕ぎ付けたのは、茫漠とした人格の中に、一種の才氣を蘊んてゐるからで、其人物を解剖すると、幾多の特色を認むるのであるが、態と筆を曖昧にして、押野の人物のやうに、ぼんやりと、之にて讀者に暫らくお暇を告ぐべし。

夏期と讀書

龍峽生

雁が歸れば燕が來る。綠が褪すれば紅葉がにほふ。四季折々の變遷は年々歳々きまつて居る。若しさる人の言うた樣に、人はどこまでも自然の兒てあるならば、そして春秋夏冬のうつりかはりともろともに、體の模樣が、心の狀態が、おのづと一定の變化をするならば、そもや人々の夏期の心身は、どの樣な有さまだらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

秋風起つて白雲とび、朝夕の風やゝ身にしむ秋の時候が、人の心身に心地よく、謂ゆる燈火親しむべき頃て、讀書思索に適することは、昔から殆んどきまつた相場てある。楓葉のもゆるばかりの紅は、はてはててあるけれども、どこにか沈んだ趣があつて、まこと讀書の好期節てある。露が降りる、霜がふる、やがては積雪山野をおほふ冬となつては、心もからだも愈引しまつて、沈痛の趣が增す。随てます／＼靜思默想の好期となる。と、一陽來復て、霞が立つ、若草がもゆる。春深く、百花亂れ、蛺蝶舞ふ陽氣な時節となつては、心がうきたつ。身體がのびる。謂ゆる面壁九年の達磨大師も尻もだえの氣候となる。これならばまだしも、綠の木陰がなつかしく、雨をおびた冷風が戀しい三伏の夏となつては、からだはだれる。氣はたゆむ。ちやうど冬とはうらはらて、讀書や靜思には最も不適當の時期となる。

死物の機械ても修繕がいる。况んや人間と云ふ精妙な活きた機械に休息の必要はいふまてもない。さすれば平素別して心の勞働のみにつかれてゐる學生などに取つては、件の心身の狀態が最も研究に不適當な夏の時節は、云はゞ天が與へた休息の時期てある。大に遊んて一年中の疲勞を醫すべきときてある。ならうことなら高山の跋踄とか、清濱の游泳とか、此點に最も有効なものを薦めたいのてある。併しながら事情の許さぬのもあらう。體力のたへぬもあらう。また終日身體の鍛錬のみに力を盡すと云ふことも、或は厭がきて出來なからう。かゝるものが若し讀書によつて、その休息を得やうとするならば、いかなる種類の讀ものがこれに適當てあらうか。

前に述べた通り夏はむしろ讀書に適さぬ時期てあるならば、難かしい、讀むに骨の折れるやうなものが、むかないのは勿論てある。さらば、娛樂をかねた小說とか云ふ種のものがと、すゝむる人もあるが、そこに疑問がある。

青春の男女に小說を讀ましむべからずとか、新聞紙を讀ましむ可からずとか、一概に說破する謂ゆる有識者

もあるが、それ等の、反動と云ふ一層大きな弊害に心づかぬ盲目者流は論外として、青年學生に、ことに夏期に、有りふれた戀愛小説などをすゝめることは、如何であらうか。

夏期の心身の狀態は啻にしまりのない、冥想靜思を要する種類の讀書に不適當な許りでない。統計から見ても夏のはじめよりかけて、或は自殺、或は殺人と云ふやうな、主として情の過度の激昂から來る罪惡の最も行はれ易い時節である。酒を過ごした後などの樣に、精神の力が比較的に鈍くつて、欲望情欲なんどを統御する力が薄く、爲めにおもはず平生の節制力を失つて、不測の罪過を犯すことが多いのである。生理上から見ても、性欲の最も旺盛なるは此時期である。心理上から見ても情火の盛なころである。かゝる時期に於て、さらぬだに情熱もゆる青春の男女學生に、淫靡のそしりを免かれぬ昨今流行の小説類、別しては誘惑の力強いきはどい所までを寫實的に描いた小説などを讀ますすることは、たとひ道學先生ならずとも、自稱有識者ならずとも、頗る躊躇すべきことゝ思ふ。

過日もさる講演會の席上で文藝の玩賞と主觀の狀態との關係を論じたとき、余は主として主觀に與ふる影響を數へて、

一、自然（年齡氣候、場所及身體の狀態、等）の影響

二、經驗の影響

として、後者を更に

（甲）個人的境遇の影響

（乙）教育及訓練の影響

（丙）社會的境遇の影響

に彙類して考察した。今當眼の問題には（二）の方は關係が少いが、しかしその（丙）だけは幾らか關係があらう。

と云ふのは、夏期の休息必しも別の避暑地を要する理由もないが、近年の流行で、壯年ざかりの若ものが、やれ日光の箱根のとか、乃至湘南の海濱。總房の海岸と、避暑地を求めて、集り來る。上流良家の子女のみが、かゝる地には亦學生の游泳場がお伴をして存在す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。たとひ避暑地でなくても、東都ならば公園の夕すゞみ。地方ならば盆おどり。自然に若い、熱い血の燃え上つてる男女が、朝夕接近の場合が多い。例の有識者の風紀論や、道學先生の爲めに、金縛りにくゝられて、加之學科の重き負擔に妨げられて、殺風景なる寄宿舍生活に非ずば、下宿樓上の寸燐箱に、小說類をせめての賴りに空想に耽つて居たものが、學科はない、束縛は少ない、時候は情火を煽り立てる、小說類は誘惑する、手引をするとなつては、岌々乎として殆いかなである。まして、避暑とやらんに浮身をやつす上流の人々の中でも、妾は伴をする、妓はつれる、其間は御機嫌を伺ふと云ふ樣なも少くない。朝夕見聞する若い男女の間に、見やう見まねで罪過を犯すものが、決して鮮くはあるまい。

から老成ぶつて考ふれば、まづ一般には夏期の靑年男女學生の讀ものとして、ありふれた小說類は推薦し難い。さらば難かしくなくつて、面白くつて、そして無害有益のものはと云へば、

一には旅行記風土記の、有益でしかも面白いもの。

二には正史、傳記などの興多きもの。况んや志氣を鼓舞するなどの利あるものはなほさら。

三には詩集歌集などの純潔なもの。

這般の讀ものならば、前陳の弊もなく、夏期の休息時の讀書の材としての資格にも適はうかと思はれる。が、これは大まかな無雜な所を述べた迄で、とかくは萬法唯心である。人の心は融通無礙である。非常の厄災も、一きはのを免れしめた神佛の力ぞと、感謝、報恩の念をも起させる。判斷力が備はつて、志操が高潔であつたなら「ナヽ」を讀まうが、「靑春」を愛讀しやうが、慰藉こそあれ、何の害もなからう。或はいやに沈んだ、靑年の元氣もなく、華嚴の瀧、阿蘇の火口に想を馳する輩には、却て應病與藥の好材料となるもあらう。それら特別の場合は姑く措く。

終りに、今日以前、余が夏の休息期に、好んで讀んだ書を二っ三っ列記しやう。

莊子、列子、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

バイロンの詩集
モムゼンの羅馬史
蕃地の旅行記

など。自ら定めた讀書の規則に曰く、氣が向いたら讀む。いやになつたら休めてゐる。唯これのみ。)利害も言ふまい。理由も述べまい。唯好んで讀んだ丈けは確である。今後は如何に變らうか。けふこの頃の天氣同樣、自分でもわからぬ。

次號の本欄には、佐々醒雪氏は言ふまでも非ず、金子筑水氏、吳秀三氏、角田浩々氏、釋宗活氏、千葉鑛藏氏、覆面冠者等、その他諸大家の名篇燦として光彩を紙上に爭ふべし。

本號の公論欄には田中穗積氏の論文、掲げらるべき筈のところ氏の多忙なりしため次號に廻すことゝせり、その他例により中村進午氏外數名家に寄稿を依賴しあり、男女學生交際論には佛人、博士リギヨール氏の高見を掲ぐべし。



馬政の要訣

『東京朝日新聞』

我國馬匹改良の端緒は古し。幕府時代に於て既に之を見、維新前早くも數多歐洲馬匹の輸入を告げ、日清戰役後に及びては其聲漸く大にして施設も亦見るべきもの尠からざるに至りしが、今度の日露戰役を經て遂に大仕掛の馬政の必要を感じ、茲に馬政局開設の都合とはなれり。大仕掛の馬政の必要、吾人に於て異論ある可き筈もなく、馬政局の開設亦同樣異論はなし。但その官制に關して聊か當局と所見を異にしたるが、樞密院の修正により、異論の分量を減じたり。今や長官の任命もあり、いよ／＼馬政實行の時代となりしに就ては、更に馬政そのものに就て豫め所見を陳述し置かざる可からず。

さて是までの馬匹改良の實跡如何と尋ぬるに、幾分の効果は業に既に

之あり。決して無用に歸したるにはあらねど、其功未だ十分ならず、遂に今度の大仕掛を要するに至りし原因は、吾人の所見を以てすれば、其用意の足らざる所ありて、單に馬匹改良の方法を馬種選擇にのみ求めたるに在り。委しく言へば、唯良種の輸入にのみ熱中して、一層大切なる飼養及管理改良のことを忘却したるに在り。我國の農學者はいづれも飼養及管理の大切なるを知れりといへども、完全に其改良を實行するもの極めて尠し。斯の如くにして我國馬匹の改良は中途半端たるを免れず。蓋し英國純血種の馬匹は、骨格及血液の優良なる點に於て世界に冠絶し、各國皆之を標準として其馬匹を改良しつゝあり。然るに各國の馬匹は皆夫れ〳〵特種の長所を具へ、多少の出色を得たるには至りしかど、遂に英國の純血種に及ぶには至らず。是實に飼養及管理の方法其宜しきに叶ひ、多大の年月を積みて人造的に良馬を仕上ぐるの術、英國に及ばざる所あればなり。罪は馬種にあらず、飼養及管理の人事未だ盡さゞる所あるに在り。以て飼養及管理改良が馬政の第一義たるを知るべし。見よ英國種とても決して初めより完全なりしにはあらず。千七百年代に於ては、其純血種は平均四尺九寸内外の體尺なりしといふ。然るに現在平均は五尺四寸强なり。二百年間に五寸の强を見るに至りしは、馬種の効能にあらずして、而して飼養及管理の良好の効能なり。彼の小馬なる一種の如きは、體軀の矮小を以て尊ばれ、四尺六寸强を其標準體尺の最大限度とするに拘らず、較もすれば過大の生育を告げ、體軀の矮小を持續せしむること頗る困難なるに至れりといふ。英國の飼養及管理は、過ぐる有るも及ばざる無し。亦以て人力の効果の盛なるを證す可し。我國の馬匹改良を策する人人が、我馬體の最大缺點たる矮小を變じて長大に走らしむるを主眼とするは固より佳なり。而も其方法として單に體尺の長大なる良馬種を輸入するのみなるは、誤れりと謂はざるを得ず。英國の純血種の優良なるは、本來天爲に非ずして人爲なり。我國東北の馬匹が近來幾分か其優良を加へたるは良種輸入混血の作用にも因る可きが、其最大原因は實に藩政時代の放牧法を改めて舍飼となし、且つ尠少ながら管理に注意するに至りしに依る。要訣は前者に在らずして、後者に在り。歐米各國の馬政も、亦前者を重んずるよりも、後者を貴しとす。我國も亦斯の如くにして進まざるべからず。

管理改良の事は必らずしも困難ならず更に飼養の方法をして十分ならしむるには、飼料の産出に大に意を致すの要あり。飼料の二大要素たるは濃厚飼料及粗大飼料なるが、從來我國にて濃厚飼料として用ひ來れる大麥及小麥麩の如き之を燕麥に比すれば則ち價値に乏しきや勿論なり。然るに我國に於ては地價、氣候及び風土等の關係上、北海道及東北地方の一部を除きては亦他に之れを耕作する能はざるの障害あり。粗大飼料の改良も亦厄介なるものなり。從來我國にて之に供するものは、山野自生の雜草にして、品質の劣惡なるが上誅求に誅求を重ね、今や漸く其餘孽を保つに過ぎず。此故に一部人士の間には牧草養成の必要を唱ふるものあれど、官民ともに種馬の輸入のみに心を奪はれ、之に對して手を染むるに暇なき有樣なり。且つ牧草も北海道及東北地方を除けば、全國を

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

通じて之を栽培せんが爲に貴重の田畑を塞ぐに由なく、さりとて傾斜の度多き山地にては之を耕作する能はざるなり。之を如何にして可ならん乎。馬政は此問題解決よりして始まらざる可からず。聞く所に據れば馬政局の意見は歐米風の牧草に依賴せず、我國の野草を利用する方針なりと云ふ。蓋し官有原野等を目的物の生產地とする次第ならんが、さりとては心細き限りならずや。粗惡なる野草に賴りて馬匹改良の目的を遂せんとするが如くんば、其結果は知るべきのみ。而して我馬政局は其設立の當初より早くも只多數種馬の輸入に汲々たらんとするが如し。轉倒も亦甚し。先づ其飼料に就て充分調査研究せよ。若し其調査の結果、我內地にては到底優良なる飼料を得るに由なく、而も韓國或滿洲に之を有すとせんか。場合によりては滿韓方面を經營地と爲しても可ならん歟。眼前直に其結果を見るに由なき遠大の事業のことなれば、最も愼重に愼重を加へて、中途方針變易の勞を省くを要す。

將來の宗教如何、

谷本富

『宗教界拔萃』

余輩竊に惑ずる所あつて、近頃頻に宗教々育の忽諸に附すべからざるを說くや、聽衆往々余輩の所謂宗教は果して何宗何教を指すぞ、佛教か、基督教か、孰れにしても明言せられんことを希望す と云へり、而かも余輩は毎に之れに答へて、未だ自ら一宗一派を取つて標榜せず、只單に宗教と謂ふ、固より偏頗なし、強いて余輩の持說を質さんとならば、余輩は敢て言ふべし、余輩の好まざる所は、左の五風格を有する者なり、曰はく悲觀的、曰はく遁情的、曰はく禁慾的、曰はく孤立的、曰はく出世間的是れなり、特に又余輩の好む所はと云はゞ、同じく左の五風格を有する者なり、曰はく樂觀的、曰はく有趣的、曰はく奮闘的、曰はく社會的曰はく世間的是れなりと云へり。

座に在る人々、之れを聞いて、一は得色あり、他は氣色を損ずるもののごとし、得色あるものは基督教徒にして、損色ある者は佛教徒なり、而かも余輩素より毫も之れを以つて一方を揚げ、一方を抑へんとするにはあらず、蓋だし之れを歷史に徵するに、基督教の教風も亦古今時代に由つて變遷あり、其の初期にありては、概れ厭世的たり、禁慾的たり、乃至個人的たり、出世間的たりしがごとし、歐州中世紀に於ける僧侶生活のごときは特に然りと謂つべし、其の樂觀的となり社會的となり、世間的と成りたるは、寧ろ漸次に馴致せし所の風格なるに過ぎず、佛教とても亦今日世人の普說するが如くに、小乘大乘の別るゝ所あつて、小乘は言ふ迄もなく厭離穢土ながら大乘の方は寧ろ欣求淨土にして、而して看方に由つては娑婆卽淨土の理なりとせば、佛教必ずしも厭世的なり、個人的なり、出世間的なりとも限らず、乃ち余輩の好惡する所を以てしては、必ずしも佛、耶兩教の勝劣を沙汰せんとするにはあらず、唯だ一言以て之れを掩はゞ、佛、耶孰れにしても、古代的なるは大抵悲觀的な

り。乃至出世間的なれば、余輩之れを好まず、又其の近世的なるは固より樂觀的なり。乃至世間的なれば、余輩之を好むと云はんのみ。

勿論忌憚なく言へば、今日の儘にては佛敎は概して近世的なる事に於て基督教に及ばざるや尙遠し、例之日露戰爭中にても、開教活動の方途、形式自ら逕庭ありしが如し、否、今日佛教中に於て偶々近世的設備を見るに至りたるは、實は主として基督敎の刺戟を被りて覺醒し、急に其の爲す所を摸倣せんとするに外ならずと謂ふも、必ずしも過言を告められざるべし、而かも佛敎固より近世的たるに適せずとは云はず、されば余輩の切望する所は、佛敎亦將來の宗敎として汎く認知せられ尊崇せられんことを欲せば、先づ其の舊習を一洗し、故態を一變して斷然近世的宗敎の風格を備へんことを力めざるべからず、世捨て人を以て自ら許し、山林桑下の客と號し、方外の民と稱して、私に得々たる如きは決して將來の宗敎家たる者の爲すべき所にあらざるなり、基督教既に新基督教たり佛教亦理當さに新佛教たるべしとす。

尙ほ更に蛇足を添ふれば、古代的の事物は動もすれば貴族的臭味を帶ぶること多し、是くの如きは到底將來の時勢に適せざるや毫も疑なし、封建的たり、排他的たる如き皆之れに屬す、共に可ならず、將來の時勢は平民的にあらざれば活動し難からん、即ち近世的にして而して平民的なる之れを將來宗敎風格の趨勢と看做すべきか。

伏して望むらくは、此の文を讀む人須らく三思して舊夢に眩惑し又一時の榮利を事とすることなく、必ずや濶眼を開いて遠謀深慮せざるべからず、堂塔伽藍の修繕固より決して佛教家唯一の能事にあらざるべしと信ず、將來の宗敎を言ふ者先づ一番工夫するを要す。

社會問題國民問題及び人口問題

稻田周之助

『日本人拔萃』

財産共有、若くは共同生活の事の如きは吾輩より之を見れば、詩人的奇想の過ぎずして、之を實行するの方法もなく、たとひ之ありとするも此實行を要求するものなかるべければ、吾輩は今更ら其是非を論ずるの必要を認めざるなり。只々何れの國にても、人口は益々增加し、天產物は其割合には增加せず、從て社會の一部に、居るに家なく、喰ふに食なく、果ては働かんにも職業なきものを出し爲政者も、志士仁人も、此一部不幸人民を救濟するか爲めに勛勞する所多し。是れ即ち今日の社會改良政策の發端にして、吾輩は乃ち社會問題の根源は人口問題にありと云はんと欲するものなり。

而して此人口問題なるものは、一方に社會問題を醸成せるのみならず、他の一方には國民問題を生起しつゝあり。乃ち自國人口の增殖力の大なるを覺るや、此に他國を分割し、又は併吞して、以て其過剩人口を

蕃殖せさるべからずと爲し、遠慮會釋なく侵略政策を談し、平生文明人道を說くものまでか、話頭過剩人口問題に至れは、忽ち鐵火手段を云ふに至るも亦奇ならずや。往昔カールマルクスは、人世の將來は國民と國民との爭にあらずして、國民の或階級と或階級との爭となるへしと云へたるは知言と稱せらるる所なれども、彼が階級間の爭と同一根源に由りて、國民間の爭を現出すへきことに心附かざりしは迂と謂ふべし。然りと雖も吾輩は人類自然の狀態と經濟上の理數とに依りて此人口問題を解釋し、併せて社會問題の根原に手を觸るゝことの甚た難からさるを信ずるものなり。

從來世界人類は、非常の速力を以て增殖し來り、今日も增殖しつゝあるには相違なしと雖も、吾輩の信用する所の統計學者は、其增殖力が漸次に遞減しつゝあることを證明せり乃ち千八百八十八年乃至九十一年に於ける一ヶ年間千人に對する增殖人口の比例は獨逸四〇、三七英國及び威爾斯三四、六五佛國二五、〇六なりしが千九百一年乃至千九百四年の平均數に依れは獨逸三五、三四英威二八、四一佛國二一、六三にして增殖力最も强しと稱せらるる獨逸すら其力一割二分五厘を減じたり且社會學者其の他の言に依れば新たなる民族は增殖力强きも多く年歲を重ぬるに從て其力減耗するものゝ如くなれば若し人口增殖其ものが人類に危害ありとせば其危害は遠く原始時代に於て起らざる可らず然るに實際は然らずして却て十八九世紀に及て突如として歐羅巴に於て起りたるを見るも是れ正しく此時代に於ける物質的變遷の狀態が社會の一部に此不幸なる犧牲を作り出したるものなるべく人口過剩は此數世紀間に於て天下の不離問題たるべしと雖も將來は却て人口增殖力を失へるが爲めに勵勞するに至るとはなきか、現在に於ても佛國は既に人口の增殖せざるか爲め多大の苦痛を感じつゝあり、後日世界を擧げて人口減少を憂ふるならば、佛國民は乃ち其憂を先きにするものたらざるべからず。

又國家若くは國民の經濟上より之を云はゞ、人口は即ち富の主要素にして、最大生產者たるを疑はず、佛國民の一年間の收入は百二十億、其內八十億は勞力に對する報酬なり。又英國政府の調査に依れは、千八百九十二年度に於ける國民の所得高六億七千八百萬磅にして、千九百三年度には八億七千九百萬磅に增加したれども、此は財產より生ずる收入の增加せるにはあらずして、全く職業（ビジネス）若くは職務（プロフェッション）の增加に依れり、乃ち人に屬する收入のみにて一億二千萬磅を增力したる計算なり。且伊太の出稼人が世界各國に出てゝ收得する所の勞銀の夥しき巨額に上ると、支那勞働者の本國に送附する正貨は彼の貿易の逆勢を調和するに與りて力あること等は何人も善く知る所にして、人口の增加は即ち富の增加なるを明白なる以上は、其の增殖力の强からざるは是れ憂ふべきにあらずや。

乃ち吾輩の見る所を以てすれば、人口の過剩を憂ふるより生し來れる社會問題も將た又國民問題も皆虛僞なりたとひ全然虛僞ならざるまでも是れ只最近數世紀に於ける物質的變遷の上に寄托せる虛影なり、歐羅巴諸國は今日こそ過剩人口の始末に腐心するなれ、他日必ず人口を增殖せ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ざるを憂ふることあるべく、之に引續て、如何にすれば人口を增殖せしめ得るかといふことに勦劳する時代に到達するを疑はざるなり。

獨逸の爲政者は、其國民年々七十萬人宛增加するを見て之を處理するが爲めに世界政策を立てゝ、多くの犧牲を供して阿弗利加亞細亞諸方面に領土を擴張したれども、本國の人口は增加すればするほど外國には出て行かざるのみか、伊太利人其他附近國民は續々獨逸國內に入り込み來りて、其稠密を增しつゝありて、彼の世界政策は今や殆ど無意味に歸したり。露國政治家亦其人口年々一億二千萬人宛增加するに驚いて、東方經略を始めたれども、一敗地に塗れて以て今日の急を招けり、虛僞に基ける政策の失敗に終ると概れ此の如し。

社會問題の根源たる人口問題の眞相にして既に此の如くなるに過ぎずとせば、其の最後の解釋を下たすは決して難からず、吾輩今强て解釋を急かずとも昨日を經經遞を重ぬるの間には自ら事實的に解釋し去るの時至るべきなり。

趣味

『趣味撥萃』　　坪内逍遙

カーライルの語に「眞正にして高大なるものを感知するをテーストといふ。その何處にて、如何なる形にて現るゝも問ふ所にあらず、苟も美なるもの、秩序あるもの、善なるものを感知し愛好する心の作用をテーストといふ」とある。このテーストといふ言葉を趣味とも譯し嗜好又は風尚とも譯し鑑賞力又は賞翫性とも譯するのです。凡そ人が物のよしあしを判斷するのは主に理智の作用のやうに見えるが、其の實は此ノ趣味性がさせるのである。此の性に原かぬ批判は冷かで、形式的て、感化活動の力に乏しい。道德上、文藝上の事も煎じつめた末は皆此の性に歸する。それゆゑ趣味といふことは等閑にはなりませぬ。

順序をいへば時勢が一代の風尚を定めるのではあるが、其風尚が原因となつて後の時代精神を涵養するともあるから國民全體の趣味の善惡は風俗の本源です。彼の文華を貴んじて移風易俗の要具とするのも、それらが趣味性涵養の最大機關であるからて國民が善惡美醜の評價力即ち理想建設の地盤は一へに此の趣味性の高下によつて定まる。神代や奈良朝の事は姑く措き、平安朝から鎌倉、東山、桃山、元祿、享保、文化、文政と變遷して來た我が國過去の趣味性を見れば國家隆替の因果までがそのうちに見えるやうてある。希臘、羅馬の古きより、近くは伊太利、西班牙支那、土耳古の趣味性を檢するもまた同じやうな感が起る。烱眼の人々なら過去ばかりでなく現代の越味風尚の趣く所を見て前途將來の利害までも見透し得る筈と思ひます。

舌に上戸口、下戸口の別がある通りに趣味にも雅俗の別があり、濃淡の別がある。澁ずきあり、華美ずきあり、江戸前あり、上方好みあり、日本流、ハイカラ式、近松張、芭蕉じたて、黄表紙、讀本、能、歌舞伎

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

西洋にも伊太利、獨逸、英國、佛蘭西と國々にて別があり、そのまた間をゆくのもあつて到底一定はしがたいもの丶、尙ほ大まかに別けて見れば大小、强弱、深淺、單複、濃淡の別はあつて、我が國の如きは其の大と强と深と複と濃とに關する限りは今までのところ西洋趣味に及ばぬ。これには人種性や氣候や風土や飮食物等に原く生理上の原因もあらうし、政治、宗教、道德、風俗の感化に原因する點も隨分ありませう。その反對に日本の所謂雅致、風流、淸淡、瀟洒などいふ味ひは多分西洋の趣味史にはあるまい。つまり我れに一長、彼れに一短で互ひに融通すべきことが多いと思ひます。

要するに趣味は廣く善惡美醜を甄別し評價する根抵となるものゆゑ、今日の如き大變遷期に於ては最もその涵養に心を注がればならぬ。政治上、社會上の改革即ち物質的の維新は一通り濟んで今は精神上の維新に向ひ、宗教、道德、文學、藝術引括めていへば風俗上の大動搖が始まつたのであるから、こゝ一段の注意が大切です。保守を本性とする婦人の風俗がおひ／＼新時代式に化してゆくと同じ度合に國民全體の趣味性が新氣運の影響を蒙りつゝあるので、江戸趣味は假令滅びてしまはないまでも今や將に後の方へ退却すべき運命となつて來たのである。元祿趣味が呼戻され、桃山趣味が迎へられるのは、例へば開國に先だつて昔ながらの王政復古が唱へられたやうなもの、まことの趣味界の國體は歐化主義で定まるのでもなく國粹保存一點ばりで定まるのでもあるまい。隨つて最も眞正にして高大なる趣味を感知する力を導き養ふことが此の際尤も大切である。

我邦學術の進歩に就きて

『教育學術界拔萃』

嘉納治五郎

我國の文明を進め、富强を圖り、世界第一流の國家たるの地位を確實に保たんと欲せば、學術の程度に於ては世界第一流の國にも劣らざる狀なかるべからず、果して然らば如何にして可なるか、先づ第一に普通教育を盛にせしめざるべからず。第二は其各個人に適する學術を專攻せしめて以て、向ふ處の方向を誤らざらしめん事に留意せざるべからず。第三は必要以上の學者を作らざるべからず。

國家は學術を進歩せしめんとせば、充分なる費用を支出せざるべからず、學者の養成研究の方便たる百般の設備の如きには、充分なる支出を爲さゞるべからざるなり。又學術研究の興味を起さしむる爲には、種々の手段を盡くし、研究を奬勵する方法を講ぜざるべからず。研究を奬勵する方法としては、有益なる著書の出版も必要なり、教育上の効績に對しては、國家も社會も擧つて方法を盡して、之を表彰し、それ等の人を勵ますことを務めざるべからず。

想ふにこれ等の諸項に留意して眞面目に學術の進歩を促さんとするときは、學術上歐米先進國を凌駕するに至るも、敢て難きにあらざるべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

眞宗信徒生命保險株式會社

◉當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
◉當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
◉利益配當附保險の契約を爲す者は最も公平の方法に依り計算したる利益金を得べし
◉掛金割增（年增契約）の代りに保險金控除（或ル年限内ニ死亡セバ）の新法あり
◉當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
◉當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
◉當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角（電話七貳貳番）京都本店
東京市京橋區南傳馬町三丁目、壹（電話本局五壹八番）東京支店
大阪市東區大川町御靈筋角（電話東壹貳五參番）大阪出張所
廣島市紙屋町 廣島出張所

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

精神界の新著

人格の力

文學士 紀平正美先生著（新版發賣）

變轉矛盾極まりなきの世に處して、よく偉大なる力を永遠に保ち得べきものは、たゞ崇高なる人格あらむのみ。毀譽襃貶に苦惱し、功名富貴に煩悶し、甚たしきに至りては、青年有爲の身を失望落膽の悲境に沈むるが如きは、人格の根本的修養を忘りたる罪に外ならず。人生の價値を明かにし、健全なる生活を營まんとするものは、先づ確乎たる人格の陶冶に努めざるべからず。本書は紀平文學士が古來哲學者の道破せる眞理と源言なる佛教の論旨とに本づきて日常卑近なる修養の方法を明かにせられたるもの、その懇篤にして用意の周密なる一讀して自己の要訣を悟了し得べきなり。特に人格の陶冶を以て究竟の目的とする教育者に取りては必讀の好著たるを失はず。

洋裝全一册
定價金四十錢
郵稅 金六錢

人生とは何ぞや

文學士 黑金泰信先生著（新版發賣）

われ等は何がために生れ、何を目的として孜々營々たらざるべからざるか。如何なる理想に導かれて、生存の意義を完ふすべきか。これ萬人の知悉すべき最主最要の問題にして、而かも未だ明瞭なる解決の與へられたるを聞かず。或ものは本能の滿足を唱へ、或るものは果敢なき快樂に醉はむとし、また或るものは悲觀厭世に沈みて悶々の情に堪へざらむとす。人生の意義果して如何、惱めるものに慰安の福音を傳へ、動けるものに希望の曙光を閃かし、以て永遠不滅の生命を享樂せしめんとするこれ實に本書が淳々敎へて導かんとする所なり。人生に疑ひを抱けるもの、悲しめるもの、樂しめるもの、苦しめるもの、安んぜざるもの、一たび本書を繙かば、釋然として大に悟るところあるべく、高上なる理想を覓めて、人生の意義を明かにし得べきなり。光榮ある生活をなさんとするものは、乞ふ速かに、この書を熟讀玩味せらるべし。

洋裝 全一册
定價金五十錢
郵稅 金六錢

發兌 東京市神田表神保町 同文館
大賣捌 大阪備後町 寶文館　東京早稲田 同文館支店　東京神田 東京堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御注文の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

文學博士村上專精新著

自省録

訂正再版

和装全一冊◎定價四拾錢◎郵税四錢

吾人は身體の方に於て毎朝洗面するの必要あると共に精神の方に於ても毎日洗心するの必要あり吾人の精神にありては時々刻々間斷なく種々様々の汚物を生して止まざることとは身體に生ずる塵垢よりも尚多く又其汚物が其人を毒害することの劇甚なるとそれを洗除することの困難なるは到抵身體の塵垢と同日の論に非ず

著者は處世上洗面の規則的習慣よりも寧ろ洗心の規則的習慣の方法が却て必要なるを唱へ毎朝の洗面法に鑑みて自省録を規定せらる

今や戰後經營の大根本たる鞏固なる國民の精神を造るの緊急なる時に際して本書出づ宣哉忽ち初版數千部を賣盡して玆に訂正再版を發行するに至れることと我國民たるもの特に青年諸子は必ず速に本書を讀み且つ行はさるべからず

發行所 大日本圖書株式會社

東京市銀座壹丁目◎大阪市北久太郎町

土井晩翠著 中村不折書

東海游子吟

發行所 東京銀座壹丁目廿二 大阪北久太郎町四丁目 大日本圖書株式會社

全一冊 定價金壹圓 郵税八錢

晩翠子曩に歐洲に游ぶや興に觸れ詩を賦し奚嚢爲に重し歸來其英を摘み粹を抽ける者即本集也不折子亦親く其覩る所を書く詩の適麗書の奇峭盖近時の偉觀也敢て江湖の清鑑を仰ぐ

◎表紙金色浮模様◎挿畫新式ホトグラビヤ版及上等石版（着色拾數度）刷八枚◎用紙上質印刷鮮明

此廣告により御申込の力は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新小説

第拾壹年第七卷●七月壹日發行

●本欄●

老骨……德田秋聲

葛の下風……佐藤露葉

零れ松葉……泉斜汀

脚本 盆踊都風流……高安月郊

●思潮●

夏季の休暇と自然文學……畔柳芥舟

ヘンリック、イブセン……かくれん坊

穴居の民……上田敏

●雜錄●

かな自在……泉鏡花

婦人の帽子……久保田米僊

多田院開帳……高野班山

歐米見物途中記……松居松葉

松屋耳鳥齋……林田春潮

●歐洲文藝見聞談●

獨逸現代の音學家……島村抱月

●時文●

青年と俗世間……後藤宙外

●家庭●

夏季の衛生上の注意……石原醫學士

此邊の家庭……大塚楠緒子

●譚叢●

「しぶい」と「からい」……須藤南翠

澁味と「さび」……伊東専三

「いき」な話……大槻如電

●藝苑●

歌舞伎座の勸進帳……若葉會員

本郷座のやどり木……山岸荷葉

●社會●

府下の別天地 海島通信……太田宙花

岐阜の提灯と團扇……鶩群堂主人

今日の投機界……高崎春潮

●懸賞葉書文及吟咏披露

●時報●

●新刊紹介●

●繪畫●

飛だり跳ねたり（表紙）……河村清雄

老骨（口繪）……渡部審也

一情一景（口繪）……右田年英

繪はかき（二葉）……鰭崎英朋

●寫眞版數葉●

實價

壹冊貳拾五錢郵稅貳錢五厘●六冊前金郵稅共壹圓五拾九錢●十二冊前金郵稅共參圓拾貳錢●郵券代用壹割增

發兌元 東京日本橋通 春陽堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



大魚に呑まれし人

伊藤銀月

其一

自分は今、但馬の海の荒磯に立つて居る日は暮れた、けれども星が見えない、あまりに夕霧の深い爲だ。長い夏の間に、どうかするとたまにはこんな事がある、朝から烈しく照り附けられて、海の水が頻りに蒸發する、それをば、何所かの隅へ貯へて雲の原料にすべく、ソヨ〳〵した風が來て斷えず運んで行く、けれども、どうかした都合で、夕方――人間が飯を食ふ時分から、暫く其風が來なくなることがある、すると覿面、それ見給へ。

濛々たる底に、湖と間違へられないやう、申譯ばかりの波を動かして居る、唯だこれだけに過ぎぬが、此時の海程、妙に人に氣を持たせるものはない、念入れて深く〳〵吸ひ込んだ晝の光をば、今になつて

から、ソロ〳〵と少しづゝ吐き出してゐるのだ。

若し、身長十六丈の大佛を此中へ突き落したら、音もせず、瀲も立てず、コロ〳〵と絹蒲團の上を轉がるやうに二三遍やつて、やがてポンヤリ且つノッソリした鯨に化するだらう。

けれども、それも亦暫しの間で、海は何時迄も人間の瞑想のおつきあひをしてゐない、自分の立つてゐる巖がムーンと底唸りしたかと思ふと、だしぬけに打附けるは氣紛れな一波、例に依つて唯だ白い、途端に、目に見えぬ大きく冷たい手で背を押されるやうに感じた。あたりを見廻はせば、何時しか霧は薄らいて、ふやけたやうな金星が、自分の鼻先にブラ下がつて居る。

「石狩の渡し場の、茶屋の二階で今朝見た女、花ならば、國の土産に一枝を」

遠く唄ふ聲が、銀の針のやうに身を刺して來る。

其二

自分は巖を降りた。

波打際の濡れて固まつた砂の上を、あてどもなく歩き始めた。

一町餘り向ふに、凉しげな篝火が見える

夏の夜の趣味は風だ、水だ、月だ、それよりも火だ

風は陸から海へ吐かれるのに、どうしたわけか、岸打つ波の手が、次第に陸へ延びて來る、風に打たれ、波に吹かれて、忽ち小さく、忽ち大きく、忽ち高く、忽ち低き、火の跪きに連れ、半分砂の上に引

き揚げた舟と、五六人の裸男とは、妖魔の如く明滅するのだ。

何かは知らず、そこに面白い事があるやうに思はれたので、足を早めて行つて見る氣になつた。

崩れる波に映つて、黒い物が二つある。岩だらうと思つて、何氣無く其傍を通ると、今迄圓かつたのに、急に角が出來て高くなつた、一つは自分の右を、一つは自分の左をチヤブ〳〵と波に觸れて、驅けたか轉がつたか、兎に角、自分と磨れちがつて後の方へ動き去つた。

パチ〳〵と手を拍つ。

『ヨウ〳〵』と作り聲で呼ぶ。

『ハヽヽ』と聲を合せて笑ふ。

眞黒な岩が、二つとも濱の女であつたかと、肝を潰す、自分が傍を通つた時には、何かを拾つて居るのであつたらう、それでも、男と見てからかふ氣がしほらしいぢやないか。

自分は一寸止停まつて見向いたが、詰らないから再た歩みを進めた。

行つて見ると、生魚の臭ひが鼻を衝くやうて、丁度角力の土俵程の廣さの間を、圓く濡らした砂の上に、大小の鱗片が花を散らして居る、篝火は、モツト海に近く在つたのを、波の手が延びて來たので移したものと見え、引ずつた痕が黒く筆太の一文字を書き、小高い所に斷え〳〵の焔を殘して居る。

其外、人も居なければ魚も見えない、松原の方に罵り騷ぐ聲のするは、今の裸男共が歸つて行くの

だらう。

棄てられた篝火。

自分は危いと思つて、砂を掬つて、バラ〳〵と振り掛けた。

見る〳〵焔は縮んで、白くなり、青くなり、紫になり、水銀のやうに軟かくなつて、トロ〳〵と鎔けて流れさうになつた。

自分は急に悲しくなつて來て、落ち散る燃えさしを拾ひ集め、慌てゝそれを折りくべた。

再び焔は寶珠形に活きて立つた。

あたりを見れば砂と水ばかり、成程これでは危くない、棄てゝ行つてもいゝわけだ。

『誰だえ、火をいぢつてるのは』

太く底力のある聲が、虚空から落ちて來たやうに思はれたので、仰向き加減に其方へ目を走らせると、確かに六尺餘りある大男が、ノッサ〳〵と大股に歩み寄るのだ。

『我家のを見なかつたかえ』

答へが無いのを不審に思つたか、少し屈んで、自分の顏を隙かし見た。

『イヤ、失敬』と、ガラに無くハイカラに云つて、彈かれたやうに身を反らし、クルリと後向きになつて、篝火を背に海へ向いた。

自分も思はず、篝火の前から二足ばかりあとじさりした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其額！

・一目見ただけて、何人も忘れることが出來ない、人間にこんな恐ろしい顏があらうか、人間にこんな厭らしい顏があらうか。

篝火に映る大男の後姿を鳶色に浮かして、海を壓する星空の深さ。

其三

宿へ歸つて、亭主に聞くと、彼は此浦の名物男で、海坊主の宇太郎と云へば、十里四方で知らない者が無いとの事だ。

彼の恐ろしく厭らしい容貌は、天が授け親が傳へたものでない、今から五十年ばかり前、五人の仲間と一緒に、遙かの沖へ漁に出たが、それぎり一人も歸つて來ない、時化を食つて、舟が引ッくりかへつて、殘らず死んだものと諦めて居ると、二ケ月あまり經つて、件の姿の怪しい男が、小舟に乘つて此浦へ迷ひ込んだ、何所の世界の何と云ふ國の者だと聞くと、何所の世界でも何と云ふ國でもない、おれは宇太郎だと云ふ、成程宇太郎の聲だ、何だつてそんな海坊主見たいな姿になつたかと聞くと、沖で恐ろしく大きな魚に逢ひ、舟は尻尾で滅茶々々にたゝき毀され、四人の者も舟と一緒に粉微塵となり、自分一人だけは丸呑にされたが、舊は武士の血統で、親讓りの短刀を肌身離さず持つてゐたから、それで魚の腹を割き、やう〳〵に脱け出し、其儘氣絶して波に漂はされてゐると、丹後の國の人に救はれ、暫く保養してから、魚の腹の中で半分融けかゝつた此通りの姿で、我が故鄕へ歸つて來たのだと云ふ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何だか、怪しい話だけれども、本人が眞面目で云ふし、姿の變り果てたのも不思議な上、第一、以前から強力で亂暴であつた男が、それ以來、一層強く暴くなり、嘘だなんて云ふ者は、直ぐ張りこくるのだから、誰も爭はずに、彼の話を聞くやうになつた。

今から五十年も前の事て、それが宇太郎の二十前後の頃だから、モウ七十ぐらゐになるだらう、けれども、年齡を聞くと憤る、あの通りの姿だから、何年經つても同じて、若いか年を取つてゐるか、薩張り分らない、當時の人間はだん〳〵死んで行き、昔を知つてゐる者が少なくなつたので、宇太郎の身上話は、一年毎に大きくなつて來る、數年前迄は三間許りの長さてあつた魚が、今では、十間餘りに延びた、此上十年も生きたら、恐らくは三十間ばかりにもなるだらう。

以上は、宿の亭主の語る所だ、要領を得ない乍らも、海坊主の宇太郎が外形内容共に餘程の變り物たる所以は窺はれるぢやないか。

あの姿を、海坊主とは能く綽號した。

其　四

海坊主の宇太郎が家と海との間には、家の二十倍ぐらゐの大岩がある。

海坊主の宇太郎が家と村との間には、揃つて幹を反らした松林がある。

宇太郎は、毎日此岩の根を廻つて漁に出、五日に一度ぐらゐは此岩の上に登つて海を眺め、十日に一度ぐらゐは、此松林を通つて村へ行くのだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

斯く突き止めた自分は、話を聞いた翌くる日、海坊主訪問と出掛けた。村の酒屋の切手を土産に持ち、松林を突抜ける砂路に、晝顔の葩の露まだ乾き切らぬ朝の中。大きな岩に小ない岩が食ッ附いたやうな、低いけれども固い家だ。茅葺、これも氣に入つた、柱の太いの。これが何より第一氣に入つた、覗いて見ると、何の飾りも無いけれど、漁夫の家としは、案外と思ふ程奇麗に片附いて居る、戸棚、板の間、飯櫃の箍、鏡のやうに光り輝いて居る。

其五

『御免下さい』、尋常に出た。

『誰だえ、入るがいゝや』。まがひも無く昨夜の聲だ。

『御話を聞きたいと思つて來ましたが、願はれませうか』

『アヽ、昨夜火をいぢつてた人か、見たことのない顔だから、大方、俺の話が聞きたくつて、此村に來たんだらうと思つた、サア、遠慮せずと御上りなさい』

何たる大抱負だらう、見たことのない顔で此村へ來る者は、みんな自分の話を聞きたい爲だと極めて居る、一面から見ると、此海坊主が、如何に、自分の冒險談に驚嘆するの新しい顔を得べく熱望して居るかを、窺ひ知られるのだ。

板の間へ薄縁を敷いて、大胡坐を掻いてゐた坊主は。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『サア、此方へ』と立ち上つた。

縁無しの粗い疉だが。新らしくて氣持のいゝのを、キチンと四枚半箝め込んだ小座敷、形ばかりの竹の濡椽には、そこらから引ッこ拔いて來たらしい松の苗木を五六本、擂鉢へ植え込んだやつを置き、幅二尺ばかりの空地は、何やら知らぬ野生の草花と、奇麗な貝殼とに充たされて居る、其外は例の大岩で、唯だ一面に薄黑いばかり、何所かに隙間があると覺えて、日光は瀑布のやうに滑り落ちるが、家の中からは、岩と天との境界を見られない。

ムズと胡坐を搔いて、自分へも胡坐をすゝめる海坊主、今日はツク〲と其風采に接した。頭に一本の毛も留めぬのが、必ずしも不思議ぢやない、けれども、それが尋常の禿げ方とちがふからいやだ、銅の球を烈火に投じて、半分鎔かしたと云ふ見立てはどうだ、顏も論無く、其鎔けたやつが下へ流れかけたとしか見られぬ相格で、固より眉も鬚も痕さへ無く、眶は目に垂れ、鼻は脣に垂れ、耳は磨り耗らしたやうに、又、一旦開いた花の凋れて縮んだやうになり、行丈短い廣袖の單物から食み出す手脚にも、山あり谷ある、名所舊跡が一抔に充ち滿ちて居る。

これて若し、柔かく紫を包んだ色なら、蛇に呑まれたも、魚に呑まれたも、あつたもんぢやない、人は之を或る血統と見做して、唯だ其因果を愍むのみに止まるだらう。

扨て、世の中には、時々理屈の中に搗きまぜられない妙な厄介物が出るよ、詰まり、理屈の方がまだ其所迄に煉れてゐないのだね。

それてゐて、宇太郎字は海坊主の體軀はまことに堅固だ、頭ても、頬ても、乃至腹ても、脊ても、たたいて見たらコンとかカンとか音を吹きさうに締まつて居る、十七だか七十だか更に見當が附かず、力は今も、三人の壯佼を向ふへ廻はして捧押をするに足り、風邪藥一服買つたことがない。

學者先生は乙う濟まして、一種の病的作用だと仰しやる、御醫者樣は口惜がつて、堅硬性の癩病だらう。

何だか分らぬが何でもいゝ、ただ恐ろしく厭らしいだけの疵だが、色氣抜きの本人に取つては、之が爲に何の差支を生ずることも、不足を感ずることもない。

『俺は、魚の腹を通つて來て仙人になつた、不老不死の術を得た者は俺だ』と嘯く海坊主。

其六

『お前の商賣は何かえ』

魚に呑まれた話を聞く箸の自分は、あべこべに先づ向ふから斯う問ひ掛けられた。

『筆を持つのです』と云つて、輕く受け流さうとしたが、取ッ捉まへて離さない。

『ハア、繪かきか』

『イエ』

『書家？』

『そんなんぢやアないんです、文筆の方です

『ア、、新聞屋かえ』

『それとも限りません、新聞や雜誌へ書いたり、著述をしたりするんです』

『何でも屋だな、書物も作るのか』

『エヽ』と答へた自分は、ひそかに、靑二才の癖に生意氣だとの喝破を迎へる覺悟を極めた。

所が、案外に無事て。

『幾つぐらゐ書物を作つた？』

『彼是七八種も出しましたらう、碌な物は一つも無いんです、濫作はいけないつて、友達も忠告して吳れますし、これからは、一年に一つか二つしか出すまいと思ふんです』

『小さな膽ッ玉だなア、アハヽヽヽ』

『何故です』、自分は强ゐて笑顏を作つたやうであつた。

『何故つてお前、モウ七八百も出した上なら、これから餘計出さないやうにすると云ふもいゝが、なアんだ、タッタ七つか八つ、假初にも書物を作らうと思つて筆を持つ人間が、そんなこつてどうする。

一年に一つか二つにするつて。

何故、一年に十も二十も出さない。

一生の中に五百も千も作つたつて、死んだ後へ殘るものは、一つあるかないか分りやアしないや。

出しなさい、ドシ〳〵出しなさい。

出來るなら、一月に十も出して見るがいゝ、書物を讀む人間を、みんな自分の方へ引き附けるさ、それ程の意氣込みて書いたら、いくら出したつて、羽が生えて飛んでくよ。お前見たいに、そんなシミッタレな料簡で、一年に一つにしやうかの、半分にしやうかのッて、氣迷つてるやうぢやア、書く物に魂が入つてないから、一生涯にタッタ一つ出したつて、碌に買つて見る者もあるまい。

今の若い者は、何だつて、さう意氣地がないんだらう』

成程、話に聞いた以上の變り物だ、拈くれ者だ、お前の云ふ事はちがふッて反對したら、或は鐵拳の御見舞を受けるかも知れない、それならまだいゝが、憤つて、魚に呑まれた話をしないつて云はれると、折角尋ねて來たのが無駄になる、せう事なしに、自分は此所でも亦笑顏を作つた。

『オヽ、茶を出すことを忘れた』と、海坊主は立ち上がつた。

板の間へ行つて、暫くガタ〳〵云はしたと思つたら、左には大土瓶を提げ、右には茶碗二つ伏せた塗盆を捧げて。

『何も茶受は無かつた』と、呟きながら座に戻つた。

『御家は御一人ッきりてすか』

『オヤ、箸にも棒にもかゝらない餓鬼が一匹居ります』

苦笑ひした海坊主の目には、そんな事を聞いて呉れるなとの色が見えた、いや、見えたやうに自分は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

思つたので、輕く。

『魚に呑まれた御話を』と、言葉を轉じた。

『それぢやア、始めやうかね』

忽ちまた機嫌が直つた、聞く方の熱心より、語る方の熱心がどうしても上だ。聞いて貰ふのが、嬉しくつて堪らないと見える。

其七

『十年や二十年ぢやアないからねえ。

モウ五十年餘りになるよ。

俺も隨分生きるわ、此具合ぢやア、百は大丈夫、二百がどうかと思はれるばかしさ、だから、五十年餘り前のこつたが、つい昨日の災難のやうで、魚の咽喉をズル〳〵と滑つてく時の氣持は、今も胸のあたりに殘つてるよ。

久六、五平、鐵五郎、丑松、それに宇太郎で、都合五人、宇太郎ッて俺のこつた。

丁度茶の花の咲く頃だつた。

鯛釣りに、沖へ出た。

前置は拔きにしやう。

どうも、馬鹿に鯛が釣れたよ、氣味が惡い程釣れたねえ、四尺餘りの奴が。

ニヨロ〳〵と、鰻の死んだの見たいに上がつて來やアがるんだもの。

一體、海の水は活きてる、鈎を投げたつて、綸を引いたつて、素直に人間の手に任しちやア置かない、それに代物は、魚の眷屬で二番と下がらない威勢のいゝ奴だ、三尺と來たら、モウ手ごつちよに了へない筈ぢやアないか。

四尺餘りの赤い奴が、今云つたやうに、ニヨロ〳〵と、鰻の死んだの見たいに、手答へも無く上がつて來るなんて、全く唯事ぢやアないね。

氣が附いて海を見ると、水が油を湛えたやうになつて、ソロリと舟を撫でる程の波も無い。

どんな凪の日でも、沖には波がある筈のものだ、沖に波の無いのは、鏡へ人間の姿が映らないと同じだ、これア、海が石花菜見たいに、底からだん〳〵固まつて來るんぢやアあるまいかと思ふと、ゾッと惣毛立つて來て、モウ釣どころの段ぢやアない。

歸らうぢやアないかつて、フト見合はせたのが、めい〳〵の顏の見納めであつたねえ。

海が膨れ上がつて來た、高く〳〵と舟は持ち上げられる、ハッと思つて立たうとしたが、腰が痺れて動かれない。

其中に、舳が高くなつて、舟は艫の方へ傾く、一杯に積んだ鯛が、筋斗を切つて横から降つて來る、横ッ面、横ッ腹、肩、腕の嫌ひ無く、バラ〳〵と打突かつて來る、身體は舟と一緒に横に轉げさうになる、舟緣に取ッ摑まつた迄は正氣だつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其次は、幾度話したつて、旨く話せやアしない。

それア、話せない事はないさ、舟はバラ〳〵に毀れて、木の葉のやうに飛び失せる、海は花火見たいに水を吹き散らして、抉つて取つたやうに凹んで暗い所が出來る、俺の外の四人は、舟のカケラと一緒に見えなくなつちやつた、一口に話せばこれだけの事なんだがね、其時の光景は、何に譬へたらお前に通じるだらう、イヤ、何に譬へたつて通じやアしない、譬へやうたつて譬へる物がない。

第一、舟も仲間も粉微塵に飛び失せて、水が花火見たいに吹き散る中で、俺の身體はどうなつてゐて、縦令チヨツトでも、此光景を見ることが出來たんだらう、五十年餘りの間毎日考へてるけれども、どうもまだ分らない、これが分つたら、俺は神通力を得られるかも知れない。

サア大變、呑氣な事なんか云つて居られなくなつた、木瓜の花見たいなアクドく赤い色で、ヌラ〳〵したやうな洞穴が見えたと思ふと、俺の身體は、水と一緒に其中へ流れ込んだ。

柔かくつて膚の粗い物の上を、ズル〳〵と腹ん這ひに滑つてくと、急に洞穴が狭くなつて、背が天井に支へた、途端に、奥の方から風見たいなものが來て、俺を元へ戻さうとするぢやアないか。

此時俺は、始めて悟つたね、何だか知れないが、俺は今大きな物の口へ入つてる、咽喉へ行かうとする途中から、歯の下に押戻され掛けてると分つた、押戻されたら噛み砕かれるばかりだ、何でもこれは、咽喉から腹へ滑り込むに限ると、手足を踠いて、遮二無二前へ出たんだよ、此俺がさ。

後から見れば、人間の心の働き程恐ろしいものはない、此心の働かせやうに依つては、死んだ先の事

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

迄も、分らなきやアならないと思つた、何故つてお前、大きな魚の口へ入つてから、其舌の上でゝも悟が開かれるぢやアないか、此悟と云ふ奴は、謎を解くやうに、物の勘定をするやうに、心で考へてそれから出るもんぢやアない、魚の舌の上でそんな暇があるもんか、マア、話したつて分りやアしないよ。

身體を細く長くして、ヤット潜れる隙間を逆落しに行くと、サア暗い。

イヤ、暗いと思つて、其暗さを味つて居る暇もない、ドロ／＼した物の中に包まれて、目も口も明かれずに居ると、四方上下から、手見たいに柔かくつて、ヤスリ見たいに粗い物が、身體を攫んで、握つて、縮め枯らして、揉みてなさうとする。痛い痒いを通り越して、氣が遠く、睡いやうになる、魚の胃嚢へ入つたのさ。

若し、此胃嚢が今少し小さかつたら、揉み方がモット激しくつて、これが胃嚢だなと氣が付く程にも、心が働けなかつたんだらう、魚の馬鹿に大きかつたのが、つまり俺の幸福だね。

どんな場合に臨んだつて、人間の命數が盡きない中は、俺はまだ死なゝいつて、胸の底で呼ぶやうな聲がするもんだ、すると干瓢見たいにグニャ／＼になつた身體が、俄に鐵の棒見たいにピンとなる、魚の胃嚢の中は恐か、此活きる力が拔けない間は、地獄の釜の中からでも、宙返りをして飛び出すことが出來やうと思ふ、此活きる力が、張り切れるやうに充ち滿ちてゐたら、矢も鐵砲も刎ね返り、刀で切つても切れず、火にも燒けず、水にも溺れない、だから、人間は、何時でも此活きる力を十分に充たして置かなきやアならない、病に取附かれる奴も、これを八分か七分にして置くからだ、どんなに才があつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ても、學問が出來ても、これが怪しかつたら役に立ちやアしない、今の若い者なんか、こんな事を話したつて分らない奴が多いから、情けないつて云ふんだよ。

待て呉れ、一服やるから。

ム丶、魚の胃囊だなと思ふと、我知らず内懷へ手が入つた、かう見えても、先祖は槍一筋の主で、關ケ原の戰へも出たつて印がある、無銘だけれども、切れることは此上無しの短刀、何より可愛くつて、肌身離さず持つてるのが、スルリと鞘から拔け出したね。

急に身體が熱くなつて、骨が鳴つて、肉が動いて、血が沸いて、手足がブル／＼震へるばかりに氣が充ち渡つて、何とも云はれなく心持が好くなつた、魚の胃囊の中でだよ。

俺の活きる力が、魚の腹を徹して、御光見たいに外に輝き出したつたかも知れない。

ウーンと踏ん張つて、彈みを附けて、柄も拳も徹れと突いて抉つたわ。

物は一度で埒を明けなきやアならない、一突き一抉りて答へが無かつたら、それつきりガックリと行つたんだらう、外からは波、内からは俺の踏ん張つて押す力で、人間なら錐の先て突かれた程も無さゝうな傷口が、メリ／＼と裂けて擴がつた、ドヽドウと、冷たく柔らかい物が顏へ打突かつて來たと思つたら、世界は青く明るい。

海が魚の腹へ入つたのか、俺が海へ出たのか、どつちだか分らない。

明るいと思つたのも、ホンの脈が一つ打つだけの間て、其後の事はモウ分らない、鎖鎌に附いた分銅

を知つてるだらう、丁度あんな具合に俺の身體も振り廻はされたやうだよ、けれども、振り廻はした者は何か、振り廻はされた場所は、水の中か、空の上か、そんな事はチットも見當が附きやアしない、あんな事は、若い時よく夢に見たもんだが、若し死ぬのも睡るのも同じなら、あれア、半分死んでゝ夢を見たんだねえ。

それからは、どうなつたか知らない。

身體がいやに熱く痛いと思つて、目を明いて見ると、隣國の漁夫の家に臥てるんだ、日數は何時の間にか六日も經つて、全身火傷をしたやうに爛れてる、痒いと思つて頭へ手をやると、毛が固まつて落る、魚の腹の中で溶けかゝつたんだね、呑氣な次第ぢやアないか、アハヽヽハ』

其八

『客人、酷く感心した樣子だねえ、俺も、今迄に何千度此話をしたか知れないが、お前程感心して聞いて呉れる人に逢つたのは、これが始めてだ』

我れ知己を得たりと海坊主の喜ぶ顏を見て、自分は快然と別れを告げた。

是非再た來て呉れろと、しつこい程に繰返されたのだ。

此おやぢいゝ加減のチャラッポコを云ふと、聞く者悉く口へ出すのでもあるまいが、蓋し、冷笑の色を蔽はうと愼む迄の者も無かつたのだらう。

自分は、唯だ、話の趣味を取るのだ、其實地との關係、及び懸値の有無は、必ずしも問ふ所でない、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大きな魚の死骸は、何所へどう漂ひ寄つて、何者の手へ入つたのだらうなど、怜悧さうに質問し始めたら、事の打毀しになる虞れがある。

其九

海坊主が家の後に聳へて居る大岩、あれを海の方から見たら、餘程風致がありさうだ、と自分は思つた、其岩の下は、水が澄んで、底が深くつて、種々の鱗族と樣々の海草とを貯へて居さうだ。

其日の夕方、此頃の打續く凪のうちにも、別けて、海が一思案したやうに靜まり却つたので、小舟一艘に櫂一挺借り受け、宿の下から不器用に漕ぎ出した、旨く行かなくつて引くりかへしたら、舟を押し乍ら泳いで歸らうと云ふ寸法だ。

旨く行つたよ、二つ三つ、水の中の岩を避けて、苦もなく、大岩の下の一段海が低いやうに思はれる所へ行つた、果して深い、果して澄んで居る、水で死んだ者の幽魂のやうに、海草の間の薄暗い所を選んで行く黑い魚も見える、岩の勢ひは、思つたよりも奇矯で、之を海へ吹き倒す風の無いのが不思議な程だ。

けれども、大概豫想して來た自分は、更に是等の爲に驚かされなかつた、唯一つ驚いたのは、方三十間の淵が、岩の下へ吸ひ込まれるやうに水を動かして居る事だ。

自分の舟もあの下へ吸ひ込まれたらと思ふと、少し心細くなつて來た。

自分の生れ國の雄鹿島と云ふ所に、船隱しの窟と云つて、其傍へ船が寄ると、忽ち吸ひ込んで、カケ

ラ一つ吐き出さない魔所がある、自分は今其所の事を思ひ出したのだ、岩が水を吸ひ込むやうに見えるは、全く氣のせいだらう。

それでも、何となく心持が悪いから、引返さうと思つて舟の向きをかへた、西の空の殘る紅ゐは、モウめじ鮪のやうに黒味を帶びて來た、海は暗い。

櫂を突込んだ、こゝ迄は無難に行つたが、扨て其次だ。

揚げやうとしたが揚らない。

正直に云へば、全く驚き慌てた。

力を込めてグッと揚げる、舟が凝として居ない、自分は蹌ける。

揚つたことは揚つたが、櫂の先へ物が食ッ附いて居る、サア事だ。

此一刹那「海坊主宇太郎の話は決して噓で無い」と、思はず自分は獨語した、人を呑む魚は物か、海の中にはこんな得體の知れない毛多物も居る。

宇太郎のやうに短刀を持つてゐたらと、何も無ひ懐へ手を當てた、縮の單衣の前が開いて、隙るは腹の皮ばかりだ、心臓は掌の中で躍つて居る、思つたより度胸の無い男！

股を割り、腰を低くゝして、舟と一緒に引つくりかへらないやうに身を構へ、舟縁へ手を掛けたら一打と、兎に角に櫂を振り上げた。

其影水に映ると共に、今迄在つた物の姿は隱れた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

チラと見ただけであるが、頭に被つた黒く長い毛が波に漂ひ、首も手も胸も、水の上に現はれ出た所は、寸分人間に違ひがない、乳が膨らんで居るばかりでなく、顔が確に女だ、別けて、憎くつてたまらないのは、それが年頃で美しいことだ。

色は、殘念だがそんなに白くはない、尤も、これで雪の如くと來たら、作り話になつて了ふからねえ。

幸に、それを神か妖怪かと見る程に、自分の頭は不健全でなかつた、若し人魚と云ふ魚があるなら、或はそれかも知れない、取つて食つたら、何時迄も若くつて居られるかも知れない、けれども、不幸にして、自分は人魚の存在を信ずべく愍じ學問をして居る。

人間以外の物でないとは思つたが、人間以外の物でない者が、魚と一緒に水の中に棲んで居る理由は分らない、あり得べからざる事があるから納まらないのだ。

ボーッとして考へ込んだが、考へたつて分かる事ではないから、何とはなしにあたりを見廻はした、ヤツ、大變な者が岸に立つて居る、大岩と並んで、其千分の一も無ひ小さな物體であるが、之に目を引かれると共に、自分は大岩のあることを忘れて了つた。

夕暮の中に染め拔かれて、煙のやうに薄白く見える女の裸姿。腹がある、腰がある、二本の脚がある、確に人間と極まつた。憫れて眺めて居ると。

「此馬鹿め」

大岩を動かす呶鳴りと一緒に、團扇のやうな手が下つて、濡れた背をピシャリと食はした音が、舟迄鮮やかに聞こえた。

娘は圓く小さくなつて、手の下を潜り抜け、闇を突いて驅け去つた。

あとには、海坊主の宇太郎、海坊主のやうにノッソリと立つて居る。

「ヤア、誰かと思つたら今朝の客人か、釣れるかえ」

自分は答へる間の我慢も出來ず、一文字に舟を進めて、シタヽカ岸へ打突け、仰向に海の中へ引つくりかへらうとして、辛くも踏み止まつた。

「あぶない、何だつてそんなに慌てるんだ」

「何てす、あの、背を打たれたのは」

云ふ中に、自分は岸へ飛び上がつた。

「ハヽヽ、あれア俺の娘さ」

「娘?!」

「さうさ」

「驚いた」

「お前何か惡戯しやうと思つて、あべこべにやられたんだらう」

「惡戯どころの段ぢやアない、何がどうしたつて、海の中に棲んで居る娘がありますか、お前さんは、

矢張り人間でなくつて、海坊主の化物でせう』冗談でなく、眞面目でかう云つた。

『我家へお出て、お前のこつたから、何も蚊も話して聞かせやう』

其十

宇太郎へ附いて、大岩の前の家の戸口を潜ると、磨れちがつて、例の海の中に棲む娘が外へ飛び出した、桃色の湯文字一つは、前と異なる申譯ばかりの嗜みだ。

『何所へ行くんだ、そんなざまで遊びに出ると、家内へ入れないぞ』

『我家の前で涼むんだよ』と平氣なもの。

『何だつて燈火を點けない』

『油が無いんだよ』

『氣を揉ませる奴だなア、油が無きやア、買つて來るがいゝぢやないか』

『お錢をおくれ』

宇太郎は無言で上がり、疊を敷いた所へ行つて、また引返して來た。

『ソラ、四合だよ』

『お釣で大福を買つてもいゝかえ』

『オヽ、買つて來るがいゝ』

其十一

『客人、あれを御覽なすつたか、何にしろ、馬鹿だから手が附けられない』

溜息を吐く樣子は、不老の術を得た人にも苦勞がある。

『氣が違つて居るんですか』、同情が溢れて聲となつたのだ。

『イヽヤ、生れ附いて少し足らないんだ、これに就いて話がある、暗くつて御氣の毒だが、マアそこへ坐つておくれ』

自分は、魚に呑まれた話を聞いた時よりも、更に一際耳を澄ました。

『見られる通り、俺は子なんかある柄ぢやアない、あれを娘にしたに就いては、淺くない理由があるんだ、極まりがよくないけれども、ぶちまけて話しちまはう』

これも古い話だ。

古いも古い、魚に呑まれたより前の事から話さなければア、事の筋道が分らないんだからね。

極まり文句のやうだが、今から五十年餘り前のこつたよ。

俺だつて、人並に頭の毛もあれア、眉毛もあつたんさ、いゝ男ではなかつたらうが、マアあんまり人にも押されない若い者であつたやうに覺えてる。

其時に、或る娘といゝ仲になつたとさ。

あいつだつて、今生きてりやア、七十ばかしの皺苦茶婆々アさ、いやなこつた。

十八の娘と夫婦約束をしたよ、此俺が。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

所が、例の魚に呑まれた一件で、御覧の通りの姿で歸つて來たらう。寢返りを打たれたけれども、俺は恨まなかつたよ、俺が女だつて、こんな海坊主と夫婦になるのは、全く有難くないからねえ。
月日は、人間に構つてまごついちやア居ない。其娘が、おつかアになつて、赤ん坊を生む、無論他人の女房になつてさ。其赤ん坊が亦おつかアになつて、產んだ赤ん坊は、誰でもないあのお島だ。つまり、お島は俺と約束した女の孫だから、どちらかと云へば、俺にも孫見たいに當るが、そんな事に構はず、娘にして置くんだ。
正直に云へば、阿魔が憎くつてたまらなかつたね。碌でない事があつて吳れるやうにと、實は願はないわけでもなかつたよ。所が、碌でない事だらけになつたから、恐ろしいと云ふのさ。
阿魔は餓鬼を生んでから三日目に、タッタ二十一でくたばる、其餓鬼が大きくなつて、亦餓鬼を生むと、今度も矢張り、十日目の二十四だ、世話アないよ。
さうしてる中に、お島はズン〳〵大きくなる、一家一門は、引續いてバタ〳〵死ぬ、十歲になると、一人ポッチでゐるとこも無いと云ふのは、全くたゞの成行ぢやアない。
俺の祈りが利いたのかと思ふと、魚の咽喉を落ちてく時よりも、厭な心持になつたねえ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けれども、よく考へて見ると、俺はそんなに祈つたわけぢやアない、たゞかうなつて呉れるやうにとは、誰でも思ふこつちやアないか、思つただけて、其心が直ぐに通じたものとすれば、これは俺の惡いんぢやアなくつて、それだけの力が俺にある爲めだ、魚の腹を割いて出たのも、俺に不思議な力がある爲めだ。

俺が崇い、俺が勿體無い。

俺が救つてやつたら、あとに殘つた十歳の子だけは、死なゝくつても濟むだらうと思つて、引取つて養ふ事にしたんだ。

所が馬鹿だ、お島は馬鹿だ。

十六になつてもあの通りて、夏は裸體になつて飛び出し、魚と一緒に海の底を潛つて歩く、色氣と云ふものは、藥にしたくも無くつて、心はまるで赤ん坊さ。

嚴しくしたら、チットは性根が着くだらうと思つて、時々極め附けても見るが、一向答へが無いね。

いやさ、當人には色氣はないが、惡い奴にいたづらをされて、妙な事にでもなつちやア大變だと思つて、しよつちうこればかしに氣を揉むんだよ。

あの子が馬鹿に生れたのも、成行を考へて見ると、矢張り、俺があの子の婆々を憎んだ一念の飛ばつちりかも知れない、して見ると、魚の腹を割いて出た力でもつて、馬鹿を直されない事もあるまいと思ふ。

馬鹿を直して、聟を貰ふのさ。標緻は十人並を越してるし、あれて怜悧だつたら、投げても立つやうな聟が來るに極つてる、どうだ、お前なる氣はないか」

海坊主を舅にして、人魚のやうな女を嬶に持つ、亦是れ人生の風流事かも知れないが、何だか氣味が惡くつて御免を蒙つた。

其十二

今に至つて十年。

海坊主の老爺と馬鹿の娘との內容は、自分から見てまだ疑問の中に在るのだ。

前號の豫告に私信の一部を洩したる點及び其他に付き銀月氏より來狀のまゝを左に添ふ。

拜復、無論御好意にて豫告被下候義なれど、手紙の中あれだけ御切取にては、何だか小生が功能を述べて押賣でもしたやうで見苦しく存じ候、それから「夏期讀物」の中、バイロンと海賊とが別々になりて滑稽に候、何卒小說の校正だけは御入念に願上候、是も呵々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二人畫工

（シエンキーウヰッチ作）

魯庵生譯

第九回

三週間前までは世の中に我輩が存在してるのを知つてる奴は無かつたが、今では日に十本の手紙が來る。大抵は艶書だから恐入る。五本の内四本までは『かやうなる事申上げては定めしお侮蔑み遊ばすならんと存じ候が――』とおいでなさるが定文句だ。なアに、我輩だツて、押掛けてさへ來なければ滅多と女を侮蔑にもしないサ。

が、實を云ふとネ、眞實は、カーヂヤといふものさへなければ、雨の降るほど來る文に、萬更舌を出す事も無いサ。

が、誰だか知らないが斯ういふ女郎達の了簡が合點めない。何處の馬の骨だか解らない見ず知らずの者から手紙をつけられて、男がヨシ來たオーライと直ぐ立ち處にデレリとするものと思つてるのか知らん。此奴が甚だ癪に觸る。ヤイ〳〵、何處の誰だか解らぬ別嬪樣、頭巾を脫つて來さッしやい。處でお目に掛つたら云つてやる。――ハイ、お氣の毒樣だがカーヂヤといふものが附いてます。

まだ怪しからんのは矢張出し人の解らない忠告書が來る。之も御多分に洩れない別嬪さんだらう。我輩を先生呼ばはりしてカーヂヤを雀ッ子と呼んでる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

曰く、「先生、あの雀ッ子さんが先生の奥様になるのですとネ。お見立て違ひぢやありませんかエ。一圓の視線が集中してる先生があの雀ッ子さんを奥様に遊ばすッてのは。先生は手管の罠縄にお掛りなすつたのだ――」

飛んでもない。餘計なお世話だ。最つと驚くのは、先生は自分一了簡でなく、公衆をも滿足させるやうな結婚をして吳れと注文を申込む。憐れや、カーチヤは最う敵に目指されてるのだ。

世の中に無名の手紙より最つと痛い罪惡はイクラもある。が、之れほど罪な――あア、何と云つたら宜いか適當な言葉が解らぬが――だが、大丈夫、我黨はこんな手紙でヤキモキするンぢやない。

結婚の日取は未だ定めなかつたが、最う長い事は無い。夫までは思ふさまケバ〳〵しくカーチヤを粧さして、展覽會へ見せびらかしに引張廻すのだ。

アンテックの死骸の畫も巴黎から着いた。畫題は「名殘の面會」といふので、若い男と女の死骸が解剖臺の上に寐かせられてる圖である。其畫の趣向は一見明瞭で、思ひ思はれた若い同士が浮世の浪に搖られ〳〵て離れ〳〵になつたのが、二世を賴みに情死して一つ解剖臺へ載せられたのである。

死骸の上に伸し掛つてる醫學書生の身體が少し堅すぎてる。遠景法にも怪しい處がある。併し死骸の出來は素晴らしいもんで、觸つたら氷のやうに冷たいかと思ふ。が、甚だ不快な氣持がするッて云ふンて、評判どころか、口にするものさへ無かつた。尤も批評家は口を極めて褒め立てた。

當展覽會の出品者たる畫工の中にも隨分腕利の奴がある。早い咄が、アンテックの死骸と聯んでるフ

ラネック・ツエブコーウスキーの『コレッキーの最期』などは非常な力の入つた獨特の手腕が見れてる。

アンテックは此野郎は馬鹿だと云つてる。何故ならフラネックといふ奴は第一前髪をバラリと垂れてる、夫から願に掛けて流行の衣物を着てゐる、夫れから又素性が上等のを鼻に掛けてイヤに行義振つて較やともすると身分のある親類を引合に擔ぎ出す。イヤハヤ鼻持もならぬ氣障な奴だ——とアンテックは嚙んで吐出したやうに罵つてるが、併しアンテックの惡語は甚だ見當違ひだ。天才といふ奴は鳥のやうな氣紛れ者て、勝手氣儘な場所へ行當りバツタリ巣を懸ける蓬生の荒れ果てた草叢に作る事もあるし、奇麗に刈込みをした庭の中へ作る事もある。

巴黎あたりへ行くとイクラも見掛ける。釀り酒屋の男か髮結床の職人か但しはマドロスかといふ三文にも當らない衣服から人相まで廉ッぽい下等な野郎が、之て美術家て候は誰だつて呆れ返つて了うが、這般な三文野郎が意外な高尚な感情を腹の中に持つてゐて、線や色の非常な想像を蓄へて、筆を持つてカンバスへ對つたら凄まじい名畫を作るものだ。例のオストリンスキーは時々名句を吐くが、何時だッたッけ、斯う云ふ連中の美術家を評して『蟇が珠を吐く』と云つた。

アンテックの說だと、歷史畫といふものは『朦朧體野蠻流』である。我輩は一向歷史畫を描かんのだから、自分一身に取つては這般な問題は何方ても關はんが、斯ういふ說が屢々進步したものゝやうに迎へられて人が信じ出すやうになると徐々氣に掛る。

元來波蘭の畫工は飛んだ了簡違ひをしておる。彼等は何かしら主義とか主張とかいふお說敎に隨喜し

て、兎角に其草履持になる。何を見ても自分の好きなお說敎にコジ付けて畫にしやうとする。畫工といふよりは說敎坊主だ。

前に話した巴黎あたりの美術家と丁度正反對に、美術とは何ぞやとか、美術は此の如くならざる可からずとか、理窟を凝ねる爲に口が裂けてるかと思ふ詭釋澤山の奴がゐる。其癖ブラシを持たしたらカラキシ駄目で何にも描けないンだ。

我輩は度々思つた。美術論なんぞは哲學者が捏ち上げるもんだから、どんなヘナチヨコ論をしやうと哲學者輩に任して置くが宜い。畫工は心に感じた事を描きさへすれば宜いンだ。如何いふ鹽梅に描かうかと云ふのが大眼目なんだ。我輩の考だと、最も愚劣な畫才でも尙だお說敎よりは勝してある。イクラ立派なお說敎だつて何の役に立つものか。

第十回

我輩はカーチヤの親子を伴れて展覽會へ行つた。

我輩の畫の前には何時でも人集りがしてゐた。我輩達の顏を見ると急に祕々耳こすりを初めた。で、今度は畫よりも我輩よりも誰よりもカーチヤの顏ばかり見てゐた。殊に女連は鳥渡も目を離さないから、カーチヤは鼻高々と大得意であつた。が、我輩は之には格別氣を留めなかつたが、アンテックの畫を見て何を云ふかと思ふと、『下等ですワネ！』

するると阿爺が云ふには、娘は自分の口眞似をしてるのだと。イヤハヤお話しにならぬ。カーチヤまで

が這般な寝言を云ふかと思ふと肝癪に觸る。
面白くないから直ぐカーヂヤ親子に別れて了つた。是非ともオストリンスキーを尋ねる用があると言拵らへて。尤も嘘ては無い。實際オストリンスキーの事務所を尋ねたのだ。但し用事てはなくて一緒に會食しやうと誘ひに行つたのだ。

一齣は一齣より、愈増しに譯者の靈筆が靈動して來るので、此二人畫工の譯者は絶えず心は緊張せしめられ、先へ先へと憧れらるゝことゝ思ふ、そこをわざと、後は明晩の語物的に延ばすのではないが、實際此度は銀月氏の作が長かつた爲めに僅しか掲載することの出來なかつたのは讀者と共に遺憾とするところである、成るべく此次には多く腕を振つて貰ふことにする。
次號には更に村山鳥徑氏の佳什が現れるであろー、その構想の妙、運筆の麗は、既に本誌陽春號に於て讀者の十分に認めらるゝところ、言ふは今更贅である、題は何てあろーか、推量も時に取つての御樂みとして先づ語らずに置かう。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歌

尾上柴舟選

○ 渡邊孤帆

ゆく春の頬にちる花やおん胸や世に美なるもの
すべて冷たき
遠人を花の細扉に呪ひます罪の夜らしも星おぼ
ろなり
君と二人丘より見たる人の國ゆく子歸る子たゞ
小さきかな
水汲めばさゞめく波の波間より夏の夜あけぬ朝
とまり船
春寺や眞向き花の中にして獨り默せが晝(ひる)の大鐘
灯にゐならぶ人へ花漬を湯してはこびぬ春の夜
の家
手の白き人のたまひぬゆく春の灯にちる花よ女(をな)
子(ご)に似ると
玄關や簀屏風すきて躑躅さく裏の庭見る初夏の
家
やはらかきみ胸の露につゝまれてゆく春知らぬ
我れや野の鳥
岩の戸を出づれば群るゝ海鳥の我になじみぬ流
されの國
惡夢よりさめたる夜半の天井に幻めくよ山の小
灯

○ 吉岡夕舟

さみだれや藥煮る香の窓もれて青葉にしみぬ黄
昏の家
朝の風冷しう吹きぬ山茶屋の女髮結ふたもどか
ゞみに
藪となりて鶯姫をいとおほくおほし立てとて竹
植うる日よ
春雨や簑笠つけて鋤とりてたかんなぬすむ人も
あるべし
獵人の照射(ともし)火串(ほぐし)の狙狩(ねらひがり)山中なれば火のたうとさ
よ
いたづきやうごかで寢ねしわが足に花蔦からむ
山の草の屋
鶯はいとやごとなき公達の僧のみ弟子と法華經
よむも
夏草に白駒うたせ青うみを帆して舟やる旅を

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おもひね

○ 上邨萩江

やまざとやはゝある軒にかやりしてみやこばなしに夜を更すかな

くさの香にきり降るあけのうすあかりゆめの樣なる湯の烟かな。

なつの湖わかば小みちのさまよひやゆめの心地にあさの風吹く

朝日さす牧場のくさにてひつじのむれの數よむ南國の岡

あさかぜにくさの香せまるしまの戸にてぎむらさきの富士見て立ちぬ。

さかさまに木立うつろふ湖のそこより暮るゝやまの夏の日

森の香のみなぎりふかき星の宵を小羊おふて行くやわかき子

夕陽に楠の香たかきもりのみち長影の人の鳥にかへれる。

御やかた蔦が文字かくふる壁に夕日さしたりつめたきいろに。

○ 小川眞清

おん胸のかめをあふるゝ美酒(うまさけ)に我世うれしき醉ひてゝちかな

かをりみつ霞のとばりゆるがして紫に吹く小野の朝風

鶯の遠音淋しむ野の庵に薄日うけたる山吹の花

陽炎の香にさそはれてひそやかに世をのぞき見る田螺の子かな

菜の花の下に海見る岡のみち沖の白帆とならびて行きぬ

春の磯砂に脚絆(はゞき)の紐ときてさゝらぐ波に足ひたすかな

山家集ひもとく山の朝晴を小鳥なき寄る若樫の窓

○ 牧野しろく

春の夜や運座めきたる歌まどひ艶なる人に題出されけり。

大廣間雨に興なき弟が引き廻し見る紙鳶かな

○ 柳門子

冬川の瀧津瀬姫は水晶の岸の氷を瓔珞にして

蒲公英(たんぽゝ)に薺花(なづな)咲く嫩草にならび美(うつく)し九つの雛

糸遊や沖には白帆吾磯は眞砂にまじる美しき貝

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

濱の家薔薇咲く窓に白妙のカーテン見ゆる夏は來にけり

海松の香の眞晝を高き磯濱や沖の小島は夏霞して

○　　　　村田愛美

欄干に今日も暮れゆく日を泣きて沖漕ぐ船をまたも呼びつる

灘鳴りや遠いかづちの寄せて來る音ともきゝぬ磯の夕を

朝の日や龍姫訪ふと歌人は船して行きぬきさらぎの海

春の海君とつかれし夢のせて漕ぎなば小さき島も浮くべし

春の日や小貝拾ふて磯ゆけばわれにゑみけり海人の少女は

かなしみは絲曳くやうにせまり來ぬ膝を抱きて咳するわれに

磯の宿姉がみ膝に枕して鹽鳴く鳥をきく夜寒哉

寢ざめては枕に通ふ濤の音に悲なしや死なぬわれと泣きぬる

若人よ詩なく戀なく希望なくば往にね闇這ふ空

洞の郷に

寢すと叔父に抱かれてふりし代の物がたりきく山の春の夜

○　　　　曾根朧月

紫と白ともつれて藍碧の淵を越えたり山藤の花。

（以下春藻會詠草の中より）

山百合は山の王女が夏神にまみえます日のかざしとさくや

○　　　　淺野白汀

初夏の風にふかるゝ鹿の子みえて奈良は青葉のよゝぎにくれぬ

噴水のしぶきにゆるゝ河骨に水馬蟲とぶ朝つく夜かな。

瀧殿や夏書する日を細脛に蟻の這ひくるたかむしろかな

青鷺の脛うつ芦のさゝなりに森より湖はまづくれにけり

行水にふとみる垣や肩ごしにのぞくやうなる夕顔の花

○　　　　小宮山春子

五月雨は夕淋しき死魔の來て戸をうつさまに芭

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

森に鳴りて。
あゑかさは君に似たりといつくしみ籠にかひけり目白のつがひ
わかるゝ日森の古木もさわ〳〵と小ゆるぎなして露こぼしける

〇　廣浦藻花

花小草呼吸するなかを君とゆく夜はありあけと淡き月して。
黒檀の文机にてる窓あかり青葉ひかりて駒鳥なきて。
卯の花は小鮎入れたる魚籃さげし紅緒草履の子にこぼれけり。
茶室の戸六歩へだてゝ菖蒲さく池の龜見る日永を乳母と
五月の日別るゝ人は炎天の砂漠にやらむおもひせられて。
のぼする日温泉の香もてくる夕風は地震あるらしきあたゝかさかな。
五月雨は闇の大地と大空とつなぐがやうにふりそゝぎけり

簟

繞石選

簟麻刈る畑を遠目かな　枸骨
葛水の嬉しき宿やたかむしろ　同
濱寺の松の落葉やたかむしろ　同
寝そべつて足の長さよ簟　石羊子
夢に入る瀟湘の雨やたかむしろ　方外
簟卓による人何書く　秋來
仰ぎ寝て星に思をたかむしろ　蕪雫
簟行水を出し裸かな　久太郎
毛脛立てゝ炙すゑるなり簟　冷雨
舟人の晝飯時やたかむしろ　之子
板の間の西瓜の種や簟　皷雲
簟粟炊ぐ間の靈夢かな　不倚
俳號は達磨終日たかむしろ　同
竹をのぼる月に對して簟　竹馬
雷を遠きにきくやたかむしろ　同
手枕に麥酒の醉やたかむしろ　松露
泉水に星澄む宵や簟　同
簟河原の煙火見やるかな　寒骨
提唱も了りて老師簟　同

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夕月に飯食ふ様やたかむしろ　天仙
銀盤に氷砕くや簟　同
簟棕櫚の團扇をなつかしむ　芋村
簟人林亭の閑に座す　同
百合の香の夜涼に勝へず簟　同
簟一碧湛ふ盃池かな　鳳梧桐
簟禽語親む山居かな　同
簟軒聲雷の如きかな　同
簟籠枕師が書齋かな　莽也
簟茶室に蘭の一花かな　同
俳席に寺を借りけりたかむしろ　同
簟端坐夏行の机かな　同
簟紙に醉墨淋漓かな　同
たかむしろ階下に水の音すなり　梅痩
淸竹の貧に安居や簟　同
水盤に太藺活けけり簟　同
打語る今日の暑さやたかむしろ　同

募集課題
土用　七月十五日〆切
天の川　八月十五日〆切

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事
應募和歌は東京市小石川區原町卅五番地尾上柴舟宛の事
應募川柳は東京市本郷區西片町十番地反省社宛の事

●附記　選者の都合と、應募句數の少かつたとの爲に、今月はと思つた今月も、亦川柳を休載せなければならぬことになつたのは、甚だ以て遺憾とするところである、來月はいやが應でも掲載するから其積りでゐて貰ひたい、又應募者には誠に御氣の毒の次第であるが、折角の名吟は、決して疎略にせず、そのまゝ來月の號に廻してあるから安心して貰ひたい。更に讀者に御勸めする。川柳は元來川端柳の意味から來て居るなどゝは、ちと見て來た樣な噓をつく講釋師の言分か知らぬが、何なくよく〳〵である。溯つては思案におへぬが道理、水の流れのさら〳〵としたところを、遠慮なくどし〳〵送つて貰ひたい、とは選者ならぬ編輯子よりの御願である、そこで先づ我輩からお始めにしやう、

　奇婚萬丈腹のくじやうが膨脹し

これも三面子には内證々々と、飽くまで川柳式に締りの無き口上醉而如件

韓國宮廷の肅清

XY生

洪州其の他韓國に草賊の蜂起するものあり、皆自から義兵と稱せり、蓋し其巨魁主謀のもの多くは韓王の密旨を受けたりと稱し、現に崔玄益の如き捕縛せらるゝに及びて、果して韓王の密詔を所持し居たりといふ

茲に於て所在草賊の蜂起するもの、韓王の左右と氣脈を通じ、韓王の左右に煽動せられたるものなる事疑ふ可らず、然るも多數韓民が之に呼應せず、其の蜂起するものに單に草賊に止まるは注意すべき現象也、否、當然の現象也

吾人思ふに韓王は心よりして我が保護たるを悦ばざるべし、否、韓王の如き寧ろ一種の後入齊のみ、稍々怜悧狡獪なりといふも、畢竟は一個の無意思者のみ、其の左右に至つては、多年韓王を擁して臣民を誅求し、當に不正の榮華を極めたるものなるが故に、日本の權勢が加はるに隨つて人民を誅求する能はず、不正の榮華を極むべき財源に窮するが故に、韓王を誑惑して强ひて日本の保護を離れしめんとす、而して勢家權門の遺族にして地方にあるもの、また陰謀詭計を以て權勢を執らんとするも、日本の權勢加はるに隨つて秩序整頓するを以て、陰謀詭計を用ゆるの餘地あらず、再び權勢を執るの望み全く絶ゆべきを以て、共に日本の保護を排せんと欲して韓王の左右と相呼應し、地方の儒流（極めて稀なり）及び愚民を煽動して所在に蜂起せしめんとするのみ、乃ち彼等の本志、素より韓國又は韓王の爲めに非ず、勿論韓民のためにもあらず、論ずる所、自家私門の權勢權利のために外ならざる也、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の心事の醜陋なる幾んど嘔吐に餘りあり、而かも況んや之がため所在地を騷がし、彼我の生靈を殞傷し、財產を焚失し安寧を妨害するをや、其の罪惡寧ろ極まれりと爲さゞる可らず。

故に我が統監府は、既に捕へたる賊魁を鞫問し、且つ其の事情を究明して、韓王の左右を肅淸すべし、如何なる權豪巨家と雖とも、韓王を誑惑し、草賊を煽動したるものは、悉く檢擧して以て刑罰を加へ、其の遺孽を拔きて隻影だも韓廷に存せしめざることを期せざる可らず

若し韓王にして心より此左右の計謀に與みせんか、我れは斷乎たる處分を執るも亦可也、彼れ韓王なるもの今日まで其の民生のため如何の德を施したりや、四民を誅求し虐待して獨り其の左右と共に利福を恣にしたることはあり、其の嬖臣寵妾の喜びを買ひ、己れの私慾を充たさんがために、四民に苛酷なる用金を命じ、或は納賄を强ひ、從はざるものを羅織し刑罰して、多くの人民を苛虐に泣き寃枉に悲ましめたることはあり、民をして心より君德を仰景せしむるが如き擧措は曾て一びも之あらず、現に其の左右密旨を四方に飛ばして之を煽起するも、唯だ草賊の起て之に應ずるあるのみ、多數韓民は毫も動く所あらざるに非ずや、故に我れ斷々乎として天に代つて道を行ふも韓民は決して殷紂の亡ぶる事を憂へざること明か也、然れとも李氏の朝數百年、一朝にして其の社を絕つを憐れむべし、我れ乃ち仁義を以て韓廷を諫め、韓民のため治平を圖るに努力せしむべし、然かも左右を肅淸するに寸步も假借す可らざる也。

韓王の密旨なるもの、恐らくは韓國内に飛ぶに止まらざるべし、現に浦鹽斯德にもあらん、上海にも在らん、遠く歐洲の某々處にもあらん、蓋し彼等の謀る所は、韓國の內亂を煽起し、由て以て列國をして日本の保護權に干涉を加へしめんとするにあり、而して韓國を以て第二のバルカン半島たらしめんと欲する外國の陰謀家、假令其の帷幄に參せざるまでも、之に乘ぜんと欲して其の機を覘ふこと必無なりとす可らず、然れ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ども是れ應さに有り得べきのことのみ、斯の如き小陰謀細姦策は、今後幾年の間、頻々として起り紛々として生ぜん、吾人は斯く期待す、毫も驚ろくことあらず、蓋し我が對韓の大方針已に決す、苟くも必要あらば、天に代つて道を行ふの大決心をすら主持す、草賊蜂起の如き何ぞ多く累と爲すに足らんや、但だ時に示すに威を以てせざれは、却つて小民をして不安ならしむる廣なしとせず、乃ち今や先づ所在の草賊を刈盡し、兼ねて嚴格に韓王の左右を肅清して略々我が威信の一端を示して足れりとすべし　（六月十八日稿）

教育家並に宗教家に望む

默笑子

凡そ物その平を得ざれば即ち鳴る、物の平を得ざるところは即ち竟の聲の潜むところなり、權力の强弱、富度の高低、信仰の勝劣、潜思し來れば、古來腥風を起し血雨を喚ぶもの、此等の盈虧乘除徃來消長の間に、一大軒輊の生ずるあるによらざらんや、スパルタ、アセンスの反目や、シーザー、ポンペイの嫉視やは言はずもあれ、サン、バルトロミウの大殺戮や、クロシエール市の大攻圍やは言はずもあれ、近くは、ルイブランや、カルルマルクスやの社會運動は言はずもあれ、皆これ物の平を得ざるより起れるにあらずや、而してそを一貫して大楔子となるものは更に智力の平衡を得ざるに因らざるか、如上の中、アセンス、スパルタ、シーザー、ポンペーといふが如き、全然寃曲せる人性劣惡の方面のみの發露もあれ、それ以下のものは必ずしも然りと斷ずる能はず、否實に動機は同一轍に存して、而かも說は氷炭相容れず、兩々相軋るが如きもの少しとなさず、米の第二獨立戰爭におけるレパブリカン黨とフエデラリテー黨との爭は如何、我國維新前の攘夷黨と佐幕黨との爭は如何、吾人は何れかの一を指して亂臣賊子と大書するの勇斷ありや、目的は同一轍而かも說は兩極端、嗚呼これ畢竟何によるぞ、智力の平衡を得ざるにあるのみ、特に况んや、大智眼一たび開くるところ、他の情操は撓められ、意力も亦强めらるゝ力の生ずるをや、盖しこれは明なり、他は盲なり、後者の寃曲せる行動は盲者なればなり、明者其の肩に座して、方途を指示せんか、何ぞ好んで、自ら喰怪の横徑を取らんや、然らば劣惡なる爭も亦已むべきの理ならずや、平を圖るは治政者の第一要務なり、而して先づ智力の平衡を圖るは、更に治政者の吃緊要務なり、之と同時に又人類一般各自の自ら期すべき最大要務たるを信ず、假に權力相如き、富度相同じく、而かも信仰同一地平線上に立つ社會を想像せよ、直に恬波綵を漾らし遠山近樹、倒まに影を蘸すの平靜なる湖面を聯想せずや、樂園とはそを指すなり、滋雨長へに降り、甘露長へに滴り、人の子の舌に無上

鬪諍の快味は絶えざるべきかな、

然らば智力の平衡を得る道如何、生物學の教ふるが如く、吾人は形に於てアミーバの進化したるものに過ぎざるを思ひ、さて目前に展べられたる吾人の進化の年代記とも見るべき蝌斗、子々、蟬、蜻蛉の小より、靈鷲、獅子、大象の大に至るまでを一瞥し、さてそが長年月の間に取り殘されたる、進化の跡の遺兒なるを思はゞ、其處に一掬の涙あると同時に、扨て々々物の漸進は六かしきものよとの感起らん、何ぞ獨り形のみならんや智の進歩も亦然り、進むものは益々進み、後るゝものは愈よ後る、否退化てふ文字もあるなり、否事實ありてさる文字も生じたるなり、然らば人の世に智力の平衡を期するは難かるべきか、夫の老子は此點に於て確に一隻眼を開けるもの、その平衡の利益を愛すとはいへ、進んで爭うするの苦にして、退いて爭うするの逸なるを思ひたればこそ、黔首を愚にせんの輕斷をも敢てしたるなれ、去れど人は眠るよりも覺むるを愛す、退くの逸を欲するよりも進むの苦を愛する動物なり、彼の言の單に空理としては愛嬌あり、現實に處しては難有からざるを如何せん、然り如何に難とはいへ、吾人は必ず進歩の上に平衡を期せざるべからず、豈に然るべく運命付けられたればなり、之無くば亡國のみ、滅族のみ、ポーランドたらずんば、コロボックルたらんのみ、

智力の懸隔は國の何れを問はず免るべからずとするも、然かも急進國のそれは漸進國のそれに比して一層なり、英に比する日本の如きはそれなり、春の日永に此處一日の氣散じ、老幼相携へて歌呼笑謔、右に翠を拾ひ、左に英を摘み、陽炎燃ゆる野の十里を逍遙すとせんか、左まで伍に後れて長大息するものも出でざるべし、而かも紫電一閃、疎雨大雨覆盂の如くに至ると想像せよ、如何、老は幼を救はず、男は女を扶けず、僅々數丹の野逕、點々相隔てゝ綴らるべきに至らずや、日本は泰西二百年の文化を唯四十年間に縮寫せりと稱せらる、即ち他が徐歩したる跡を我は疾走したるに非ずして何ぞや、宛然後の例のみ、然らば智力の平衡を圖る、我國、我民衆に取つて更に一大吃緊の要務たらざらんや、

見よや現下の狀態を、村田銃に、有坂砲に、木村式の無線電信に能く日新の科學を利用して他に一頭地を拔くものありと稱せらるゝ一方に、雷や、鳴る時のみには限らず樣を付くる頑民はあらざるか、地震を鯰の微動と信じて、鹿島明神の神璽下に駈け込む痴漢はなきか、更に熱病には水天宮の護符を呑み、産痛には子安地藏の守札を戴く愚婦は無きか、更に況んや慈父母、愛妻子の、九死一生の重患に臨みて、醫を避け、薬を辭し、妖巫を招きて、加持祈禱禁厭と狼狽する昧夫は無きか、斯くて効あらばしもあれ、支ふるに堪えぬ病魔を起して胸腹に呪文を劃し、開くに難き口腔を割りて齒端に洗米を置き、遂に一大不祥を招致するの因を爲して悔えず、香花の前に泣き腫らしたる眼を擧げても、あらゆる手段を盡したればとて觀念す、愚も亦甚しからずや、

怪まば試に去つて親しく民俗に混ずること一日なれ、婚嫁葬祭、訴訟、轉宅、旅行、商略等多額の蠟燭代幣束料をも忍びて、一に稻荷の神託、太占の卜筮等によつて决する一團の社會あるを發見せん、九段坂下に輪奐

の美を競ふ一神祠はあらざるか、美土代町邊、宏壯の觀を誇る一教會はあらざるか、日本文化の中心、鳳闕の下との榮を有する東京にてすら此の如く、各區に二、三。或は三、四。更に蠢々蟻々たる喂隷の多き全國各地方を通じては、其數果して幾何なるべき、此等が實に或る一階級、一社會の死活の運命を掌握するところなるを想はゞ、吾人慄然として肌膚に粟せざるを得んや

想へ三府、四十二市、一千三百町、一万三千八百村、人口の密度それ等の點もあり、假に換算して二万村と見、二ヶ村一人の巫蠱或は巫蠱類似のものありとせんに、全國を通じて一万の數を得べく、之が平均四人の家族を有すとせば、何等の生產物をも國家に供するなくして、儉勤なる良民が粒々の辛苦の汗に寄生し糊口するもの、數正に四万に達すべし、更に一人平均、一ヶ年八十圓の生活費とせば、即ち三百二十万圓の巨額は此坐食の民を養ふが爲に空しく地上に抛たるゝにあらずや、國費多端萬民その誅求に菜色あらんとする今日、嗚呼三百二十万圓。惜みても猶ほ餘りある巨額ならずや、而かもこは唯無利無害として、又單に生活し得るの額を基點としてのみの計算なるが、吾人の直接間接に、積極的消極的に蒙る損失の額と、更に彼等が普通生活以上の奢侈費とを計上せば、蓋しその額の莫大なる、何れの點に止まるやを知らざるなり、嗚呼朝三暮四、朝四暮三は長しへに吾人に對する痛喩なるか、見えぬ一尺より見ゆる一寸は長へに吾人に對する冷語なるか、何すれぞ電車の賃金三錢率が五錢率に上らんとすとて啖罵怒號する國民が、更に損失のそれに倍蓰する此眼前の一大事實を看過しつゝあるか、彼は元より正理の堅なり、予は此を以て彼を難ぜんとするにはあらず、要は下にあり、彼を說いて此に注意を促さんとの熱誠に出づるのみ。

而かも以上の所觀は唯物質上、有形上の利害のみ、更に轉て精神上無形上のそれに轉ぜば如何、斯る智愚、賢不肖の伍を爲せる社會、その理想の究竟地に向つて邁進する步趨は如何なるべき、大中小の男女學校、其數幾万千ぞ、生徒は勿論校堂にありて孜々日新の學科に眼を注ぐべし、而かも書籍を收めて家庭に歸らば如何、上述せる如き數千年前の頭腦の遺物はその身邊を圍繞するなきか、印度製あり、支那製あり、朝鮮製あり、さては神ながらの我國特別上々製あり、此等の注ぎ出す腦漿が、紛然雜然旦暮に浸潤して、折角外部の成りたる新頭腦を糜爛し、腐化せしむるを致す、斯くては湯を沸かして水を注ぐのみ、沸れば又注ぐ、何れの日か完全の結果を見ん、そこにも進步ありとせば、そは多少の進步のみ、蝸蝓の一步のみ、而かも斯かるノし後先等しからざる厄介なる一國の行伴が、一度死活を賭すべき大問題に逢着すとせば如何、伊蘇普の語れる鼠蛙の大悲劇、一は水面に浮かんとし、他は水底に沒せんとする逡巡の態度は必ずや他の狡禽に乘ぜらるるの大團圓に終らんのみ、吾人の警戒すべきは茲に在り。

今之を救ふの策如何、唯二あり、一は科學的智識の普及、他は精醇なる眞信の鼓吹之なり、前者は專ら教育家の力に、後者は專ら宗教家の力に待たざるべからず、否時には前者にして後者を兼ぬるも可なり、後者に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して前者を兼ぬるも亦可なり、要するに、科學の說明は、彼等迷信の徒の牙城と頼める妖怪幻奇の門を叩いて、一槌打碎し去ると共に、一面眞信の鼓吹は眞に依憑するに足るべき靈光赫奕の靈體を奉じて其處に代置するを旨とす、

火渡り、探湯の怪は化學の力能く之を露出するに足らずや、祈禱、禁厭の類は、心理學、特には催眠術理によつて排除し得られずや、敎育者心事を高潔にし、單に麵麭の爲に子弟を率ゆるにあらず、校堂以外一切他の老若男女に對しても亦敎育家なるを自覺し、平素此心を以て鄕黨を率ゐ、日常應酬の際にも、之を以て人に接せんか、更に進んでは一般民衆の休日を利用し、演說に講話に、隨處に新智識を紹介し、新事象を解釋しやらんか、其處に智識は普及して、從來の一大龜裂は癒せらるゝに至るべく、而して後學校敎育も家庭の汨碍より免れて愈よ効果を完うするにも至るべきかな、然らずんば頑愚の頭腦は又後の頑愚の頭腦を生み、斯くて幾世幾代相遞次して極りなかるべきのみ近頃新文部大臣の演說偶ま、背の之に及べるものあり、吾人少しく意を強うするに足る、唯世の敎育家が之を以て一片形式的の新任披露の文句となさずんば幸のみ。

更に宗敎家の方面よりも、信は單に信にて獨往すべからず、信は主なりとせんも、智の根底の上に立てばこそ、その內容は益淨化せられ、硬化せらるゝもの、然らざれば之に反するの理を想ひ、日新の智識と抱合して其處に矛盾を防ぐべく、此意味に於て智に依るは智に降るにあらず、取て以て我擁護とするものなるを思ひ、之を迷へる衆生に示して、眞乎の彌陀の淨土、天國の樂園を開示せざるべからず、これ宗敎家の職として勉むべき一大任務ならずや、吾人之に就いて亦快心の事あり、宗敎家協和會の組織之なり、近事何ぞ耳果報の多きや、

「然れども」の此一轉語の下らざるべからざるを如何せん、宗敎家協和會なるものは、果してこの吾人の輿望を負ひて立つべき筋骨を具するものなりや否や、予が今日の宗敎として立つべき宗敎とせる其理想は、朧氣ながらも略ぼ前段によりて知るを得ん、然して宗敎家協和會々員の顏揃を見ば、果して能くそれに適應する宗敎を代表する人の顏揃のみなりや、予は斷じていふ否と、更に言ふ大に否と、予は熱誠を以て宗敎家協和會そのものゝ更に剖判瓜分し、一の眞信派が他を撲滅し了らんことを望む、吾人は斯くいふに止めん、更に問者を待つて筆尖を鋭利にせんのみ。

蓋し協和會の事業として爲すべきこと、社會的の慈善事業其他之に類するものは措き、それ以上に爲すべき事業としては、少くも今日の智識に背反する幾多迷信の徒を驅逐するの外に出づべからず、それ以上に出てんは各宗の死滅なり、死滅は可し、牢乎不動萬人齊望底の新信仰確立せば。而かも其處には協和云々、各宗云々の文字は其効用を失はれんのみ、現在のまゝには予の希望は至當なる唯一の希望なるべし、之にして上述の如しとせば、唇を洩るゝは唯浩嘆と大息とのみ。予は已に初號に於て諸士の寛容なる態度を諒とせり、飽くまで滿足せり、今は次の希としして早く男子的に且つ君子的なる活動の舞臺に現はれんことを望む、然らずんば折角の寛容の態度も、或は恐るボーツマウス會議のそれと喝采の價値を同うせんとを、而かも、彼には止むべからざるやの念を容れしむる餘地あり、之には止むを得しやの疑を容るゝ餘地あり、諸士が此處に猛省せんことを望む。



友に與へて天下の文運を論ず

大麁生

眞面目に御勉强之趣、近來羨望之至り、承るだにも快心の極に御座候。僕事、碌々の舊阿蒙、加之、左なきだに鬱陶しき此頃を、俗務の四面攻撃を喰つて、頓と閉口の體御憫察之料に候、願くば清閑半日の暇を得、肘を把つて緑蔭の裡、白雲の飛ぶを仰いで、四筵を驚かす快談に耽らましを、お互にかく相隔りてはそれも叶はず、徒に嗟止ぬる哉を繰返し居候。

偖此度御來示の論旨は洵に以て言語同斷、沙汰の限り馬鹿の骨頂、平素の兄にも似ざる見ぐるしき醜體かな、僕一向に承け引難き弱音と存候は如何。試みに眼を揚げて天下の文勢を御覽候へ。一時寫實の大旆を眞ッ先に押植てゝ、歐米の文壇を風靡したるゾラ逝いてより、かのフローベル、ゴンクール等に仍りて堅められし此派の命脈も、哀れ漸く衰へ行き。更に雷霆の轟くが如く、一時思想界の胆をして寒からしめし破壞主義の張本ニイチエ死して玆に數年、その影響を蒙つて北方の獅子と猛り狂ひしイブセンも此程遂に彼の世の人と相成り、棺を蔽ふて後に定まるといふ其眞價さへ、矢の如く奔駛し去る現今思潮に浮びては、如何に成行くべき事に候か。夫は兎まれ角まれ近來は文壇の凶年か。かの地中海濱に覇たりしダヌンチヲも其後寂として不鳴不蜚、獨逸文壇の双璧と稱するズーダーマンも無常は同じ野邊の草、既に詩腸の枯れたるやうに傳へらる、獨りハウプトマンが前途尙未だ光明一縷の望を屬すると承れど、是もまた同じ流の飛鳥川、何時か瀨となり淵となりなむ。ビヨルンソン衰へ、メレデキス隱居

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を氣取り、ハーデー默しキップリング杳として消息を傳へず、セインキウヰッチ、メレジユコーウスキー、亦「クオー、バヂス」、「神の死」を出さず、米國の斯界また沈として音を立てず。エチエガレーも過去の產物となり、一時白耳義の沙翁と迄擔ぎ擧げられし神秘宗の開山メーテルリンクも今や淺薄の譏を受くるに立到り、さしもの杜翁も今や梅干翁と乾枯び果て、珠數爪繰りて念佛三昧、浮浪者の首魁ゴルキーも政治騷に熱中して今や文筆どころの段にては無之樣子に御座候。是にて一時天下を騷然たらしめし自然派も追々下火の體と相成り、雲行も餘程怪しきものに相見え申候。然らば歐州の創作界今や殆んど人無しと言はむも敢て過言には候はず、創作熄める時の批評界は推して知るべく、高々骨董いぢくり位が關の山に候はむ。」

之を翻つて我文界の現狀に見る時は、其影響感化を與へたる數の上よりは、未だ〳〵彼に比べて常陸山對玉椿といふ取組位に候ふべきもそれすら過ぎにし過去の事。日露戰爭といふ大事變あつてこの方、メキ〳〵と景氣附き色めき渡り、萬象曼如として新なる力を添へ來りて打見るからに小氣味好き趨勢に候はずや。國語の難解難透と日常風物習俗の相違とが籬を造りて、眞に其幾何の價値あるものか、黃禍呼はりなどする碧眼の誇大狂には相知れ難かりし過去の文藝も戰捷國の美名の下に、熟讀玩味せらるゝや、遠き未來にあらざるべく候。現に邦語の研究熱が伯林に布曼し倫敦に昻騰し、萬事に突飛なる米國にては大に流行致居候由、其他の小國の見眞似聞眞似また疑い有之間敷候。今や英獨佛の諸國よりは軍事研究の留學生派遣に付き、我參謀本部に申込み來りしとか、此勢にして遠からずモンテネグロ政府に至るまで日本文藝の研究生を國學院邊にも派遣するは必定と相考候。勢かくの如くして今後の我文藝が如何樣の狀況を呈すべきか、定めし此等留學生が我文部の留學生などの例の通り、日本文壇の狀況など〻題してリテラリシエ、エヒヨウなどに沿々として論じ出し、今は無名の李三張四が一夜作りの濫作に深遠なる哲理が發見せられ、甲山乙水が時代思潮の評

論に引用せられ評隲せらるゝ事に候半。豆爾平波の暗誦か今漸と出來上りし計りのエビ茶式部が、我意中の留學生より送り貰ひし何かし中學校々友雜誌のルビー讀みに、日本通を氣取るものも多く生ずる事なるべく候。好奇心も頓ては異の欲求を喚起す導火線たるに於て、不可侮効能あるものに候。內地に在つて此許の俸給の握み合などせむよりは海外に日語教授の看板を吊けたる方、如何許か上策ならむと存候。

閑話休題、實にや日露戰爭は政治上の意味よりは、立憲制度と專政制度との爭、人道の上より見れは文明と野蠻との戰たると共に、之を文藝の上に見る時は邦國の文士と露國作家批評家とのパンの爭ひ、否國文學死活わけ目の大いくさに候。彼にありては地理上の關係一敗地に塗るゝ事ありとするも、地位を異にして我不利なりし時に較べては物の數にも候はず。又上流が形造れるかれの文藝はさばかりの影響を蒙る事も有之間敷候へど、我は僅に五千万の人口、文字を解せざるものを假に五分の一として引去れば剩す所四千万。由來不讀書の國民と評せられし所より、四分の三を不讀書と見れば、讀書子僅千万人。岌々乎として危いかな。此膝一び屈すれば勢復び伸ぶべからず。文壇陵夷また振ふべからず。已に知名の大家のみかは、いまだ嫩の教盛ならぬ生先き永き我文藝の爲、痛哭流涕長大息爲すべき事と竊かに兢々として手に汗を握り居候ひしを、天の時か、否ず地の利かあらず、擧國一致の精神は能く此勁敵を打懲つて言魂の幸生ふわが文藝を大呂九鼎の重さに置きしは、正に大杯を擧げて相慶賀すべき事に有之候。左り乍ら之を以てわれら國民は枕を高うして眠る譯には參り不申候。聞く所に仍れは彼國參謀總長バリチンが許に提出したるパセノウなるものゝ覺え書にも、六ヶ年後必ず事を再び構へんと相見え居候由、我とてもやはか覺悟は劣るべき、同胞幾万の生靈を犧牲として悔ひざりしは何の爲に候ぞ、ポーツマスの汚辱は天下公憤の的に候はずや。否々彼かその虎視眈々の野心を攝伏せざる限には、東亞の平和得て望むべからざる次第に候ぞ。渠に臥薪嘗膽の志あらば我は漆身

Digitized by Google	Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

爲厲の忍を以て、返り討の憂目を見せ爾後の異心を挫かさるべからず、茲に至りて初めて我は今回の戰役の初志を貫徹せしものといひ得べく、國としての職を盡したるものと申すべく候。或は難じて曰はむ、國家の生命と文學のそれと必ずしも並行するものにあらず。獨乙國難の際に當りて尙能くゲーテ、シルラー等の大文學は出でたるには非ずやと。左り乍ら如是は眞骨頭を具するの士は口にだも上すべからざるの言又獨乙の國狀を悉知せざるの罪。而かもベリクレーズ治下のギリシヤ文學、エリザ朝の英國文學等は、各その戰後の大發展か生みたる愛兒に外ならずと知らば、文運の盛衰は一に維りて國運の消長國民意識の緊弛の上に存するとは瞭々として火を睹るよりも明なるべく候。衣食足つて禮節を辨ふべき逕行ならば、物質的の充實は茲に精上の餘裕、觀美的體度の要求を促す上の緣ならずとせず、と解せば解し得らるべく候。彼の彈丸雨飛の間に在つて、晏然自若敢て知らざるもの丶如く、學を措かざりし學究の標度、偉は則偉ならむも、また講を廢して國難に起ち、筆を投じて戎軒を事としたるフキヒテ、キヨルネルの壯且つ高なるには如くべくも候はず。此等の如きをこそ初めて眞の思想家、眞の詩人とは申すべけれ。祖國の安危に無頓着なる詩人、之をしも似而非詩人と呼ばずしてまた何とか申候べき。

僕の言はむとする所は茲に存す。僕は今世紀文藝は邦國の淸き海邊に華咲く可きを豫言可致候。美神はその高御倉をわが秀麗なる山水の間に移すべしと斷言して些も憚る所無之候。其故は上にも些しく申上し如く、一方には戰後の要求として物欲の增大に伴つて究理欲、觀美欲の催進ある所に、天の時と地の利と双ら又兼備はれるは我邦現時の狀體に有之候。抑東洋文運の精華は一に集めて我國に存居候、維新來物心二面の文明は潮の如く東流して我邊岸を洗ひ、固より其間幾度の起伏波瀾ありて新舊兩樣の文物相衝突し相融合し、時に國民性の根底を動かさむ程の危機も有之候ひしが、時社は實に恠しきものなれ。いまや此兩洋の文物も、漸く茲に和諧の傾を生じ來り、隱約の裡僅かに其

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

萌芽を見んとするに立到り居候。此両文明の潮境に乘つて今世紀文海の沖に棹し、之が魁をなし得むもの我國の文士を除いて他に求むべくも候はず、西歐搖落の秋に逢ふて滿目荒凉の觀を呈するは是やがて文運東漸の兆動き初めて、玆に至れるには候はずや。東洋の研鑽或は彼の學者を俟つて行はしむるも可なるべく候へど、此驚くべき消化力、怖るべき吸收力同化力と、更に之を我力として表現する創造力とを兼具せる我邦人が、此新機運に乘じ此眞意識を持し此新事業に手を染むるに比して、其出來榮は孰れぞや。是僕が指して本邦が今世紀文運の秘鑰を握りたりと申たる所以に候。かく申せばとて一概に彼を輕んじ己を慢じ、壯語自ら快とするものには無之如上信すべき理由あつての斷言と御承知有之度候。左り乍ら擬議する則は一籌を輸せられむ。只惜む掌中の珠玉むざ／＼佗の手中に落ちなば後悔先に立たざるべく候。彼も名に負ふ老つわものの數世紀に亘つて煉りにねりたる剛の者に候へば一筋繩にかゝらぬは必定。吾等緊褌一番してこの晴の場の準備專ら肝要に御座候。果して大天才は何れの天より墮來るか、揚げざる牡丹餅の棚に有るべき道理なく蒔かざる種子の自然に生ずべき所無之候。

先程親戚の許より到來の甘酒が飛んだ説法と相成、御迷惑の程察入候。中央文壇日進の智識に呼吸せる兄が幸福洵に羨むべし、幸ひに御自愛祈り奉り候　匆々頓首

材料豐富、紙數が意外に嵩んだので、殘念ながら本號には漫評欄を省くことにした、由來鵜の目鷹の目、爬羅剔抉が本業の漫評子、變幻浮雲の如き世態に向つて、何て妙説の無いことがあろ－、此御埋合せは屹度次號でする、讀者に此意を諒として貰ひたい。



向三軒兩隣

白眼子

前號に於て、僕はなが〳〵と引越し蕎麥の說明をした、實は、讀者の倦怠も左こそと思はぬでもないが、斯うなつては乘りかけた船、今更ら止す譯にも往かぬ、そこで、引繼いて筆を起すが、併し、之れを擔任せらるゝ編輯先生の御注意といふのが、曰く、文章は簡潔にして面白く書け、材料は精撰して嶄新なものを取れ、と言つて、筆が走り過ぎては眞摯を缺くの恐れがあり、事が餘りに珍らし過ぎては、小說らしくなるからと、隨分六ヶ敷い注文なので、應ずる所の僕、唯々として御示教を承はつたものゝ、その實聊か面喰つて、現在茲に筆を執り上げながらも、今更ら急に怖氣が附いて、たゞさへ筆の澁り勝ちなのが、茲に至つてはいとゞ動かなくなる次第なのだが、それでも、出來得るだけは御示教に從はんものと、以上御注意の條々を眷々服膺して書くのだから、好しや文章が拙なくとも、餘り永くて欠伸が出やうとも、其處は、この殊勝な心掛けに免じて讀んで貰ひたい。

所で、茲に一ッ斷つて置くことがある、文章の拙ないのや澁り勝ちなのは、固より僕の及ばぬ所で仕方もないが、そも〳〵、前號から書きつゝあるこの材料そのものに至つては、斯く言ふ白眼子甚だ以つて大得意なのだ、けれど、事柄が餘りに珍らし過ぎて、聊か小說めく所もあるので、旁々以つて編輯先生が暗に皮肉な注意を與へられたものと、僻んで見れば僻まれぬ譯でもない、のみか、讀者の中にも、或は之を以つて揑造の出來事とし、でなくとも、この事實に多少お負けがある位に思ふものもあるか知れぬが、曷んぞ知らん、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事實は何處までも事實のみか、而も僕自からその局に當つた實驗なので、虛飾所が、寸毫も事實を枉げるやうなことはないのだから、之れも、序に御承知置きを願ひたい。

そこで、前號に豫め紹介して置いた界隈の惡まれもの、即ち、僕が引越し蕎麥を配らぬ爲め、常々尤も恐れて居たその差配の藥鑵頭の、餘程變つて居る奇行奇癖を、一寸茲に語つて見やう、と言ふのも、その奇行奇癖の一端を知らば、何故に僕がその藥鑵頭を恐れたかの理由が自から了解せらるゝからである。

僕の隱宅を出た所のその前面の左右に配列されて居る一部の長家、それを支配して居る所謂大家なるものが、恰度その長家の裏に居宅を構ひて居る、但し、一部と言つてもたゞその大家の前の二軒長家を所有して居るのみなのだから、他の長家には何等の關係もないのだが、而も、その大家の勢力と言つたら夥しいもので、附近一帶の長家に於ては全然凡ての權力を握つて居る、所で、この大家、即ち差配の藥鑵頭といふのが、餘程面白い變つた人物なのだ、年はもう六十の上を越えて、頭は半ば白く半ば黑く、身體は小作だが意地の惡さうな顏色をして、面を見るから先づ癪に障る老爺であるが、昔は何んでも大小を帶したとかいふので、甚だ威張つて居る、威張るといふよりは傲慢なのだ、不遜なのだ、尤も、たゞ之れだけなら別に文句もないが、之れが傲慢不遜の上に、非常の毒舌家で、非常の酒好きで、一年三百六十五日、酒と毒舌とはたゞの一日とて休んだことがない、と言ふて、その毒舌が酒の上から來ることかと思へば、決してさうではないので、飮まない眞面目な時でも、盛んに毒舌を弄して居る、況んや之れが飮んだと來たら、殆んど仕末に終へないのだが、厄介なことに、酒は片時も離されぬといふので、臺所には何時も菰冠りが飾られてあるのを一ッは自慢にして居る程の御本人だから遣り切れない、病氣でない限りは、必らず朝から赤くなつて居る、赤くなつては毒舌を逞うして居る、それで、その毒舌が家に居ての毒舌なら未だしもだが、家に在つてはお三どん

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上りの妾同様なのを猫撫で聲で機嫌ばかりを取つて居る癖に、つまりは家のむしやくしや腹を近所の長家中に當り散らさうといふのだから災難なのだ、されば、醉ふと必らず往來へ出る、往來へ出ると必ず長家を廻つたものだ、それも、自分の長家だけなら未だ〱恕すべしてあるが、附近の長家を片ッ端から廻つて、眞ッ向から毒舌を浮せて居る、兎に角厄介な代物なのだ、殊に、その毒舌が又一通りでないと來て居るから、尚ほ更ら厄介なのだが、試みにその毒舌の如何に毒々しいかをお眼にかけて見やう。

て、この代物が往來へ出ると、長家一帶は勿論、界隈では誰れ知らぬものもない程の名物男であるから、顏を見ると先づ遇ふものからして言葉をかけるのが例になつて居る、そこで、『お早う……』ならば大概無事で濟むが、それも過つて刻限でも遲いと、『何が早いのだ……』と來る、『結構なお天氣で……』、と言へば、『それが何うした……』と來る、『好い御機嫌で……』、と言へば、『餘計なお世配だ……』、と來る、凡て、一から十まで、皆このやうな調子なのだから、知らぬものは噓と思ふか、知れぬが、實際掛け値のない話で、こんなのは未だしもお手軟かなのだ、更らに、長家を廻つての毒舌といふのが甚しい、『今日は米があるかの……』と冒頭が先づ之れだ、返事の出來やう筈がない、それで、默つて居れば、『今度は、『晝の副食物は何んだ……』と聞く、尚ほ默つて居れば、『偶には鰯の二三疋も食つたが好いぞ……』と惡まれ口を叩く、衣服を見ては『汚ない』と罵り、好ければ、『誰が吳れた』と聞く、でなければ亭主の無能を罵り、貧乏を嘲つて居る、凡そ、眼に見、耳に聞くもの、一としてこの老爺の毒舌にかゝらぬものはない、知らぬものなら無論嚇怒する所であるが、兎に角名代の代物であるだけ、誰れとて相手にするものはない、たゞ唯々として、戰々として、毒舌を逞ふせしめて居る、と言つて、その毒舌を齒牙にかけずに平氣で濟して居れば、如何に厄介な代物でも、遂には張合拔けして押し默るに違ひないが、其處が、無教育なる淺果な女の情けなさには、却つて老爺の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

毒舌を免れんとして、殊更らに表面を飾り、家には襤褸を下げても往來へ出るには垢の附かないものを着換へるとか、運惡く老爺の眼張つて居る所へ偶々魚屋でも通れば、無理な工面をしても呼び入れるとかと、一ツは近所の前への外見を張る競爭心がある所へ、かてゝこのやうな代物が朝から晩まで日課の如く長家中を監督的に見廻つて居るのだから、實は老爺への前を慮つて、殊更ら生活を裕からしく見せかけるとか、亭主の腕を誇り廻るとかと、實際お話にもならぬ程だが、併し事實だから仕方がない、若し諸君にして尙ほ之れを疑ふとならば、町こそ明瞭に示されぬが、巣鴨街道から以西、植物園以東、卽ちこの間を注意して歩いて見たまへ、雨の降らざる限り、彼れの病氣ならざる限り、何時もこの厄介な老爺が、必ず往來にうろ〳〵して、その因强な顏を晒して四邊を睨め廻して居ること請合ひだから。

　事情既にこのやうてあるので、前後左右の十有餘軒の長家、所謂その山の神なるものに至つては、たゞそれこの因强老爺の毒舌に罹らんことを恐れて、只管その歡心を得ることにのみ汲々として居るのだが、實は又、平生怨みのあるものや、乃至は快からざるものなどへの復讐として、缺點を探し出したり、それがなくとも事實を揑造してさへ、そを陥るべく、この因强老爺に密告するのを以つて唯一の手段として居るのだから堪らない、もり蕎麥二ツの怨みを今に忘れぬ彼等は、鵜の眼鷹の眼、朝夕僕の出入に眼を注いで居るといふのも、必らずや何等かの缺點を見出して、そを因强老爺に密告するべく狙つて居るのに違ひがない、されば疵持つ足の僕が戰々としてそれ等山の神連の鼻息を窺ひつゝある意氣地なき態度も、觀じ來れば强ちに無理でもないてあらう、勿論、知らぬ諸君の眼から見れば、或は僕の女々しき行動を擯斥するか知らぬが、平生、顏を見て挨拶せぬのをさへ、僕を目して變人だとか生意氣だとかの罵倒を遠慮なく浴びせて居る程の老爺である、況んや、配るべき筈の引越蕎麥を配らなかつた一事が、誤つて老爺の耳にでも入らうものなら、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それこそ何んな毒舌を振り撒いて歩くか知れないのて、輕く濟んだ所で、吝嗇とか義理知らずとかの侮辱を與へるは覿面、稍々もすれば配下の山の神連を使嗾して、四面攻撃を遣らせるか、てなければ、長家の交際を知らずとして、暗に立退せ運動などを試むかも知れないので、甚だしきに至つては、之を未聞の珍事として道樂世界などいふ穴探しの讀賣り雜誌に投書などせぬとも限らない、思ふて玆に至れば、豈恐れざるを得ない譯である。

と言つたら、讀者又もや疑問を挿んで、その因强老爺や山の神連の跋扈の甚しきを訝るか知れぬが、之も實際の話て、現に、彼等が一家に於ける勢力と言つたら殆んど言語に絶して居る、今試みに尤も適切な實例を擧ぐれば、僕が玆に轉宅して以來、約二ヶ月ばかりの間といふもの、留守守る山の神連には日に幾回となく顏を合せるもの丶、而も彼等山の神連が常に誇りつ丶ある所の御亭主なるものに至つては、不幸にして絶えて拜顏の榮を得たることがない、そこて、僕は常に之を不思議に思つて居たが、併し、考へると不思議でも何んでもなかつたので、そもやこの長家の御亭主連といふのが、多くは職工とか車夫とかいふ勞働者のみだから、朝はもう五時頃から出かけて、夜は早いのが六時、遲ければ九時十時てなければ歸つて來ないのだ、僕がお顏を拜み得なかつたのも理由は實に之れと分つたのだが、兎に角一日過度なる勞働をつゞけて、病氣ならざる限りは缺勤もなく實直に働いて居るものを、家に在る山の神が何うかといふに、子供の守りを口實に、朝から晩までのらりくらりとして、近所近邊をかけ廻つては他人の惡口と他人の缺點のみを探して居るのが一日の仕事なのだもの、怠惰なる女房の口から、何とて勤勉なる亭主の惡口が言はれやう、他人の前へ出てやれ稼ぎ人だとか腕があるとかと、無暗に賞めちぎッて居るのもその筈て、實際拜み奉らねばならない譯だが、併し、外見と內見とては恰度正反對て、亭主が汗水流してせッせと働いて居ても、女房は長火鉢に倚りかゝつて、煙草を吹しながら、亭主の姿が見える

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

か見えぬに、或はその日の收入の不足を見て、突如(いきなり)がみ〳〵と怒鳴り立てるやら、或は、隣りの女房(かみ)さんは好い亭主を持つて幸福(しあわせ)だとかと、目前己が亭主の無能を嘲ける如き女房天下は、滔々比々皆然りて、それも、揚句の果てが何うかと言へば、泣くやら喚(わめ)くやらの騒ぎに、長家總出の奇觀なども屢々見聞する所であつた、要するに、之等長家の御亭主なるものは、たとそれ妻や子供を養ふべく、剩(あまつ)さへ外見(みえ)や體裁を飾らすべく、營々として勞苦しつゝあるのだから、憐れにみじめなのは獨り亭主野郎で、萬歳なのは獨り山の神である。

生涯唯々として服從すべき筈のその山の神が、現在の亭主を遇すること而かく然りである、更らに、之等山の神連を自由に使嗾しつゝある彼れ因强(えんごう)な藥鑵頭の、その得意やその權力は蓋し察するに難くはないではないか、茲に於てか、僕の界限と言へば、悉くその藥鑵頭と山の神連の勢力範圍に屬するので、何物の容喙も何物の抵抗も決して許さないのである、况んや新參の僕毛色の變つた僕、殊には紙持つ足の僕、などてそれ等の强敵に向つて、堂々の陣を張り、弓矢を放つことが出來やう、たゞそれ戰々として四隣の忌彈に觸れざらんことのみを之れ勤むる外には何等の策もない、而も之れが、その原因僅かに轉宅蕎麥を配らぬ爲めのお蔭で、斯くまで永久に苦心し氣兼ねしつゝあるに至つては、愚も又極れりである、勿論、如此き長家が廣き東京を通じて皆之れでもないであらうが、兎に角家を持つ早々、僕はこの災厄に出遇つて居る、さればば、希くば諸君も僅々たる轉宅蕎麥を惜むが爲め、僕の如き愚を敢てせざらんことを呉々も注告して置く。」

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以内葉書に限る▲締切毎月十八日限

▲幸福なる寄生蟲

神田　M　M

近頃僕の家の前に、東照權現の御靈屋かと思はるゝ程立派な建物が出來た、表の入口に「御下宿」の看板が、かゝつたので、之れも親の臑か嚙り居るくせに、北辰大學や、柳新學院に通學する學生の、御館と知られ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たのである、國元に於ける兩親は、茅屋に起居し、鋤鍬を手にして、其の勞苦により得たる金をば、學資に給して以て伜の立身幸福を祈る、阿々。斯の如き翠館朱樓に紳士の樣ひをなして、親の向腦を嚙り居る寄生虫、さても二十世紀の學生は幸福なる哉』　六月十五日投函

▲罰があたる　本郷　魔王冠者

此頃の若い奴等が可愛い子供を見ると、まるで天使の樣だとよく曰ふてるが、一體全體其の天使なるものは實際あるものではあるまい、若し假りにあるものとしても未だ見た事はあるまい、生意氣にも見た事もない者を無暗に天使を濫用すると、やがて其假天使から罰が當てられるぞ、西洋かぶれの青二才奴等用心しろ、

▲虚僞的噴水　麹町　噴火山

各地の噴水の水を噴いてる物は、奇怪にも皆實際に遠ざかつた無理な物のみだ、何も世界に水を噴く實物がないと曰ふてはなし模形をそれに取たらよさそふな者ぢやないか、有り得べからざる鳥類の口から水を噴かせたり、獸類の喉から迸らせたりしなくともよからふ、美術と曰ふ點もあらふが何も虛僞的の者でなくとも何とか外に工風をして欲しい、

▲商賣敵　神田　同盟異人

同じ町内で、兩方隣り合て、同じ店名で、同じ商賣で、而して商賣敵として互に他の店を陷れ樣として居る者が有たらどうです、同年同月の同日同時に双方等しく開業した譯でもあるまいから何れ後に始めた店が德義上確かに一歩を前者に讓らねばならぬ筈だ、神田區小川町の洋物店三角堂二軒は之です、

▲亦明なき哉　牛込　燗眼生

國木田獨歩氏を近頃漸く品隲する樣に成たのは世人も案外人を知るの明がないな、文士として氏の價値は既に武藏野時代或は其以前から今世人が喋々する程の力は有つたのだ、それを漸く今頃に至て獨歩集がどうだの運命かどうだのと曰ふに至りては明らかに今の批評家及び讀者の眼識の不確なるを證して餘ありだ、併し遲播でも兎も角其所に氣が付いたのはよい事だ、

▲人政局？　本所　人種改良論者

我大日本の馬は、此度愈馬政局なる御役所か親任官を御頭に戴いて改良されるそふだ、御目出度い事だ、併し之はそも〳〵少しく他に爲すべき重大なる事を忘れ前後輕重を過た所盜ではあるまいか、馬どころか第一御仲間の人間の中にも悍にして御し難き者、弱にして用に立たざる者、及び手癖の悪い者、心の曲た者など改良を要する者が多い、此を差置いて彼を先にしたのは甚だ我輩の主義に反する、一言す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新刊批評

▲道味一堂

前田慧雲著
大樹圖

學德當代に高き前田慧雲博士の雜著で、文章の溫藉はその人の如く、諄々として說くに倦まぬ博士の風丰が現れて居る、華嚴の緣起、眞言の六大と、至理を俗談に寄せ、玄義を平話に現したもので、就いて佛教の大體、繼れて他力信心の淨土敎義の位置も知れるものだ、更に史論あり修養談あり、隨感錄あり、更に又博士の作詩もある、これも道味を離れぬ、飽くまで淸迥の文字である。(定價金四十五錢)

▲蓮如上人

前田慧雲著
井冽堂

蓮如上人といへば眞宗信徒の佛龕には離れぬ「御文章」の名と共に記臆される敎界の偉人である、溫容迫らざる態度で、質易平明の說法を續けられた上人の風格は、吾人の當に景慕すべきところであろー、著者も亦史實を傳へるよりも、その風格を寫すに勉めてあると自白して居られる。(定價金三十八錢)

▲オセロ

戸澤姑射、淺野馮虛共譯
大日本圖書出版會社

原著の評價など古代めかすもがな　新派劇に仕組まれて、嘗はとくに歌舞伎座評判記で知れて居る筈、唯それ譯者の筆が、十分之を寫し得るか否かといふことが世人の懸念なとこであろーが、はぐつて見たところ、頗る暢達に臺詞もよくこなれて居ると思ふ、尙ほ細評は精讀の上でなくてはならぬ。(定價金八十五錢)

▲讀者作文辭典

內海廣藏著
寶文館

中等教育程度の學生相手との目的であるから、語彙の範圍がその程度に用ひらるゝ國語讀本の限りを盡してあるといふのも首肯かれる、最も日常必要な語で其中にないのは、更に他の辭典から拾つたといふ事だ、說明に舊來の用語を襲はず、眞意義を現すに足る字面をと工夫したのと、各語に同意語、反意語、類語、類句の限りを搜し集めたのとは、正にその一特色、讀書、作文には便利多いことであろー(定價金一圓五十錢)

▲プラトーン

小林一郎著
富山房

夫の誰も知る理想國の梗概が中心となつて、前に小傳やら何やら二つ三つ添へられたものである、偉人の思想は劫風に襲はれず、千古に亘つて人の胸に甦るものである、今此書に因つて希臘の哲人プラトーを忍んで見るもよかろー。(定價金七十錢)

▲俗諺論

藤井乙男著
富山房

人は絕え、國は亡びても、俗諺のみは一縷の命脈綿々として絕えぬものである、さて〳〵不思議なものである、と思ふ處に興味もある、研究心も起つて來る、が大抵の人は氣付かずに放つて置いたのは事實である、著者此處に一隻眼ありて、集められた語彙は既に一部俗語辭彙を物すべく饒てあるそーだ、本書はそれに先だつて、先づ俗諺に就いて一般に注意を喚び起す爲に、その性質やら形式やらを詳密に說いたものである、附錄の百四十四頁の俗諺は勿體ない樣な景物である。(定價金九十錢)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▲人生と勞働　栗原元吉譯　奎文館

星の、菫の、忽ち一不如意の事にへ逢ば、忽ち海月の様にグニャリとする、何たる意氣地の無いことであろー、斯ゝる氣風は僅に一部青年の間に見える、これの洗滌は、スマイル氏の如き、勞働主義、精力主義の福音でなければならぬ、吾人は譯者の勞を多とするものである。(定價金三十五錢)

▲假名手本忠臣藏　宮島三昧校訂　富山房

名著文庫の第二十四號として、世には古顔の忠臣藏が、新しい衣裳で現れたものである、裝釘優美、好個の袖珍本である。(並製定價金二十錢上製金二十八錢)

▲プーシキン　八杉貞利著　時代思潮社

千七百九十九年といへば際とは世紀の一轉機である、その年に生れた詩人が、又實は露國文運の一轉機を劃した人である、即ち露國文學を獨立せしめた、開國以來第一の詩人として彼國人の誇とするところである、それは屹然として聳ゆるモスコーの彼の銅像が語へて居る、その詩人はバイロンを愛したといふ事であるが、最後が嫉妬の結果の結鬪といふも面白い、此多才多情の詩人に接するも興なることである。(定價金七十錢)

▲木精　吉野甫著　新韻社

吉野臥城氏の短歌及び十七字詩を集めたもの、氏一流の清麗巧緻の文字に充ちて居る、裝釘の素朴も愛すべく、袖珍本で雙手で擡められる、執扇風を呼ぶ黄昏の逍遥に、之を持つてふらり野路もよいてあろー。(定價金三十五錢)

△家庭教育　京都市下京區佛光寺通　家庭教育社發行

見るからが京都式とは此事つた、之は本擧を初めて揚げた家庭雜誌であるが、紫雲英に蝶々、銀彩色てそれを表紙に淡く刷るなど、御郷の知れる好みである、開いて見れば百花撩亂、新體詩あれば、論說あり、譚話あれば隨筆あり、料理法あれば新流和歌評釋など御丁寧な文字もありて、どの欄と定めないのが御目止まられませうと申すところ、そゞろあるきを厭かせまいとの手段と見える、先づ御婦人方の好讀物と申して置く。(定價一部金六錢五厘(郵稅共))

丘博士著進化と人生、寶文館編輯漢文故事熟語辭典等、其他の寄贈書の評は次號に讓る。

紙數意外に增加の爲、本號にも餘材欄を省く、次號には必ず揭ぐべし。

附録

夏期學生の讀物

岡田朝太郎
松井柏軒
青柳篤恒
笹川臨風
長谷川天溪
片山正雄
千葉掬香
夏目金之助
圓城寺清
下田次郎

中島半次郎
宮崎湖處子
松本亦太郎
河上肇
高木壬太郎
有馬祐政
向軍治
泉鏡花
生田葵山
南條文雄

宮井安吉
內ヶ崎作三郎
寺田勇吉
加藤玄智
大和田建樹
末松謙澄
松村介石
田能村秋皐
烏谷部春汀
紀淑雄

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夏期學生の讀物

はしがき

夏期休暇中の學生をして「餘りに艱澁に失せず、輕快なる文字の底に趣味と實益とを併せ酌むべき好箇の讀み物」を得しめんと欲し、「夏期學生の讀物」と題して廣く大家名士の高見を叩きたるに、快くその請を容れて懇篤なる返書を賜はりたること、吾人の深く榮とし且つ感謝するところ、一半は既に收めて前號の誌上に在り今その殘る一半を集めて、特に本號の附錄となし、汎く江湖の青年學生に薦む、若し能く前號のそれと併せ讀まば、綠蔭繙卷上の好讀物は一瞥の下に諸士の意を迎へて現れん。(編者記す)

○　岡田朝太郎

歷史を讀むが一番面白く又ためにもなると考へ候。

○　松井柏軒

御問合の學生の夏期の讀物に付左に申上候

夏期は山海に放浪して心神を休養すべき時ゆゑ讀書は廢するに如かず强て讀まば何人にも如何なる場合にも有益なる論語など可然被存候右貴答迄　敬具

○　青柳篤恒

復啓後學余が如きの意見を徵せられ光榮に存候僕は特別に夏期に適せりとして紹介すべき讀物を有せず僕の有する所は春夏秋冬の四季折々造次顛沛須臾の間も放すに放し切れぬものに御座候そは曾文正公の家訓にて曾國藩が髮賊の亂閫外の重任を荷ひ兵馬倥偬の間にありながら其兒が文章を送れば陣中親しく筆を執りて添削し其性情を養はれたるもの僕は政治とか法律とかいふ手合の書籍ばかり見て何となく饑ゑたやうな氣のするときの淸涼劑として古人の漢文殊に曾文正公家訓を反覆熟讀致居候先は貴酬のみ。

○　笹川臨風

星や菫の不感服なるは、云ふまでもなけれど、手段の如何を擇ばぬ成功に齷齪するは、確に現代の一病弊と思ふ。此點からして小生は常に學生に向て偉人の傳記を讀むことを奬勵する。しかもその偉人と云ふは、感化力の最も强い、熱烈なる、しかも眞摯の情に富む人を專ら推薦するのである。勿論今の日本には、モーレーのグラドストーン傳の如き、ローズのナポレオン傳、スペンサーの自叙傳の如き、ロッカルトのスコッ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ト傳、リー若くはロルフのシエークスピーヤ傳の如き、堂々たるものはない。又あつたにしても學生には不向きの大篇てあるが、その不向きと向きとを論ぜず、日本には割合に好傳記に乏しいやうだ。そのうちに群鷄中の鶴と信ずるは、德富蘇峯の吉田松陰、それから半分は小說のやうなものだが、矢野龍溪の經國美談などてあらう。歷史には敎科書以外、學生に趣味と智識と感化とを與へるやうな邦文のものは、明治以後には少いやうである。

夏向には簡單て明瞭に面白く出來て居る生物學の書物が多く出來ればよいと思つて居るハックスレー一流の達文なる科學者が出て來たらば、その著書は最も夏向きの學生用てあらうと思ふあるかも知らないが寡聞て分らない。進化論講話のやうなものは適當てあるが、おしまいの方は餘り科學万能てドクマの所があるやうに見受ける。

日本には古來から紀行文の上乘なものが少い。東關紀行だの、廻國雜記だの、小島の口ずさみ、庚子道の記、中空の日記だのは有名てあるが、實は一向面白くない。やはり南谿の東遊記、西遊記、芭蕉の奥の細道などが面白い。支那も文章の國だと誇て居るが、紀行文て通俗的なのは入蜀記、呉船錄、客杭日記ぐらゐてある。趣味ある紀行文は、日本ては、寧ろ明治以後の方が富て居るやうてあるが、山水の形容か若くは自家本位の御託宣が多いのは、ちと下さらない。むつかしい注文だが、文學的て地理學的て史學的て科學的のやうなものが續々出來て來たら是れ最も學生向てある。志賀矧川の日本風景論が今以て賣行のあるのは、通俗的て、文學的て、科學的てあるからだ。紀行文や地理書てはないが、故人ハーン(小泉八雲)の「人知れぬ日本の瞥見記」は觀察の奇警て緻密なると、行文の流暢とて、頗る面白いが、直段が安くないから、學生には不向きてあらう。

膨脹的國民は、探險の氣象に富まねばならぬ。殖民には必ず探險が先たねばならぬ、古いものは姑く措いて、新しいものてノルマンの全露西亞、フレミングの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

滿洲韃靼騎馬旅行記のやうなものは、大きいから學生用には適せぬが、スマイルスの「兒童の世界一周」などは、氣象を雄大にし、識見を廣むるには多少よからう。

罪がなくつて、面白くつて、文學的なのは、フェヤリー、テールスである。キングスレイの希臘英雄傳、アンデルゼン、グリムの諸篇は云ふに及ばずスコット文庫中にある諸國のお伽話土俗傳話は代價が安くつて中々趣味がある。夏の日永に綠蔭濃やかなる處で一椀の澁茶を啜り乍らに讀で居るには適當と思ふ。

人生觀や宗教的のことがかいてある書物は、時弊に鑑みて餘り慫慂せぬ。新しい書物もよいが、夏期休暇の間には、自家の學問修養の爲に、少し古くつてヲーソリチーのあるものを讀だらよからうと思ふ。つまり今猶ほ好評嘖々て生命のある書物は其學科に於けるヲーソリチーたるものである。文學で云へば新體詩を作るものは、ちと日本の歌俳支那の詩西洋のポエトリーの古書を研究するし、文章を好むものは、雜誌學問でなく、古人の名文に目をさらすがよからう。一夜漬の青年文學家が多いのは、敢て文運隆盛と云ふのでもあるまいと存ずるが、ハテ、どんなものやら。

○

長谷川天溪

お尋ねにより愚見申述べく候。元來夏期の讀物は、それ〱なるべしと斷定すると困難にて候はずや。人の性質によりて好む所も異り申べければ、他人が何々の書、適したるならむなどゝ口を出すは以ての外の事と存じ候。若しも何なりとも一言述べよとの事にて候はゞ、各自、其の好む物を讀めと申より外に、意見無之候。

學生としては、夏期休業ほど、呑氣なる時期無之候。お定めの學課のために、苦勞すると無之、悠々と好む處に適き得る時期にて候へば、此の時にて自已の好むものを研鑚し攻究するが最も趣味多かるべしと存じ候。併し其れのみに熱心するとも出來難く候へば、ひつくり返りても讀み得る樣の漢詩集、例へば唐詩選、三體詩などを携ふるも可なるべく、或は論語、孟子などを携ふるも面白かるべしと存じ候。其の解釋などは、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自分勝手に定めて宜しかるべく候。

尚ほ一言を加へ申せば、書籍などは放擲して、釣を試みたり、山野を跋渉したり致して、自然其の物を書籍とするが最上の方法かと存じ候。

○　片山正雄

拜啓夏期學生の讀物につきお尋ねに預り候へ共「餘りに艱澁に失せず云々」の條件に適するもの思ひ當り申さず甚だ殘念の至りに御座候へ共今回は御免被下度伏して願上候　匆々不一

○　千葉掬香

先づ尋常中學の三年生位なところより高等學校の學生位迄を讀者の標準とし、之に夏期休課と云ふ特殊な場合を以て讀書時間の條件とすると、自分は左の書を推選する。

一開闢演義（飜譯）
一通俗武王軍談（飜譯に眞片假名と平假名との二種あり）
　穆天子傳參照
一通俗戰國策（飜譯に二種あり）
一漢楚軍談（飜譯に二種あり）
　宮崎來城氏編の虞美人參照
一東西漢演義
　漢武內傳○飛燕外傳○趙后遺事○飛燕合德合傳
　○西京雜記等參照
一三國史（飜譯に二種あり）
一後三國史（眞片假名）
　八王亂後、左賢王劉淵の出世を以て其の端緒とす。
一續後三國史（眞片假名）
一隋煬帝外史（艷史の鈔譯なり。眞片假名）
　禪眞逸史○艷史參照
一隋唐演義
　一揚太眞外傳
　一開元天寶遺事
　一李太白集　參照
一通俗宋史軍談（通俗五代史なり眞片假名）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一水滸傳（飜譯二種あり）
一水滸後傳（森槐南氏譯）
一續水滸傳（三木愛花氏田中從吾氏合譯）
極めて面白くなきものなり

唐本を讀み能ふ學生諸氏は東京夢華錄、鐵圍山叢談、獨醒雜誌、已辛雜識等を參照せば宋史の裏面を略想像することを得ん、

一元明軍談（平假名）
唐本を讀み能ふ人々は徐文長の雲合奇縱を參照すべし。一通俗女仙外史（女仙外史の鈔譯）

何故に如上の書を選んだかと云ふ理由を簡單に云へば、西洋人と東洋人とを問はず、人間と云ふ者は、一體冬は寒氣に抵抗して强健な豪壯な氣性を有することが出來得るが、夏になると酷熱の爲に精神萎縮、意氣銷沈、手短に云へば自墮落になりたがるんである。こふ云ふ氣候の時に於いて、精神上凡百の想像が絕えず雲集して居る青年學生の讀物としては、近來最も流行の煩悶小說、戀愛小說、其他西洋で云ふ問題小說等（其の作の純審美上の價値はしばらく措いて問はず）はあまり好ましくないのである。之に反して自分の推選した支那の演義物（今人の所謂歷史小說）は、自分の舉げて行つた順序で讀めば、此邦と切つも斷ることの出來ぬ、所謂輔車相依、同文姉妹の關係ある隣國の二十一史の裡面を略窺ふことが出來能ふ。加之に支那の歷史小說は縱令飜譯で讀んでも、原文の性質が性質であるから、其の文章に豪蕩奔放雄潤奇偉の妙趣がある。即ち之を披閱するものの精神を快活俊聰ならしめる。之を一言にして云へば讀者をして興趣と利益との二者を併受せしむることが出來るんである。

終に臨んで、本邦と西洋の書では、自分は如何なる物を推選するかと云へば、前者に於いては

一保元平治物語　一平家物語　一源平盛衰記
一太平記一太閤記　及び曲亭の椿說弓張月等である。

西洋の書では、
一アーギング、ホウソロン、デッケンス、乃至サッカレイの小品。獨逸のものではテオドル、ストルムのイ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ムメンゼエ、及びグーム兄弟の神話である。

○　　夏目金之助

夏期學生のよみ物御催促にて恐縮別段是と申すよも考に浮ばず、何でも勝手なものをよんだらよからうと存候。小生昨日イーツのストリース、オフ、レッド、ハンラハンと申すものを讀んで非常に面白いと思ひ候。是は大學へ買つて置いたから圖書館へ這入れる人は夏休後に讀んで見たらよからうと思ひ候。

○　　圓城寺清

お尋ねの件　平生の學科と嗜好とに由りて違ひ可申、一概には夫れと指定し兼ね候、強ひて指定せば其道〱の雜誌類こそ比較的に輕快に、且日本人自身に趣味と實益とを感受すべく、殊には休息時代の讀物にも適すべく候匆々。

○　　下田次郎

一スマイルスの自助論、品性論、勤儉論、職分論いづれもよし。

一德富蘇峰氏の日曜講壇　（古きもの却て良きが如し）

一夏目漱石氏の小說

中江兆民氏の「一年有半」近藤常次郎氏の「仰臥三年」正岡子規氏の「子規隨筆」等すべて目前に死を控へて書けるものは眞面目にして感動せしむるもの多し。山田箕南氏の行餘集も面白し。

○　　中島半次郎

拜復碧巖錄

Plutarchis The Lives of Illustrtons Men

の二書宜しかるべく存候プルタークの偉人傳は其中の幾分飜譯も出來居りしやう覺え居候。

○　　宮崎湖處子

返事延引申譯も無之多分既に時期に後れて御不用之御事も存候へ共左に

夏期學生の讀物、宗教書類可然存候故は申迄も無之學生の大部が平素宗教研究の暇なしと申し候言は暇（夏休の如き）かあつたら宗教を研究すると云ふ質言なるべしと存候故に御座候

右要領のみ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○

松本亦太郎

夏期學生の讀物人々の好む處に委せ候得ば深夜の星の數も啻ならずゝ存候得ど大方の人に適する書物なしとも云はれ難かるべくと被存候學生時代には太抵流浪的の精神盛なるものにて心身不健康なるものにあらざる限りは所々を旅行漂泊致し樣々の世態を見聞する事何人にも趣味ある事に可有之と被存候併し大ゲサの旅行は夏期と申す時間と學生と申す境遇にては到底實行は六ケ敷御座候故是れに代る可き世態見聞錄樣の書物を推奬致し候事前記流浪的の精神を滿足せしめ候一助に可相成かと被存申候先づ地中海の南方を出發點と致し埃及を旅行致し候には

Fr. C. Penfield: Present-Day Egypt.

と申す小册子宜敷候此書一讀致候へば埃及の生活眼前に躍り出て可申夫より地中海を東北に航してピレウスより希臘に上陸致し候得ば

L. P. Mahaffy: Rambles and Studies in greece.

と申す案内者は最も希臘の事情に通曉致し居り無上の好伴侶と相成可申候パトラスより乘船ブリンデイシイにて上陸致し候得ば

L. Vilari: Italian Life

と申す書以太利の風俗人情を始め社會諸般の事物を描して遺憾無之とても可申か夫れより瑞西獨逸和蘭佛蘭西西班牙等を膝栗毛にてポツ〳〵見物致し候には

W. Dawson の出版せる

Our European Neighbours.

中の各卷を指南と致し候事最も調法に有之是等に加へマーク、トウエーンの Tramp Abroad なども時に取りての興に相成可申候英國に立寄らんとならば少し讀み古るしには候得ど

H. A. Taine: Notes on England.

など矢張可然夫れより太平洋を渡り北米合衆國の活動世界を一瞥致し候には

J. F. Fraser: America at Work.

に越したるは無之是れは經世家も必ず一讀すべき書と存候なほ隣國にて過去の戰友たりし露國內地の俤を見

んと致し候はゞ

F. Palmer: Russian Life in Town and Conutry,

が宜敷と存候日本に關する書物は澤山有之候得どステッド氏の Our New Ally を擧げ置き可申候

以上の書物何れも小冊子にて携帶の便有之文章は至て平易流暢にて輕快なる文字の裏に趣味と實益充溢致し居り貴社の御注文に應じ得て餘り可有且つ何れも廉價に候故學生にとりて都合よろしくと存候其上に一讀筐底に葬られ候如き淺薄のものに無之座右に置て時々の參考とも相成可申候敍述の體も筋道透り居り聯想狂者の談話の如く脈絡もなく夫れから夫れへと移り行く底の亂雜のものに無之精神的清涼劑の一種に相成可申候捕風捉影的の書物は學生の腦を傷ひ申候故隨筆物など讀み候際には撰擇必要と存申候就中夏期は精神の休養第一に有之小說の如く多く人の情緒を刺戟し或は人の心を只管內心の光景に向はしめ候ものは却て心身を疲勞せしめ休養の目的には宜敷からず夏期の讀物としては寧ろ人の心を外界に轉ぜしめ餘り情緒を興奮せしめざるものゝ方遙に宜敷と存申候前に列擧致候諸書の如きは必しも學生に限らず學者にても實業家にても官吏にても婦人にても老人にても凡そ世態人情に對し多少の興味を有する人は一讀必ず休養の即功有之候事請合ひに御座候夏期休業中の讀物に對する私見先づ以て右の如くに御座候也。

河上肇

○

御返事相おくれ失禮致申候小生は貴誌中央公論の類最もよろしかるべく歟と存候其の他に是非青年に勸めたく思ふ書は有之候へ共御下問の各條件を完備致候ものは一寸思ひ付き不申候に付き差しひかへ申候御新刊の貴誌を見て思ひ出したるまゝ不取敢御返事申上候匆々不具。

讀賣新聞社にて　高木壬太郎

○

拜復夏期學生の讀物指定可致樣御申越の趣一寸御返答に苦み申候得共、ユーゴーの『レ、ミゼラブル』カライルの論文集。テニッンの詩集等は小生曾て夏期の友となし趣味と實益とを得たる者に有之候。近來我國に

て著譯相成候書物に就ては至て不案内に候得共、ダーウインの『種の起源』。プラトン全集。ゲーテの『ファウスト』等は何人にも好箇の讀物と存候。又古きものにては馬琴の八犬傳、弓張月。白石の藩翰譜、折たく柴。徂徠の問答書、其他諸家の漫筆（百家說林に收めあり）近頃のものにては蘆花、紅葉の小說。民友社の十二文豪。諸傳記類は何れも夏期の讀物として好箇のものと存候　不具。

○

有馬祐政

拜啓御たづねの件日限無之候爲打延ばし居候ひしが餘り遲くなり候も失禮ゆへ卑見大略左に陳述可致候夏期學生の讀物には(一)精神修養の書(二)思想錬磨の書(三)言語文辭習熟の書の三種を推擧致候而も成るべく各種一冊又は一部にまとまり候ものを熟讀復誦候事最も願は敷候何となれば夏休は隨分長期に亘り且つ何等繋累なかるべければ連續的又統一的に讀習するに至極適當の時節と存候故に候(二)と(三)につきては人々各其志に應じ撰擇可致候(一)に對しては何人にも共通に言ふべき事なれば小生は自己の經驗に基づき又現今の狀勢に鑑みて專門學校學生諸子には本年は「老子」を玩味せられむ事を希望致候佐藤牧山の「老子講義」はいと面白くいと有益に讀まれ可申事と愚考致候早々。

○

向軍治

イェーリング、權利競爭論　獨乙語市內本郷南江堂にある　五十五錢　立憲政治の下に立ち乍ら封建制度の餘弊を脫却し能はざる意氣地なしの日本人の必ず讀まざるべからざる本。

ステイテル、グラニート　南江堂十錢　序文に餘程面白い思想が表はしてある自稱神佛輩淺薄の徒苦悶する意氣地無しの學生の必ず讀むべき者此等時勢を矯むるに適切なる書は神田錦町中央大學夜學部に於て余が講義して居る健全なる個人主義と健全なる社會主義とは軌を一にするものであると云ふ余の立脚點から社會主義を唱道する本も同夜學で講じて居る忠君愛國武士道抔と云へる時勢後れの奴隷主義を脫却して眞の愛國主義人道主義に進まんとする人は先づ上に掲げた書から

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

始めよ。

○

泉　鏡花

地方へ參りをり候ためおはがき行ちがひにあひなり此頃やうく拜見延引いたし候おたづねの件別におもひつきもござなく候へども、

東西遊記　種彥諸國物語　七部集

など可然と存じ候前のは橘南谿のいづれも人の知つたる書物に候。

○

生田葵山

拜復些と御返事に困り候と申は我等に向つて恁る答へを需められ候らへば我等はいつにても小說を御讀みなさいと申度きに候夏にても、冬にても、戶外にても、室內にてもに候が學生が難かしき顏の敎師の許を離れて浪白き海濱などに日を送る時に讀めば受ける印象は大なる可く其處に人生の變化を覗ひ、運命の不可思議なる事を知り、或時は作中に自己を見出して快樂を得ると共に省慮し、又は薄倖なる才子佳人の境遇に同情して淸き淚を絞るなど知らずくの間に感情の訓練を受け、我が世樂しき藝術心を養ひ得るなど手前味噌の効能は云はずもがなに候されど徒に好奇心を滿たさしめんとする小說又は無意味に強き刺激を與へんとする小說は讀まぬがよろしかる可く如何なる小說が藝術的良心を持續して書かれしかは名ある批評家の言に耳傾けて撰擇する方よろしからんと存じ候先は。

○

南條文雄

拜復去月十五日附を以て「夏期學生の讀物」とすべき書目を可申上樣に申越に候處小生は近來は新書は一々閱讀の暇を得不申候に付普通の讀物としては「醉古堂劍掃」「菜根譚」等の書は最も有益ならんと存候外には一向氣附き不申此段乍延引申進候也。

○

宮井安吉

拜復夏期學生の讀みもの如何との御下問には一寸御返事に困じ申候古人の申されし通り四時とも『讀書之樂々陶々』にて讀物の種類に四季の別のあるべき筈も無之と存じたゞ極暑の節は餘り重苦しく長きものは倦み易く詩集ことに和漢のもの最も然るべく自家の好を申

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さば淵明集を推し申度、寡識の身として嗚呼かましけれども御返事迄草々。

○　内ヶ崎作三郎

余は特利に夏期に適する書籍を指定するの甚だ困難なるを感ず。蓋し名著傑作は之を冬夜に繙くも、春曉に誦するも將又、夏夕に閲するもその價値に増減なく、且つ讀書生たるものは四時之を愛讀するの根氣なからざるべけばなり。されど個人として余の嗜好をいへば余はラスキンの「近世畫家」中の自然に關する部分とトローの「ワルデン」とを綠陰薫風裡に朗誦せんことを欲す。將來英文學を研究せんとする青年諸士に對しては「アラビア夜物語」、「エソップ物語」、「ロビンソンクルーソー」等を推薦す。是等の書は名高き割合に敬遠せられ居るものなれども、英語英文學に寄與する所甚だ多し。夏期の讀物として平易にして雅趣ありかねて實益を供すべし。

○　寺田勇吉

吾輩嘗て謂らく夏期の學生に於けるは猶ほ安全辯の蒸汽機關に於けるが如し蒸汽機關は安全辨に依て其の危險を豫防するを得べく學生は夏期の休業に依て其の健康を保持するを得べし果して然らば學生の夏期に於ける好箇の讀物は政治經濟法律文學史學哲學理學等の印刷せられたる文字にあらずして社會を說明し天然を描寫したる乾坤の活書なるべし是れ彼等の心身休養に最も適切有効なるが爲なり彼の暑中休暇の來るや速に歸省して兩親の慈顏を拜し其は則ち新知舊友相携へて山に遊び河に釣り夜は則ち兄弟姉妹相共に庭床に踞して月を望み涼を納れ或は單身輕裝遠く名勝舊蹟を尋ね神社佛閣に詣で或は溫泉に浴し海水に浮び或は高山に登り太洋に航し或は韓半島を巡歷し、或は滿洲の新戰場を踏査し或は北門の新領土樺太を訪問し、或は臺灣經營の治績を視察するが如きは吾輩の所謂乾坤の活書を讀むものにして其の趣味の深き實益の多き世豈に之に勝るの良書あらんや若し夫れ乾坤の活書を讀むの傍朝夕の伴侶と爲すべきものに至ては聖經賢傳を始として幾多の好著良作あり隨意に之を繙閱するを妨げず要は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

唯書籍を以て我心の注脚と爲すの本旨を失はざるに在るのみ庶幾くは古人の糟粕に醉ふの患なく心眼を實驗觀察の上に開くと共に心身休養の目的を達することを得ん乎。

○　加藤玄智

拜啓貴社益々御隆盛奉賀候扨御申越の「夏期學生の讀物」に付御注文の如く艱澁に失せず趣味と實益の如き讀物はなか〳〵心付かず候併し思ひ出てしまゝ二三を記載せば左の如きものに御座候はんか。

井上哲二郎氏著　釋迦牟尼傳
丘淺次郎氏著　進化論講話

尙英語を讀み得る學生の爲には南條博士と拙者と協集せし英文東洋學名家詩文抄　全二冊
及邦文にては拙著「宗教講話」
の如き多少此目的に貢献することを得ば光榮これに過ぎずと存候早々。

○　大和田建樹

寢枕の下、籐椅子の上、いつもわが銷夏の友として親まるゝもの十種を撰びて、御答にかへ申候、
膝栗毛　和合人　鶉衣　東西遊記　雲萍雜誌　狂言記　風俗文選　八犬傳　千々廼舍集　志濃夫廼舍歌集。

○　末松謙澄

夏期の讀もの云々の御來示別に申上候程の意見も無之候此段御了承被願候。

○　松村介石

若夫れ修養としては莊老二書を携へ行き、之を熟讀玩味するに如くはなし。又た今日智識上に缺くべからずと爲すべきは、古今萬國の興亡に通じ、宇內眼下の形勢を審かにするに在り、而して之れが爲めには、拙著歐洲近古史と萬國最近史とを勸む。

○　田能村秋皐

へなぶり

卑見御求めに接し、手前物を廣告然と申上候は恐縮の儀に候も善く言へば自信、惡く言へば自惚は、誰にも免れざる以上、手前物を申上候は最も正直なる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

所業と存候、などゝ理窟を附け候ものゝ、實はこゝいらがヘナブリ黨の呑氣な所と御一笑可被下候、「趣味と實益」とは、實に兩立せざるもの、「輕快なる文字」云々より、「趣味」の語に重きを置き、自薦投票如此御座候、延引御容赦。

よみうり社にて

○ 鳥居部春介

夏期學生讀物に付ては別段思ひ着たる良書之れなく候併し小生の書生時代には夏期休業に唐詩選の暗誦などいたしたるものに御座候おしなべて夏期の讀物には理窟ポキものよりも詩や歌の朗誦は肩が凝らず宜しきように考へられ候敬具。

○ 紀雄

拜復「夏期學生の讀物」に就いての御返事延引候、小生は無變單調な學窓の生活を暫く離れたる學生諸君に寧ろ田園、海濱、林間、山野等到る處に讀まれ得る清新な自由な愉快な教訓的暗示的な「自然の書」をば御薦めすると同時に Jhon. E. Marr の The Scientific Study of Scenery とか Lord Avebury の The Beauty of Nature とかラスキン全集の或部分とか、自然をうたひし和漢洋の詩集などを二三冊是非背嚢へ御入れあらんやう希望致し候又ターナーの如き風景畫家の作品(複製の)又はさる作品の揮灑に苦心せられたる事を記るしゝ傳記なども、好風景を前にして讀まれたらば一層面白かるべく存候、

○ 齋藤唯信

拜啓貴社彌御多祥奉賀候然ば過日御照會に相成候往復はがき他の書類に紛れ込み本日漸く見出し拜見仕候早速御返事可致の處前條の次第にて等閑に相流れ寔に申譯無之候御照會の事項に就きては最早御答申上候時期も相過ぎ候事と存候へども只一言申上度は私の考る所にては「三世の光」なる書籍文章も易き故如何と存じ候先は御わび申上度如此御座候拜具

前號附錄夏期學生の讀物目次

幸田露伴　野口米次郎　釋宗活
戸川殘花　山縣五十雄　村上專精
坂井久良岐　登張竹風　小杉天外
小栗風葉　前田彗雲　塚原靖
尾上柴舟　石川半山　谷本梨庵
姉崎正治　網島梁川　中村不折
塚越芳太郎　小笠原長生　伊藤銀月
巖谷小波　福本日南　内藤鳴雪
堺利彥　加藤咄堂　柳田國男
赤堀又次郎　足立北鷗　大槻如電
中島孤島　那珂通世　藏原惟廓
正宗白鳥　德田秋聲　井上圓了
畔柳芥舟　加藤弘之　佐治實然

徒らに論鋒の犀利を喜び、詞華の絢爛を愛するは、本旨の本領にあらず、犀利可なり、絢爛可なり、而かもその以上に、日常眼を社會の機微に潜め、取るべきの裨益と去るべきの群疑とを擧實に指示して、讀者が處世の良友たらんと期するところに、本誌の面目は生動するなり、從來一問の生ずるところ、直に高見な大方達識の士に叩き、これを世に紹介したるもの、聊か微衷を語るに足らんか、予の愛讀書、夏期學生の讀物、及び男女學生交際論の如き、事の小や言ふに足らざるも、意の動くところは正に之なり。

今本號まで收めたる、男女學生交際論の目次を擧ぐれば左の如し、

▲第二十年第九號(九月發行)……竹越與三郎氏
▲第二十年第十號(十月發行)……三宅雄次郎氏
▲第二十年第十一號(十一月發行二百號)……安部磯雄氏
▲第二十年第十二號(十二月發行)……村上專精氏
▲第二十一年第一號(一月發行)……下田歌子女史
▲同　上……海老名彈正氏
▲第二十一年第二號(二月發行)……登張竹風氏
▲第二十一年第三號(三月發行)……寺田勇吉氏
▲同　上……青柳有　氏
▲第二十一年第四號(四月發行陽春號)……浮田和民氏
▲同　上……鎌田榮吉氏
▲同　上……中島德藏氏
▲同　上……成瀨仁藏氏
▲同　上……井上哲次郎氏
▲第二十一年第五號(五月發行)……下田次郎氏
▲第二十一年第六號(六月發行)……中島半次郎氏
▲同　上……野口米次郎氏
▲同　上……建部遯吾氏
▲第二十一年第七號(本號)……福田英子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告によりお申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

帝國文學

第拾貳卷第六號目次

●スチヴンソンを論ず……野上臼川
●駁萬葉集字音辨證排斥論……木村正辭
●異國草……折竹蓼峯
●雨にぬれぱや……高田浩雲
●皐月野……辻村鑑
●壁畫の前……有松曉衣
●海のほとりにて……南日萩男
●若葉みどり……境野天花
●孤獨……生田長江
●情感的學風を論ず、歌劇興る
●英國欽定詩宗の近什、新刊批評いろ〳〵

定價 壹冊金拾五錢郵稅金壹錢 六冊前金郵稅共金九十錢 十二冊前金郵稅共金壹圓六十五錢

丁酉倫理會 倫理講演集

第四拾五輯目次

講演

●愛國心の二種類……文學士 吉田靜致
●スピノザの沈勇……文學士 吉田賢龍
●男女共學に就て……文學士 溝淵進馬

泰西思潮

●エミル・ライヒ氏の帝國主義と女人との關係……千葉鑛藏

雜錄

●本會記事、第三回家族會記事、良人の選擇、知識の食傷、
●お嫁以上の着眼、哲學に就ての過慮、天籟地響、應問、

定價 壹冊金拾貳錢郵稅金壹錢 六冊前金郵稅共金七十貳錢 十二冊前金郵稅共金壹圓三拾貳錢

發行所 東京銀座壹丁目 大阪北久太郎町 大日本圖書株式會社

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

幸田露伴氏著

天うつ浪 第貳

我文壇の大作たる「天うつ浪」の第二は出でたり、心機の妙人精の微、奇趣横溢せる、卷を重ねて更に汪洋海の如し（美本三百頁）

實價八十錢 郵税十錢

雪蕾氏著

かくれ蓑

◎革命的趣味を有する人は讀むべし
▲星と菫に醉ふ人は讀むべからず
◎義氣を養はんとする人は讀むべし
▲肝ッ玉の小さき人は讀むべからず
◎俠骨を磨かんとする人は讀むべし
▲腦味噌の乏しき人は讀むべからず

前編實價四十五錢 郵税六錢

廣津柳浪氏著

校訂 河内屋

妖艶の色更に富麗にして玉姿の清癯愈々慘なり、柳浪氏の河内屋は明治文壇の珍品也、茲に新裝特に意を凝らし緑蔭樹下の清讀を待つ

實價四十錢 郵税四錢

森鷗外氏著

改訂 水沫集

鷗外博士の「水沫集」は品切の爲め久しく高需に背きたりしが今回特に氏が通閲を乞ひ改訂をも加へられたり本書の發行は大方讀者の渇望を醫すべきを疑はず

實價壹圓卒錢 小包料十五錢

發兌元 東京日本橋 春陽堂

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋銀座四　東海堂
仝　日本橋呉服町　北隆館
仝　本郷四丁目　文明堂
仝　本郷本富士町　盛春堂
仝　京橋區鎗屋町　良明堂

關西大賣捌所

大阪備後町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

中央公論 廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

廣告一手取扱　神田千代田町　博報堂

中央公論 定價表

一冊	金拾五錢
六冊	金八拾五錢
十二冊	金壹圓六十五錢
郵稅共	

●但海外（清國は本邦郵便局所在地を除く）は一部郵稅六錢を要す

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし
一弊社は振替貯金（三四）に加入いたし居り候間振込用紙御入用に候はゞ御申越被下度候
一郵券代用の場合は必ず壹割増のこと
一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす
一前金切の節は帶封に朱書いたすべきに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべきに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治三十九年五月廿八日印刷
明治三十九年七月一日發行

發行兼編輯人　東京市本郷區駒込四片町十番地　武田福松
印刷人　清水金右衛門
發行所（電話下谷九一九）　反省社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

銀製洋盃及木盃



紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一七圓五十錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十五匁付
一金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味五十匁付
一金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味六十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ツ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸臺三ツ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸　同　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸　同　同目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也　同徑四寸丸　同　同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸　同　同目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸　同　同目方正味二百卅匁付

一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
一文字彫刻　一字　金拾錢
一大字彫刻　一字　金七拾錢

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商　玉寶堂

（電話本局特九六五　一二四四）

MADE IN JAPAN
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA